
風都紅塵戦奇譚 四．皇公会議

秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風都紅塵戦奇譚 四・皇公会議

【Nコード】

N7698F

【作者名】

秀

【あらすじ】

吐蕃暦331年8月、吐蕃皇国の首都・大都にて『皇公会議』が開催される。嵐は大都である男から「任務」の指令を受け、この会議の始まる前から王城・円城内で臨時職員として（自称）弟子の百と共に働き始める。開始直後から不穏な展開となる『皇公会議』。嵐と百は否応なくそれに巻き込まれていく。一方、同時期に大都では皇立研究所職員・研究員採用試験も行なわれていた。先の事件で心に深い傷を負った明青も、その傷を乗り越えて試験に臨んでいく。

1・師弟の旅行き

天は高く、遠く、あおく、青く、蒼く。
地は遙か広く果てしなく、あかく、朱く。
紅く。

その狭間はただ濁りくすみ、霞んで天の蒼を侵蝕してゆく。
駆け抜けるは一筋の風。
渦巻きはじけ、地を撫で草を揺らし、彼の髪を大きく弄る。

赤茶けた髪の毛を煩わしそうに揺らして、彼は天に目を遣る。
白けた霞みの切れ間に覗く蒼い空。
ただ風が流れてゆく。

北へと。

「北か……」

彼は眩き、ふると首を振って視線を落とす。
伏せた目蓋の蔭で、緑柱石の瞳が果てしない闇を湛え、きらりと
光を弾いた。

1・師弟の旅行き

後代の歴史書はこう語るであろう。

吐蕃皇国第32代皇は、皇国後期の皇の中では最も善政をしいた
皇であったと。

彼の皇の治世では、周辺の諸民族との小競り合いはいくつかあつ
たものの、大規模な軍事的事件もなく、皇国民の生活はますます安

定したものであった。

また、彼の皇の御世の特徴を挙げるなら、大規模な土木事業が多く行なわれていたということである。

大陸横断の交易路も、皇国の勢力範囲内ではまずまず整えられ、治安もやや改善された。しかしやはり特筆すべきは皇国全土を網羅する大運河を完成させたことであろう。

これが完成したことにより、皇国内の人や物の流通が盛んに、かつ速やかに行なわれるようになり、特に商業が活発に行なわれるようになった。また、皇国中に各地の物や情報が伝わり易くなり、国としての一体感も強まったといえる。

（例えば他にどのような欠点があったとしても）

運河を往く船上で流れゆく景色を眺めながら、嵐は思う。

（確かに前皇は偉大な事業を成し遂げた皇として伝えられてゆくのであるうな。こんなに途方もなく巨大な、便利なものを本当に造り上げてしまったのだからう）

川面を渡る風が嵐の赤茶けた髪を弄って抜けてゆく。

嵐の傍らでは、「自称弟子」の百が船腹を叩く白い波飛沫やその奥の水底を覗き込んでしきりに歓声を上げている。山の麓の沙漠の町で生まれ育った百にとって大河や運河は生まれてこの方15年、たくさんのお体験を与えてくれるもののようであった。といっても旅を始めて既に一ヶ月は過ぎ、内ほぼ一ヶ月は運河を巡る定期連絡船の旅であったことを思えば、そろそろ物珍しさも薄れてこようなうものだが、百にとってはまだまだ船旅には目新しい発見が盛りたくさんであるようだ。

季節は既に6月に入っていた。彼らは数日前に沢東公国を出て以来、馬と船を使いながら旅が続いている。幸い、好天にも多く恵まれ、一ヶ月前に沙南公国を出て以降は非常にいい速さで旅が続けてきていた。

この辺りは緯度も高いため、春の訪れは遅い。ちょうど今頃の季

節が、短い春の最盛期といってよい。

運河の周囲は、町や村以外はだだっ広い耕作地と未開墾の平原とが広がっている。実のところこの辺りは吐蕃皇国有数の穀倉地帯である。ここで作られる農作物が吐蕃皇国という巨大な国を支える土台であるといっても過言ではない。

嵐の見る先にもきれいに耕された畝と、そこで働く農夫たちの姿があつた。現在は苗や種を植える作業に忙しいようであつた。

のどかといってよい景色の中、しかしその視線がこの船の行く先を捉えるとき、嵐の翠色の瞳には堅い光がちかちかする。

春色の平原と、運河の先。今はまだ影すら見えない吐蕃皇国首都「大都」。このまま順調に進めば、半月後の距離に、確かにそれは待っているのである。それを思うとき、嵐の穏やかな表情に、ふつと堅いものが過ぎるようであつた。

ぼんやりと船旅を楽しんでいる嵐を、百がつついた。

「師匠、あれあれ、あのおっきなの、何ですか!？」

興奮したように水面を指しながら、百が嵐にきらきらした目を向ける。嵐が指された方を見ると、そこには数頭の河海豚が波を切つて船と併走していた。嵐が眠そうだった目をぱっちりと開く。

「ほほう、珍しい。あれは『河海豚』だ」

「かわいるか? っていうんですか? おっきいしかわいいですね! それにすっげー速いや!」

「そうだな。あれは海にも似た種のものがあるが、それもあのよう

に体が大きく泳ぎが速い。それに賢いのだという」

「え、じゃあこいつ、海にもいるんすか?」
百が目を見開いて嵐を振り返る。百は内陸育ちであつたが、先日沢東公国に滞在中、一度海を見たことがある。といつても港の岸壁から遙か水平線を眺めただけであつたが、彼にとっては相当なカルチャーショックであつたらしい。

「いや、こいつらは海では暮らせない。似た奴がおるといふことだ。それに、こいつらと遇えることだって相当に珍しいことなのだぞ。こいつらはちょうどこの辺りにしか住んでおらん。全体数も少ないから、この辺りの者もあまりたくさん獲らんようにしておるくらいだしのう」

「え、こいつって食えるんですか!？」

「…何をそんなに驚くことがある?そなたとて大蜥蜴を食うであらう?」

「…」

シヨックを受けたような百の表情に嵐がにやりと笑った。百はいまいち納得できないらしく尚もぶつぶつ言っていたが、やがて刻々変わる景色に再び興味津々の視線を向け始めた。

嵐と百、「一応」師弟の間柄の二人はこんな感じで旅を続けていた。

吐蕃暦331年5月初め。西の公国・沙南公国を、春祭である『花の祭』でにぎわっている最中に旅立ち、まずは東の公国・沢東公国を目指した。旅を続けるのに必要な移動手段である馬を手に入れることと、吐蕃皇国の状況を、より広範に掴むことが目的であった。沙南から皇国中を網の目のように結ぶ運河の定期連絡船に乗って約一カ月、5月の末には、彼らは沢東公国に着いた。

沢東公国でも春を祝う祭が行なわれており、そこでは様々な大会が開かれていた。『力自慢大会』もその一つであった。これは文字通り腕に覚えのある者が自分の技を競うもので、相手を殺したり大怪我をさせたりすることは禁じられているが、それ以外は自分の得意分野で1Rを競うという、異種格闘技戦といったものであった。

沢東公国の現在の領主・東公は豪放な人物で、また武勇の者を好むことでも知られている。だからこそ、沢東公国ではこのような大

会も開かれるのである。また、しばしば公自身が大会をご覧になることもあるという。

今回が正にそうで、天覧試合となった今年の大会は出場者の気合も違っていた。何しろ入賞賞品は豪華だし、もしもここで公の眼鏡に適うことにでもなれば、近侍に取り立てられる可能性だってある。そんなわけで、会場は異様ともいえる盛り上がりであった。

そんな中、飛び入りで出場した百は、なんと見事に優勝してしまったのである。

しかし賞品である金を受け取った百は、複雑な表情であった。というのも、今年の賞品は優勝が金、二等が馬で、実は百は二等の馬が目当てであったりしたからである。申し訳なさそうな表情で戻ってきた百を、嵐は笑って迎えた。

「そんながっかりした顔をするものではないよ。見事なものではないか。新参者が優勝を搔つ攫うなど、なかなかあるものではないだろう。そなたは立派だぞ」

嵐の言葉に百はぱあっと嬉しそうな表情になったが、すぐに困った顔に戻る。

「でも馬がいるんですよ？これだって重いし。市にだってそんなに馬はいなかったし……」

嵐は百のあまりの無欲さに笑いをこらえることが難しかった。しかしそれをおさえて、心配することはない、と百に告げた。

その後、嵐は二等となった人物と交渉した。その結果、百の優勝賞金の三分の二と二等賞品の馬とを交換。更に彼のはからいでもう一頭、馬を入手することに成功したのである。

彼らはその後しばらく沢東公国内で装備を整え直し、10日ほどの後に再び旅立った。今度は馬二頭を伴った旅である。

彼らの旅は基本的に昼間移動して夜は休むといったものであった。これが沙漠や或いは北方草原地帯の治安の悪い地域であったりした

ら、昼夜逆の行程を採ったりもするのだが、この辺り、つまり沢東公国や吐蕃王国領域は治安が良く、気候も穏やかであるため、無理をする必要がなく、安心して旅をすることができるのである。

沢東公国までの旅はスピード重視で運河を巡る船旅であったが、今度は、馬で行ける道は馬に乗って進み、それ以外は運河を渡る連絡船等を利用する、といったものになった。

ここで百がいささかならず意外に思ったことに、嵐は馬の扱いに慣れており、また、乗馬も相当巧みであった。

嵐は特に運動神経が鈍いというわけではなかったが、何しろ体格も細く、小さい。百は初対面で嵐を（遠目とはいえ）少女と勘違いしたくらいである。体力も特に優れているわけではない。どちらかといえば知恵を武器に渡り歩く人物である。そんな自分の師匠の意外な一面を知って百は、更に彼への傾倒を深くしていったのである。

一方百は、馬の扱いに全く慣れていなかった。何しろ彼の生まれ育ったのは沙漠地帯の村であり、生業も樵。仕事に馬力のある動物を使うこともあるにはあったが、足場の悪い山道に向いているのは馬よりもむしろ牛の方であり、しかしそれすら貴重品であった彼の村で、そもそも馬に触れる機会などほとんどあるはずもなかった。そこで百は、馬の引き方から世話の仕方、そして騎乗術まで、一から嵐に教わることとなったのである。

嵐としても、それを見越していたからこそ旅の早期で馬を手に入れたかったのである。百が自分について来ると言う以上、彼には早々に嵐と同等に馬を扱えるようになってもらわなければならなかった。

「吐蕃皇国は大まかに四つの特徴的な地域に分けて捉えることができる」

だいぶん乗馬姿のようになってきた百に、馬上で嵐が話して聞かせ

る。

「軍事面にもその傾向は顕著に現れておる。

例えばここ、東の沢東公国は皇国一強力な歩兵を有しておる。その兵力も約十万と最も多い。というのも、皇国の東側は平地が多く、土地も肥えておる。大陸中有数の穀倉地帯だ。だからこそ、この辺りに住む人間は多い。そしてそれを賄って余りある収穫が、ここでは得られるのだ。だからこそ、人間が多く、自然兵力も多く集めることが可能となる。そして土地は平坦。起伏も乏しく巨大な遮蔽物も少ない。こういった土地での最も有効な戦い方とは圧倒的な兵力で押すことだ。だから、東の軍隊は重装歩兵の大軍が主力となっておる。

一方、北は騎兵が強い。何と言っても騎馬遊牧民族の土地だからのう。一般に騎兵一騎の能力は歩兵四人とほぼ同等と考えてよい。

ゆえに全体の兵力が四分の一でも騎兵は歩兵に引けを取らぬ。むしろ、破壊力と機動力が増す分、四分の一の兵力でも勝てるであろう。

しかし現在の北の総合軍事力は、あまり強くない。度重なる内乱や気候異常による民族の移動によって北の地域の住民自体が減少の傾向にあるためだ。例え必要があつて全兵力を集めようと、無理であろうな。何しろ遊牧生活を送っておる者は、基本的に家畜を養う場所を求めてより条件のいい土地へと移って行くものだ。招集をかけようにもどこに誰が居るか、把握しておる者はおらぬであろう。嵐の話をどこまで理解しているのか、百はしかし、熱心に彼の話に聞き入っていた。

「それじゃあ、沙南はどうなんですか？」

「うむ。沙南公国のある西側はちと事情が違ふな。まず、基本的に西と南は軍事力が弱い。

西は沙南公国を見て分かるとおり、基本的には商業を生業としておる。しかも河の支流が多く、更に大地の起伏も激しくて高い山も幾つかある。ゆえに、大軍を持ちにくい土地柄といえるのだよ。例え人数を集めることができたとして、それを効果的に動かせる土地

柄ではない。東西の交通の要衝の地であるから、人の出入りは激しいし、定住民と同等、移動民も多い土地柄だ。なかなか一つの意思の下に集う兵士を集め育てるのは難しいであろうな。

実際、現在の沙南公国の有する軍事力は他の二公国に比べ、格段に弱く兵士も少ない。しかもその機能のほとんどは警察機能に占められている。あまり「軍事力」とはいえぬな。

ただし、他の地域と比べて西側には潜在的な兵力が非常に多い。傭兵の存在だ。「沙漠の道」と「海の道」から入ってくる他国人や移動民族は、皇国中で一番多く西側に集っておる。現在も沙南では傭兵を公国軍に加入させておる。彼らは忠誠心といったものには欠けておるかも知れぬが、功名心と実戦経験から培われた戦勘と度胸は正規軍兵士に比べて格段に強い。ある意味、正規軍よりも優秀な軍隊を作ること可能なのだよ」

「へええ……」

百の出身地である村、『黄瀬』も沙南公国の領地内である。もちろん百は沙南公国本土に行ったことなど今までほとんどなかったし、無学で政にはあまり関心のなかったこともあり、そんな国のシステムの話など、彼は今まであまり知らなかった。というよりも、ほとんど興味がなかったと言った方が正しい。だから沙南公国軍の内情など、今まで全くと言ってよいほど知らなかった。

沙南公国では徴兵制度もあれどゆるく、『県』『邑』までは男子15歳から強制的に一年間の徴兵が課せられていたが、それより小さい行政単位の『村』や『町』などにはそれがいきわたっていないことが多かった。百は今年15歳になったわけだから、徴兵の心配をしなければならなかったのかもしれないが、『黄瀬』は行政単位としては『村』であり、あまり強制力はなかった。実際、毎年行きたい者だけが数人徴兵に応じている程度である。百の四人の兄も、それぞれ個別の理由はあれど、全員徴兵を受けていない。それでもそれは特に例外的なことではないのである。百とてこのままでは結果的に徴兵を受けることはないであろう。

「南はまたこれも特殊な土地柄だ。まず結論から言えば、南には軍事力と呼べるものは存在しない。せいぜいが民兵程度の警備組織だ。これは南の土地柄に因る。」

南は少数民族　　と言うよりも、一族毎にコミュニティをつくって住まっている。その居住地もそれぞれ相当に離れている。故に相互の交流が薄く、反対に一族内の結束力は異常といってよいほど固い。また排他的で余所者には猜疑心と警戒心の強い人柄ゆえに、商売人や傭兵といった移動職業民からもあまり関わるのを好まれないし、彼らも基本的に余所者を信用して雇おうということをしていない。しかし自分たちの身の安全は図りたいので、武力は必要だ。だから彼らは自ら武器を取り、自分たちの身を守る。いわゆる自警団だ。

こういった理由で南には統一の軍事組織は存在しない。侮るのは危険だが、国としてそもそも機能せぬ武力は、こういう場合あまり考えに入れることはせぬ」

「へええ…そう言えば、母ちゃん言ってたなあ。南の人間は恩知らずで怖い。何を考えているのかさっぱりわからない。だからあまり係わり合いになるんじゃないって」

「ほう？そのようにそなたらの間では言われておるのか？」

百の言葉に嵐が目を見開いて問い返す。

「うん、オレもあんまり南の奴らと会ったことないけど…でもなんか、目付きの悪い、やな感じの奴らだった」

「ほほう…」

顔を顰めて答える百を、嵐は興味深げな視線で見返して、頷いた。

「最後に中央の吐蕃王国だが、これは王国独自の軍事力というよりも、皇国の軍事力と言った方が分かり易いであろう。王国と皇国の軍は既に不可分の組織となっておるからな。」

ひとことと言えば皇国全土の各軍のいいところを集めたものだ。

首都　　現在では大都だが　　そこにも常駐軍は配備されておるが、基本的に皇国中の軍事力は全て吐蕃皇のものだ。皇の命令一つで三公国軍を動かすことができる。南とて、皇の命令に逆らうことは不

可能だ。命令さえあれば、彼らも兵力を揃えて皇の指揮下に入らねばならぬことになっておる。

また、皇直属の軍もある。近衛兵团だが、これは皇国中から選りすぐった人材を登用して組織されておる、いわばエリート軍。はえぬきの精鋭による最強軍と言われている。これが常に皇を、王城を守っている。

これの特筆すべきところは呪術を用いるのが特に優れているというところだ。

首都の大都には、皇の住いでもある王城・円城があるが、この城内に「皇立呪術研究所」がある。ここには術力を有する者やその研究に秀でた者が所属していて、日々研究を重ねておる。その結果は政事や軍事に応用されておる。

その内情はなにぶん秘密事項が多すぎて分からぬことの方が多すぎるが、実際現在までに相当な成果を上げておるのは事実だ。その分余計に不気味さがあるな」

嵐の講義は百には非常に分かりやすかった。しかしなにぶん情報量が多すぎ、更に詳しい分野まで入ってくるようになれば、いずれ分からぬことも多くなってくるのだらうと百は思った。

しかしそれでも、百にとって嵐の語る事柄の全ては、非常に興味深いものであった。河海豚を眺めるのと同じきらきらした目で自分の話に聞き入る百を、嵐は頼もしく、かつ興味深く思っていた。

日の暮れる頃、彼らは馬を停めて野宿の準備を始めた。

まだまだ体力的にも余裕があり、特に百などは夜通し移動してもいいぐらいに思っていたのだが、嵐は無理をする必要はないと判断していた。

何しろこの辺りは既に緯度も高い。日中は汗ばむほどの陽気でも日が落ちた後は急速に寒くなる可能性の高い土地柄である。それに

人間が元気でも馬にも休息は必要である。

急ぎたい旅ではあるが、無事に目的地に到着することの方が最重
要事項であった。

適当な樹に二頭の馬を繋ぎ荷を降ろして休ませる。

その近くに火を熾して夜食の準備を始める。赤々と燃え始めた火
の周りに寝具にも使える大き目の布を二枚セッティングすると、す
っかり野宿の雰囲気は整った。

そういった作業をしている嵐の向こうで、百は棒と木切れで何や
ら武術の稽古をしていた。

昼間、移動中は嵐の語る講義を聴き、夜、眠るまでの時間は武術の
稽古に励む。これが百の旅の日課であった。稽古と言っても移動中
でしかも二人連れの旅である。そんなに大げさなことはできない。
基礎中の基礎である体捌きと筋力トレーニング。この繰り返しをひ
たすら正確に、たくさんこなすのである。この稽古は、嵐が指導し
て毎日続けさせているものである。

嵐は基本的に戦闘能力には欠けている。しかしそれは一般戦闘要
員と比較してのことであり、基礎から始めて長年鍛えてきた体は、
動きは理に適っているし体格のせいもあって小回りが利く。腕力も
乏しいため、打撃の威力は弱い、正確に急所を突くことは得意で
ある。また、力で劣る分、頭脳を使って戦うことも、彼の得意とす
るところである。

つまり嵐の戦闘能力は、基礎は正確でしっかりしているが応用が
利きにくい、或いは応用に繋げるために必要な力が不足していると
いうものである。これは実戦には不向きな能力で、実際、彼はこれ
までの戦闘でも極力、力と力のぶつかり合いは避けるようにしてき
ているのである。

しかし百のように戦闘に関して全くの素人には基礎を身に着ける
ことが必要だと、嵐は考えているのである。先日は沢東公国の「力

自慢大会」で飛び入り参加の上優勝してしまった百ではあるが、それはこれまで樵として働いてきたために身に付いた体力、腕力と、生来の身体的長所でもある腕や足の長さのお陰である。そのみに頼ってこの先に行けば、必ず命を落とすことになる。それが分かっているから、嵐は百にあえて基礎稽古を連日繰り返させていた。そして百は、文句を言わずにもくもくとそれをこなしていた。

食事の仕度の手を止めて、嵐は離れた場所で棒切れを振る百の様子を見ていた。

武器に見立てた棒切れでの素振りである。それもただ振り回せばよいというものではない。武器の切先を、振り上げたときと振り下ろしたときで、それぞれ所定の位置をキープせねばならない。左右のブレもおさえねばならない。そのときに軸となる身体も動揺を抑えねばならない。その姿勢を何十回繰り返してもキープできねばならない。

これは口で言ったり頭で考えたりするだけならさほど難しいこととは思えないかもしれないが、実際にやると意外に難しい。考えていてはできないことであり、また筋力が必要な場所に働かねば維持できない動作である。これをマスターするには唯一つ。身体が覚えるまでひたすら叩き込むことである。

最初の頃は肩に力が入って変な格好になっていたり動きがぎこちなくなったり、変な場所の筋肉を傷めて音を上げてしまったりしていた百であったが、ここ数日、ようやく動作から不自然さが抜けてきていた。そして同時に、理想的な力強さも現れ始めていた。

「まあ、筋の良い方であろうな」

そう評した嵐の表情は、どこことなく満足げで微笑ましかであった。

2・招聘

6月も半ばになっていた。季節の移り変わりを追う形で旅を続けてきた嵐ラシと百ハクは、吐蕃トウバン皇国首都・大都ダイトに後一步のところまでたどり着いていた。吐蕃皇国でも北方に当たるこの地域では今が春の盛りで、ちょうど彼らが東の沢東タクトウ公国で見たのと同じ花が咲いていた。

きれいに整備された運河沿いの川縁にきれいに並んで薄紅の花弁が今を盛りと誇る様を愛でながら、がくりと大きく揺れる舟に、嵐はため息を吐いた。

「よう揺れるのう」

思わずこぼした嵐に、船頭が返す。

「わりいな、おつこちねえように気をつけるよあんちゃん」

ひとりごとを聞かれてしまったばつの悪さを感じながら、嵐も返す。

「それにしても揺れるのう…雪解け水か？」

すると、船頭は頭を振った。

「いやあ、ついこないだまで大都では大雨でさあ、そのせいで水嵩があんだよ。ま、どこかでは堤防が決壊したつつし、それにくらべりや全然この辺は何ともないんだけどよ」

「この辺りはこんなに雨の降るものであつたか？」

嵐の知つているところでは、この地域は基本的に年間降水量は多くない。西の沙漠地帯ほどではもちろんないが、やや乾燥した気候で、水辺には緑も豊かだがそこを離れると赤い土が剥き出しの荒れた印象の土地となる。

「ああ、今は雨期だからな… つつてもまだ早いと思うんだけどよ…」

「この辺りも多分に漏れず異常気象なのだな」

これまで旅してきた中で見聞きしたことを思い起こしながら嵐は呟く。その言葉が聞こえたというわけではないだろうが、船頭がにやにや笑いながら内緒話をするように声を潜めた。

「いや、それがね、あんちゃん。この雨は皇サマオウに対する神サンの怒りなんじゃないかって噂があんだよ」

「？」

「ほら、皇サマってまだお妃サン決めてないだろ？あんなお美しいお姫様がいんのにさあ。しかも神様がお遣わしになった尊いお方だつてえのに、だぜ？」

神の遣わした姫君の噂など、嵐は聞いたことがなかった。彼の話の様子ではどうやら皇妃候補の一人のことのようであったが。それでは東の姫君のことであろうか、と嵐は考える。しかしそれならば姫君の出身地であり、実の父親である東公トウコウの治める国、東の公国・沢東公国では大騒ぎになっているであろう。しかし沢東公国に滞在していた間、嵐は全くそういった噂を聞いたことがなかった。

それでは最近皇が寵愛しているという火晶妃カシヨウのことであろうか。それにしても北の諸侯の姫君がどうして神の遣いなどと呼ばれるのか。

そもそも火晶は北の公国の出身、しかも北公の実の娘ではなく、北の公国領内に勢力を持つ西域諸族の一つ、昌氏シヨウの娘だったのである。

北の公国は吐蕃皇国三つの公国のうちで、最も格も勢力も劣っている。昌氏は都にも名の聞こえた一族ではあったが、所詮は北公の部下に過ぎない。ましてや東公の娘とでは身分も後見の勢力も雲泥の差がある。

皇の寵を得ることは個人の能力でどうとでもなろうが、権力を、頂の称号を得ることは政治の駆け引きの結果である。どう考えても北方一諸族の娘である火晶妃に、東の姫君を相手として勝ち目はない。

そんな風に頭の中で考えている嵐に構わず、船頭はしゃべり続ける。

「だからさ、きつと皇サマの祈りが通じなかったんだらうよ。でなきゃあ、春祭の次の日からあんな大雨になんかなるもんかってな」

言って、げらげらと船頭は笑い飛ばした。

「つかぬことを訊くが、その神が遣わされた姫君というのはどなたのことなのだ？」

「へ？あんちゃん、火晶様のこと知んねえの？」

船頭が目を丸くして言う。やはり火晶妃の方だったか、と嵐は思った。

「火晶様は金色に光り輝くすっげえきれいなお姫様なんだ。しかも火晶様のいるところにはいつもいい匂いがしてるんだ。しかも神様とお話することもできるんだぜ！ああ、いいよな！俺も一度でいいから見てみてえよ！」

見たことがないのに何故美醜が判別できるのだ、と嵐は思ったが口に出しては何も言わなかった。

「あんた、大都に行くんだろ？だったら俺の代わりにしっかり金色のお姫様見てきてくれよな！そんでもって帰りに俺に教えてくれよ、どんなだったか！」

つまり帰りもこの船頭の舟に乗れということらしい。嵐は笑顔で頷いたが取りあえず返事は保留しておくこととした。

それにしてもよくしゃべる男だ、と嵐は思った。しかも聞く者が聞けば不敬罪で咎められそうなことを、である。西の沙漠で聞いた話では皇の陰口を叩いただけで捕まることもあるということだったが、さすがにそれは噂に過ぎなかったのであるうか。それともここが地上ではなく水上であるが故の、この男の気楽さなのだろうか。そういえば先ほどから静かな奴がいるな、と嵐が傍らを振り向いた。

嵐のすぐ隣で、彼の「自称」弟子である百は舟の縁にあごを乗せて青い顔で呻いていた。

「…うわ！大丈夫かおぬし！」

「…し、ししょ！だめっす！気持ちわるいっす！ぐぐるぐるするっす！」

涙目で訴える少年の背中をさすってやりながら、嵐は深々とため

息を吐いた。

明日は大都に入るといふ夜、嵐と百は一つ手前の街に着いた。例の如く野営の準備をした嵐は、やはりこのところの日課である武術の訓練に励んでいる百を探した。

街を囲む壁の外には嵐たち以外にもたくさんの野営をする人間がいた。その集団から少し離れた大木の下に熱心に素振りをする百の姿があった。嵐は少し離れた場所で足を止め、しばらく百の様子を見守った。

百の扱う棒は太くてやや長めにしてある。百に武術の訓練をさせることに決めたとき、嵐が百のために見立ててやったものであった。明らかに重いと分かるそれを、百は軽々と振っているように見えた。両手で振りかぶり、振り下ろす。それから左右に切り返し。以前よりも格段に正確に、速くなった百の動きに、嵐は笑みを浮かべた。

「精が出るのう」

素振りが一段落したのを見計らって、嵐が声をかけた。百は師匠の声に振り向き、歩み寄る姿に気が付いて汗ばむ顔を輝かせた。

「どうだ？一度手合わせしてみるか？」

嵐が言いながら手近な木切れを取り上げて百に向けた。嵐が百に珍しく稽古をつけてくれるというのである。百は嬉しそうに笑いながら大きく頷いた。

嵐は腰から筆記具を取り出すと、百の使う素振り用の棒の先端部分の一方に印を付けた。

「よいか。ここがおぬしの武器の刃だ。ここの部分でわしの体に当てることができればぬしの勝ち。それ以外の部分であれば、わしが負けを宣言せぬ限りは勝敗は決せぬ。よいか？」

嵐の言葉に、百はわくわくした表情で頷いた。

手合いを終える頃には百はくたくたになって地面に寝転がっていた。既に手合いを始めて2〜3時間も経過していたであろうか。しかし結局彼は嵐から負けの宣言をとることができなかった。さすがの体力自慢の百が、荒い息を整えることしかできなかった。

一方、嵐も疲れてはいたが百のようにへたりこむほどではなかった。これは体力の問題ではなく、いかに戦いの際に体裁きが重要であるかということの見本のようなものであった。

百の隣に足を投げ出して座っていた嵐が、おもむろに百に声をかけた。

「ハクよ、聞け。わしらは明日、吐蕃皇国首都・大都に入る」

「はい、やっとですな師匠！」

「そう。いよいよだ」

頷いて、嵐は表情を引き締める。

「大都に入って後のことだ。よく聞け、ハク。わしはそこである任務に就かねばならん。その間はハク、おぬしに何かしてやることはできぬと思う。そのこと、承知しておいてくれ」

「どういうことですか？」

「やっと起き上がった百が訝しげな表情をする。

「オレ、何でもお手伝いしますよ！」

「ああ、分かっておる。きつとおぬしの力も借りることとなろう」
嵐が安心させるように笑う。

「だがな、分かってくれハク。わしの任務はわしのもの。わしがやらねば意味はないであろう？」

そこで嵐は少し表情を引き締めた。

「わしはな、ここでわしの能力を尽くしてそれを示さねばならんだよ」

「……………分かりました、師匠」

百は頷いた。かなり不承不承といった態度ではあったが。

そんな百の感情が手に取るように分かる嵐は、思わず微笑む。

「おぬしにはおぬしでやることがあるう？」

柔らかく笑いながら、むくれた弟子の目に視線を合わせる。それは
揶揄するでもなく、何かを誤魔化そうとするものでもない、本当の
嵐の言葉であった。

「鍛錬の成果は確かに出ておる。そうだな、次は片手で今と同じ動
きができるようになるとういだろう」

「え？片手で！？」

百が目を丸くする。

彼の扱っている棒は、重りも仕込まれていて、実は結構重い。最
初は両手で扱っていてさえ、遠心力に体全体が引きずられて持っ
ていかれそうになっていったものだ。今現在、両手で扱って、ようやく
体がぶれなくなってきたところである。それを片手で、しかも同レ
ベルの動きをしろと言われても、百にはすぐに首を縦に振ることは
できなかった。

しかし嵐は相変わらずにこにこしながら、頷いている。

「そうだ。片手で、両方同じように使えるようになっておけ。それ
から、おぬしには大振りする癖がある。それを改めれば、もっとお
ぬしは強くなる」

そもそも百には地力がある。伊達に樵を生業としてきたわけでは
ない。

「おぬしにかまってやれぬと言うても全く何もできぬわけではない。
だがしばらく、恐らく二ヶ月ほどであろうと思うが、おぬし一人で
がんばっておってくれ」

そう言われて尚不満を述べることはできるほど、百はわがままを言
える性格ではなかった。

翌日、彼らは皇公会議オウゴウギの準備に忙しい大都に入った。6月半ばの
じわじわと暑くなり始めた頃のことであった。

吐蕃^{ケイジュン}皇国三公国の一つ、西の沙南^{シャナン}公国の現在の統治者たる西公^{セイコウ}は、名を珪^{ケイ}潤^{ジュン}という。年齢は32歳。背が高く、体格のいい青年で、品良く整った顔つきに鋭く切れ上がった目をはしばみ色の瞳が和らげていた。

昨年、前西公であつた父親の急死により、公の座を継いだ、若き公である。しかし幼い頃より公の座を継ぐ者として教育され、ここ数年は執政として政に関わつていた彼が西公位に就くのは何の異論も支障もなかった。また、彼にはそれだけの器量も才能もあつた。西公たる珪潤を補佐するのは前西公の頃より公国に仕えていた者がほとんどである。中でも珪潤の弟である珪^{ケイ}節^{セツ}は副公の地位にあり、兄である西公・珪潤をよく支え、協力して国を治めることに尽力していた。

今、沙南公国府である「雲水城^{ウンスイ}」の一室に、公、副公をはじめとした沙南政府上層部が揃つていた。約一月半後に迫つた吐蕃皇国首都・大都会で行われる皇公会議への対策を話し合つていたのである。

「やはり公御自身が出席されるのは賛成しかねます」

長い討論の末、宰相・景朔林^{ケイサクリン}が断定するように言つた。

彼は先代から沙南公国の宰相であつた男で、既に初老の年齢ながら、がっしりした体つきと思慮深さを持った人物で、周囲からも信頼されており、特に珪潤、節の兄弟にとっては、父親代わりといつても過言ではない存在であつた。

宰相の言葉に、他の会議出席者もそれぞれの表情で頷く。そんな彼らに、西公・珪潤は、渋い表情になる。

といつても彼は、臣下たちが自分の大都行きに反対する理由は理解しているのである。そして彼らの反応は当然だとも思つたのである。

しかしそれでも、彼にとって会議不参加に納得するのは不本意なのである。

最近、吐蕃皇国首都・大都からは不穏な話や情報が数多く聞こえてくる。それはここに至るまでの会議でも言われていたことである。例えばここ数年来続けられている大規模な土木工事。皇國中を繋ぐ運河の建設は既に完成しており、現在では大都の建設工事と、王城・円城エンジョウと大河・明江ミンコウを挟んだ対岸に建設されている離宮の建設が、国家事業としての大規模土木工事のメインとなっている。この「離宮」に関して、彼らは様々に疑問に思うことがあるのである。

そもそも何故首都建設計画が始まった頃には話にも上らなかった「離宮」が造られることとなったのか、しかも何故明江の北側という、地盤も悪く不便で、格別景色が良いとは言えない場所に、高層の巨大な建物を建設するということになったのか。

また例えば、皇が「王妃」の位にある東の姫君以外の姫君に寵を与えているということ。

皇のような立場の人間にとって、情愛といったことはプライベートなことなどでは決してありえない。しかも、正妃に最も近い立場である「王妃」の位を持つ姫君がいるにも拘らず、それ以外の姫君への辺り憚ることのない寵愛ぶりを見せているということになれば、かの姫君方の周辺が相当神経質になっているのも、噂を聞くまでもなく想像に易いことである。

また、先頃行なわれた春祭、通称「春の燔祭」はんさいでも一騒動あったことが既に伝えられている。

祭の最大の目的であり、最大の見せ場でもある皇による3日間の神への祈祷の満願翌日より、大雨が数日間にわたり大都周辺地域を見舞ったのである。

大都周辺では一部河川の堤防が決壊し、周辺の耕作地や運河に被害が出、建造物にも落雷などの被害があったと言う。

皇の祈祷は耕作初めの季節が晴天に恵まれるよう天に願うものである。それがこのような悪天候になったとあっては、皇の面目は丸

潰れである。

特に大都周辺で耕作を行なっている者たちにとって、天の神は素朴に信仰されているものであり、素朴であるが故に純粹に、深く強く信仰心が根付いている。そしてそんな彼らにとつては、「皇」は「天」の下に位置されているものなのである。そんな彼らが今回の件をどう捉えているのか、これは吐蕃皇にとつては極めて重要なことなのである。

「春祭の直後続いた大雨に、皇の周辺も大都市民も過敏になっています。一部では皇に対する天の罰であるという噂が立っているとも聞きます」

文官の一人が報告書の束を手にして言う。名前は珪髓^{ケイスズイ}。姓が示す通り、彼も前西公の子供であり、現西公・珪潤、副公・珪節の異母兄である。

彼は皇国中の情報収集、分析を主な職務としており、各地に諜報員を派遣していた。沙南公国で最も国中の情報を知り得る立場にある人間である。

公国で最も皇国の情報に通じた彼の言う言葉には強い影響力があった。益々珪潤の表情が渋いものとなる。

そもそもこの皇公会議自体、今年開催される予定もなかった。会議開催の告知文が届いたのはつい先日5月末、会議開催約二ヶ月前という時期だったのである。

内容はいたって簡潔で、会議が行なわれるのは来たる331年8月初めで、各種行事の行なわれるのも含めて約半月が予定されていること。会議の主要な議題は、ここ数年来懸案となっていた「立皇^{リッオウ}妃^{ウヒ}」の問題であること。各公国と王都・大都への直通転送路、通称「皇の道^{オウ}」の大都側ゲートは7月晦日に開かれるということ。等であつた。

告知文の内容に取り立てて問題があるわけではない。きな臭いのはこの『皇よりの告知文が半月前に正規のルートで届けられた』と

いうことである。

「確かにこんな大規模な会議の告知が開催二ヶ月前になされるのは単なる不手際とも考えられます。しかし確認できている限り、この話が王都で、ひいては王城で聞かれ始めたのはこの一月半以内。それ以前の報告にはこれに関する話題はありません」

資料に目を通しながら言う珪髓に、珪潤が訊ねる。

「最近の報告ではどうなのだ？」

潤の問いに、髓がやや表情を暗くして答える。

「新しい報告は、ありません。定期連絡が、途切れています」
歯切れの悪い髓の返答に、潤が首を傾げる。

「郵便が遅れているとでもいうことか？」

「いえ、そういうことはありません。だからこそ変なのです」

どこか間の抜けた潤の言葉に、髓は全く呆れた様子もなく答える。

「確かに悪天候などの理由から、流通に滞りが生じております。しかし全ての交通路に問題が生じているわけではありませんし、人の流れは切れることなくあります。民間の物流も遮断されてはおりません。何より、間違いなく王城からの告知文は正規のルートで、正常な期間で届いておるのですから」

いかに皇令の使者が特別であろうとて、民間とそんなにも差別化されているわけではない。

もちろん転送等の術を使えばほぼ一瞬で情報の遣り取りも可能である。しかし転送術を一回行なうには相当な時間や労力、何人もの術者、それも最高レベルの術力を有するものが揃わなければならぬ。そんなことはよほどの緊急事態でない限り、実行されることはない。

実際、今回の皇公会議の開催告知文は、皇令の使者の手で届けられたのであるから。

であれば、諜報関係の報告が滞っている原因として疑わしきは、沙南公国の王都駐留大使館に勤務する者たちの怠慢或いは身の危険となる。この場合、むしろ怠慢であってくれた方がどれだけ安心す

ることか、と彼らは思っていた。

「ともかく、西公閣下におかれましては、今回は是非とも国へお留まりあそばしますよう、重ねがさねお願い申し上げます」

髓と潤の会話が途切れるのを見計らったように、宰相・景朔林が深々と頭を垂れながら発言した。西公・珪潤は、今度はさすがに不機嫌そうな表情はしなかったが、それでも困惑した表情で反論する。「しかし会議に出席せぬわけにもいかぬではないか。それこそ皇に対する謀反の心ありと疑われる素であろう」

「そのために私がいるではありませんか」

場違いなほど明朗な声に、西公・珪潤はまばたきをして声の主を見た。声の主である副公・珪節がにこりと笑って一礼した。

「会議へは私が出席いたします。私は西公補佐で副公の任にある者が私が西公の代理を務めることは決して非礼なこととはならないでしょう」

確かに公が代理人をたてることは前例もあり、決して不自然なことではない。

「そうですね、おそれながら公には体調が思わしくないということにしていただいて」

宰相が真っ先に賛成意見を述べ、場の全員が賛成の表情を取る。

珪潤としてはいささか不本意であった。

嘘を吐くということ。皇の臣下の身でありながら、皇に偽りを述べること。つまり西公として、世の人には公明正大で実直な人物として通っている自分が、世間を欺くということにある。

しかも実の弟である副公に実質の責任を押し付けてしまう形になり、自分の部下たちは上司たる自分の身を守るために嘘を吐くという選択をしている。全てが彼の気質としては不本意なことであった。しかし一方で珪潤は、今回副公・珪節が王都・大都へ行くということに、意義を見出してもいた。

珪節は沙南公国の副公であり、沙南公国軍の大將も務めていた。副公の地位は以前は珪潤が就いていたもので、潤が公の座に就いた

とき、節に譲られたものである。しかし節は軍の大將の地位にはそれ以前から就いていた。実兄である潤の目から見ても節の器は大きく、特に軍の將として兵を率いる能力も、当然のことながら一軍人としての能力も、優れていた。

そんな節であつたが、いかんせんまだ歳若く、経験が圧倒的に不足していた。軍人であるといっても大規模な戦闘などここ数年起こっていないし、大規模な遠征もない。何より、大都へもまだ節は行つたことがないのである。

節はこれからもっと大きく成長していく人間であると潤は思っている。そのためにも、できるだけたくさんの経験を積ませ、皇国内の有力な人物との面識を作り、交流することが望ましいと考えていた。そういった意味では、今回の皇公会議はまたとない好機であるように思えた。

確かに現在の大都は色々不穏な噂も聞こえるしそれ以上に皇自身にも幾つか疑問を感じさせる話が、大都から遠く離れたこの沙南にまで伝わってきている。それは臣下たちに言われなくても、潤とて既に聞き及び、知っていることである。

だがしかし、今回の会議の目的が立皇妃に関することであるなら、そこまで危険なことが起こると思えない。そして会場には各公国から公や有力な貴族や官僚が集っているであろう。またとない顔見せの機会である。どうしても副公の立場では不都合な事態となつたときには、西公たる潤が出向けばよい。それは会議期間中、沙南と大都を直結している転送術の道を使えば何の問題もない。

潤は決断を下した。

「……わかつた。私の代理人として副公・珪節を遣わすこととする。会議では西公代理としてよく務めるよう。そして今回を良い機会と心得、見聞を広めてくるよう。よいな」

「はつ。西公代理の任、確^{しか}と心得て務めて参ります」

西公・珪潤の命を、副公・珪節が拝礼して承る。節が礼をするのに、会議場全ての人間が合わせて頭を垂れた。

この後、7月晦日の出発の日まで、沙南公国府では珪節の皇公会議出席のための更に綿密な打ち合わせと準備が行なわれた。

部屋に入った瞬間、嵐はふと人工的な香りに気付き、くるりと周囲に目を遣った。

広すぎもせず、狭すぎもしない四角い部屋。壁は真白に塗りこめられ、ただ四隅と扉や窓などの開口部が、黒光りする細い木で縁取られていた。

彼の正面に布張りの衝立が立てられ、その前に幾つかの椅子が設置されていた。そしてその部分にだけ、板張りの床の上に色鮮やかな敷物が敷かれていた。その他には書類やら何やらを納めた棚以外、これといった調度品は見当たらない。執務用の机すら見えないのは、恐らく衝立の向こうにあるからだろうと嵐は思った。

「よくぞ来たな、ラン」

衝立の向こうから声がした。そして衣擦れの音と床を踏む足音が、衝立を回って出て来た。

「ぎりぎりではあったがな」

衝立の陰から声の主が嵐の視界に現れた。その瞬間に、ふわりと甘い香りが漂ったのを、嵐は感じた。

人工的ではあるが甘く、柔らかく、馥郁とした香り。

（ああ、桃の香だ）

その香りは匂いに敏感な嵐にも刺激が薄く、微かに感じ取れる程度のものであった。恐らくこの部屋で焚いている、或いは焚いたものではなく、移り香というものだろう、と嵐は思った。そしてほつとした。きつい香の匂いの中でなど、集中力が奪われてしまう。

「それでは、これからお前には円城内で働いてもらうこととなる。

8月に行なわれる会議のことは知っておるか？」

確認するような男の言葉に、嵐は頷いた。

「そうか。さすがだな。」

現在、大都では会議の準備が急速に進められておる。しかし何しる期日がないのでな、あちこちで人手が足りない状態だ。そこでお前には、その会議の準備及び会議期間中の城内での職員として働いてもらう」

言いながら、男が傍らの行李から幾つかの書類の束と包みを取り出した。

「具体的な仕事は明日から。この任命証を持って弁官局へ出頭せよ。そこで任務を受けることになっておる」

言いながら、嵐に視線で促す。嵐は一礼して歩み出、男から書類と包みを受け取った。包みの中身は城内勤務職員の制服だということだった。

「『皇公会議』の終了する8月半ばまで約二ヶ月、恙^{つつが}無く己の任務に励め。分かったな？」

簡潔に指令を伝える男に、嵐は無言で返礼した。

「　　というわけだな、わしは明日より吐蕃王城・円城内部で勤務することとなった。基本的に朝8時から夕方5時までだ。融通はいくらでもきくようだし、外に出ることも多い仕事のようだ。ただし何しろ臨時雇いの職員の身分だからな、それに時期も迫ってなかなか切羽詰っておるようだ。ゆえに定時で帰れるということはあまり期待せぬ方がよいようだ。それから期間中、特に休暇もない。特に用事がある場合は申請すれば休めるようだが」

外出先から戻った嵐は、大きな包みを幾つも抱えていた。大都の

宿屋で師匠を待っていた百は、やはり自分も付いて行って荷物持ちをすればよかった、と思った。しかし付いて行くと言う百の申し出を、嵐は頑なに拒絶したのである。

（やっぱりオレがいちゃ、邪魔になるってことだったのかなあ。オレ、馬鹿だし）

百には理由がはつきりとは分からなかったが、嵐は百がその場所へ行くことを好まないようであった。

「大都に滞在中の宿は引き続きここで良いであろう。わしはここから毎日城へ通うこととなるだろう。後ほどわしからもう一度この宿の主人に説明をしておく。ハク、おぬしもここで確と己の為すべきことを定め、励むのだぞ」

ややしょんぼりしながら嵐の話を聞いていた百は、慌てて背筋を正した。そんな百に、嵐は穏やかな視線で頷いてみせる。

「オ、オレ……？」

「そうだ。昨日も言ったように、わしは今まで以上におぬしをしつかりと見てやることができぬ。だがおぬしが何か分からぬことがあったり、知りたいことがあるなら、わしはわしの力の及ぶ限り、おぬしに伝えよう」

それくらいはふがない師匠でもできようからな、と嵐は照れたように笑って頭を掻いた。

「そしてその代わりに、おぬしの力もわしに貸してくれ。わしはおぬしも知つての通り、非力だし、その他にも力及ばぬことなど数多ある。今回のわしの任務など、期日が迫っているときだ。恐らくおぬしの力を借りたくなることが出て来る。そのときは、ハク、おぬしの力も貸してくれ」

「……はい……！」

嵐の言葉に、百が元気よく返事をした。少し前までの表情はどこへやら、百本来の元気で明るい表情が、戻っていた。

「……でも、オレのなすべきことってなんなんですか？」

「それはおぬし自身で考え、見つけ出すがよろう。ただ、わしか

ら言うことは、身体を鍛えることだけは欠かすでない、ということだ。おぬしの身体は、未だ生来の素質のみの状態だ。素質を鍛え、その能力を発揮するには未だ多くのものが欠けておる。おぬしが資質を発揮するためには、今は地道に鍛錬を積むことが必要なだよ」

嵐の答えは百に解答をもたらすものではなかった。しかし何となく心強くなるような感じを、百は受けた。

「……はい！！オレ、がんばります！」

再び元気の良い表情に戻った百の元気な答えに、嵐は満足げに笑った。

3・大都・七月

吐蕃暦331年、首都・大都にて行われる皇公会議の概要は次のようなものである。

開催期間は8月1日から約15日間。

内最初の3日間は歓迎のレセプション。続く7日間ほどで会議が行われる。このとき、皇公会議の本題以外にも、各公それぞれで懸案を話し合ったり親交を深めたりする時間を取ることもできる。何しろ位置的に最も離れている北と西では陸路でゆうに半年かかるほど離れている。転送術による道は、通常高位の術者が最低十人集まらねば維持できない。ゆえに各国の有力者の一堂に集うこの時期は、直接言葉を交わすことのできる絶好の機会なのである。

そして残る5日間ほどは予備期間として設けられている。引き続き会議を行なっても良いし、交流を深めることが目的のイベントが行なわれても構わないということになっている。従来ならば、この期間中に、皇も列席しての晩餐が催される。皇と公は支配者と被支配者の関係であるが、同時に吐蕃皇国という巨大帝国を統治する協力者でもある。そのため、歴代の皇は各公はじめ、国内の有力者とはなるべく友好的な関係を維持してきたのである。

そして恐らく今回の会議もそのような流れになるであろうと想定して準備が進められていた。

会議が開催されるのは王城『円城』。城中で最も広く格の高い部屋を会議場として設え、その周辺の部屋を予備会議室、休憩室、控え室などに充てる。

また、会議に出席するために各地から来た人々の宿泊場所も城中の建物に用意される。

いずれも高貴な立場の人々をもてなすための場所であるから、それ相応の格のある準備が不可欠である。特に宿泊場所は、各国の風

習や習慣にも配慮した設備を整えねばならないので、準備段階から非常に神経が遣われていた。

今回の会議に出席する面々は次のようになる。

「吐蕃王国」より現皇、そして宰相以下文武両官。

東の公国「沢東公国」より東公・？倫、以下文武高官約十名とその他所用担当の役人十数名。

西の公国「沙南公国」より西公補佐たる副公・珪節、以下文武高官とその他役人。人数は東の公国と大体同様である。

北の公国「高蘭公国」より北公・曜黒、西域諸侯筆頭陽氏、回氏、以下各氏の率いる所用役、約二十数名。

以上の人々が、7月の終わりには大都に勢揃いすることになっているのである。

そういつたことを、嵐は円城内で働きながら知っていた。

嵐が配属されたのは文書課であった。

業務内容は、各部署から上がってくる書類の処理である。提出された書類を検討し、不備があれば差し戻し、問題がなければ、最終的に裁可を下す部署へ上げる。つまり必然的に城内の、ひいては皇国中の情報に触れる機会があるわけである。

「しかし……北は陽氏と回氏か……昌氏は来ぬのか？」

書類の清書をしながら嵐は小首をかしげる。

昌氏というのは現皇の一番の寵妃、火晶の実家のことである。確かに今回の会議の最大の議題が「立皇妃」であるのに、正妃に最も近い東の姫君の最大のライバルとみなされている火晶妃の、最大の後見人が議場に立たないというのは奇妙なことである。

正確には火晶はまず昌氏から北公・曜氏の養女とされ、北公の娘として皇の後宮に入れられたわけなので、後見人としては北公が会議に出席するということで、体裁は整っていると言える。しかし火

晶妃が圧倒的に不利だと思われる現状を鑑みると、やはり後背が手薄な感が否めない。

昌氏というのは西域諸侯の一氏族である。北公国の領域内に本拠を置く西域諸侯の中では確かにあまり家格は高くなく、勢力も中の上くらいである。

しかし昌氏は「現皇の寵妃を出した」という一事のみ挙げて、西域諸侯の筆頭に上がっても良いほどの功績である。事実、北公国の中で昌氏の発言力が増しているという情報を、既に嵐は得ている。家格・家力では確かに未だ陽氏、回氏の筆頭の地位が揺らぐことはない。しかし北公国ひいては吐蕃皇国に対する功績という点では昌氏の優勢を疑うことはできないはずである。

「…何か、気になる……」

呟きながら、嵐は清書を終えた紙を脇にどけ、次の書類を手にする。

「と、次は…陳情書か？」

分厚い封書の内容は、どうやら国家土木事業に召集される人員数を削減してほしいというもののおうであった。

現在、吐蕃皇国で行なわれている最大の土木事業といえば、王都と王宮の造営である。

現在嵐が働いている円城は、皇国府であると同時に現皇の住まいであり、後宮も併設されている。さすがにこの城は真先に完成させられたため、どこかが工事中ということはない。

しかし円城を中心に計画された王都・大都是未だ未完成であるし、大都の北側、大河・明江の対岸には大きな塔が建設されることになっている。これらの建設には非常な困難がつきまとい、時間と費用と人員が嵩み続けている現状なのである。実際嵐はこの大都に来てからすぐにその影響力の極めて強大なことを実感していた。

大都是確かに美しい町であった。

整然と並ぶ建築物の白壁も屋根瓦の陽光を弾いて白く輝く様も、黒く艶やかな石の敷き詰められた道路も、城壁や橋の欄干のあるところできに現れる朱のはつとするような鮮やかさも、全てが話に聞いていたよりも遙かに美しい。

百などは門をくぐってしばらくは辺りの様子に目を奪われて他は何も意識に入ってこないほどの状態であった。

しかし大都に数日滞在した嵐は、この町の裏面に気が付いていた。大都は、円城は確かに美しく、完璧とも思える計画のもとに存在していることを感じさせられる。

しかし一方でメインの場所を離れると、そこには荒んだ空気が存在している。人陰もまばらな貧民窟^{スラム}。未だ工事中なのか少し前の大雨の被害の跡なのか、中途半端に積み上げられたままの石壁や建築物。

そして町の北側まで行くと明らかに見ることのできる難工事の様子。

遙か遠くに見える大河・明江の対岸には、建築物らしきものの陰すら見えない。ただ所々えぐられたように見える部分に人影のうごめいているのが見えるのみである。人の話によると先日の大雨で明江が増水し、岸の工事現場付近を大きくえぐってしまったのだという。

また大都の南側、定住民以外の者が集うことを許されたエリアでは、永く離れている家族との再会を望む老人や女子供がちらほら人探しのためにたずね回っている姿がしばしば見られた。彼らの尋ね人の多くは「別宮」とも呼ばれる、明江岸の塔建設工事に動員されているはずである。しかし正に目と鼻の先にいても、一目無事を確認することすらできない。ゆえに人探しの姿は日々少しずつだが増えてゆく。

濃い光ほど闇もまた濃い。月並みだがついそんなことを思う嵐であった。

それはともかく、この陳情書は皇に直接届けるべきものであろう。嵐はそれを元通りにしまうと、種類別に分けられている書類の山の一つにそれを置いた。

未処理書類があらかた片付いたところで嵐は席を立った。部屋の奥で嵐同様に書類に取り組んでいる男に声をかけてから、処理済み書類の山をカートに乗せて部屋を出た。そして各部屋を巡って決済待ちの書類を各部署に配達し、また更に処理待ちの書類を受け取る王城内、後宮以外全ての場所を行き来して、嵐は仕事をこなしていった。

百の一日は日の出と同時に始まる。

まだほとんどの人が寝静まっている宿を出ると、まずは宿の周辺をぐるりと歩く。

彼と彼の師匠が滞在している宿は大都の南エリア、つまり大都定住民ではない者のための区域で、きれいとは言えないが、様々な人種や職種の人々が集まっている、活気に溢れた場所であった。

吐蕃皇国首都・大都の名前と、初めて見たときの大都の城壁と門の偉容にやや気後れしていた百であったが、この区域の、雑然とした雰囲気は好きになっていた。

宿の周辺を回ってまだ余裕がある日には、更に南エリア全域へと彼は足を延ばす。

大都は完全な計画都市で、街路は格子状に張り巡らされている。

大通りなどのメインの道はともかく、脇に入った小道は人が二人並んで歩くにもいっぱいの狭さで、その街路いっぱいに建物の外壁が迫っている。つまり慣れない者にとっては町全体がさながら巨大な迷路となっているのである。

しかし意外に百はこの町のつくりへの順応が早かった。

確かにこの町には同じような道があちらこちらにある。しかしいずれも必ず格子状であるなら、角を何度曲がったかで自分の向いている方角が分かる。それにどんなに目の前の壁が同じ表情であつても、目線を上げればほとんどの場所から王城・円城が見える。円城は大都の最北に位置しているのだから、町中のどこから見ても、城のある方角がイコール北となるのである。定点ランドマークさえあれば、自分のいる位置を認識することも、調整することも、百には容易なことであつた。伊達に山仕事をしてきたわけではない。

ときにはそうしているうちに町を囲む城壁の開門時間となる。そんなときは彼は門を出て大都の壁の外を歩く。

大都の城壁の外周はぐるりと水路で囲まれている。つまり大都に入るには、何箇所か設けてある門に続く橋を渡らねばならない。

この水路は国土中に張り巡らされた運河の一部であり、水路でやって来た者は町の手前で下船して、最後は歩いて橋を渡り、門を潜らねばならないことになっている。

もちろん、場合によつては船での入都も許される。例えば大きな荷物を運んできていて、陸揚げは城内でやった方がよい場合。または直接円城へと招かれた特別な賓客の場合。その他でも、役所の、ひいては皇の許可を得ている場合は、運河から水路へと船が直接入ることも可能となっている。

城壁の、更に水路の外は、だだっ広い平原となっている。

そして少し離れたところには、粗末な建物や耕作地が見える。吐蕃皇国の、ひいては大陸の東側で最も広く肥沃な大穀倉地帯の、最北端に当たるこの地域では、畑作が盛んであった。さすがに大都の城壁のすぐ側まで畑が広がっているということはないが、見える距離から地平線まで、緑の畑が広がっていた。

最近吐蕃皇国中で異常気象が頻発しているが、大都のあるこの中央北部地域では目立って異常も起こっておらず、作物の成長は順調なようであった。

地を這う濃い緑と、紅い砂の色をした小さな建物の光景を遠くに眺めながら、水路に沿って北へ行くと、そこには滔々とした大河・明江がある。そして遠く対岸は赤土の荒地となっている。現在、別宮となる予定の高い塔の建設現場もそこにある。正にそこは、「吐蕃王国」の最北端なのであった。

そんな場所も、百は早朝の眩しい光の中、散歩やジョギングをしながら見ていた。

そんなわけで、大都に滞在して一週間もするころには、百は大都の南半分と城壁の外のこととは随分と分かるようになっていたのである。

朝の運動が済んで宿に戻る頃には彼の師匠である嵐も起きて身支度を整えている。

それから一緒に朝食を摂ると、嵐は城へ仕事に出かける。それを見送ると、再び百は一人で大都の町中へと出かけていくのであった。

広場の片隅を占領して一通り武術の訓練をすると、さすがに飽きかくる。

武術を身に付けるにはとにかく基礎体力をつけることと型の反復練習だ、と彼の師匠たる嵐は言った。その言葉に逆らう気なんて彼には毛頭なかったが、さすがに一人でできることも集中力も限られ

ている。

百はしばらく悩んでいたが、その日は潔く稽古を止めて、町へでかけることにした。

「師匠はオレにできることを探せって言ってた。でもオレまだ何にも分かんねえ。師匠はたくさんを知ることが必要だとも言ってた。町に出ればきつと色々見れる！」

言い訳めいた台詞を呟いてみたのは、根が真面目な百らしいことであつた。

昼前的大都南エリアは、そろそろ昼食を求める人々で賑わい始めていた。簡素な日覆いだけの店舗から漂う食欲を誘う香りにより心を惹かれつつ、懐の寂しい身では諦めざるを得ず、百はのろのろとそれらの前を歩き過ぎた。

「……やっぱバイト増やそうかなあ」

大きなため息を吐きながら、百は内心で呟く。

彼は大都に来てから不定期でアルバイトをしていた。基本的には樵として建築用の材木を納めるのであるが、ときには荷物の運搬なども行っていた。いずれにせよ彼の本分である。

「……でもなあ。他にオレにできることってもない」

そんなことを思いつつ、左右の天幕をきよろしながら、彼は中央大通りまで来ていた。

食料品のエリアを抜けると、色鮮やかな衣料や種々雑多な日用雑貨のエリアになり、更にその先は天幕の幾つか並ぶ広場になる。

狭く、混雑した道を抜けた先で急に広がった視界に、百はしばし戸惑って瞬きした。が、すぐに好奇心に視線がくると動き出す。広場の中央には空間があつて、そこにはたくさんの行李や金属の箱が並び、積まれていた。

周囲には色とりどりの天幕が4〜5個あり、何箇所かには高いポ

ールが立てられ、それぞれを繋ぐように渡されたロープには、半分千切れたような旗や飾りが吊るされ、風にはためいていた。

（祭でもあんのかなあ）

大都会に慣れていない百はそんなことを思つてわくわくしながら広場に足を踏み入れていった。

広場は、祭をしているにしておいては散漫としており、何より人が多くなかった。崩れた格好をした女が荷物の上にだらしなく腰掛けていたり、一方では屈強な男たちが何やら声を掛け合つて作業をしている様子が見えた。

（あ、まだ準備中なのかなあ）

そう思いつつ、百は大きな目の天幕に近付いてみた。

天幕の入り口はやはり閉ざされており、何やら書かれたプレートが立てかけられていた。百はじいっとそのプレートを見詰めた。彼は文字を読むことがほとんどできなかったが、かろうじて読める文字が真ん中に大きく書かれていた。『閉』の一字であつた。

「あ、やつぱり……」

呟いて辺りをきよろきよろと見回してみる。しかしすぐ近くに人影は見当たらなかった。もう一度プレートに目を向けるが、それ以外で、彼に理解できる文章はなかった。何個かあつた数字は読めるが、それが何を意味しているものか、前後の文章がわからない以上、それだけではどうしようもなかった。

「何やつてんの、あんだ。開き待ちするには早すぎるわよお」

そんな百の背後からいきなり声をかけられた。眠そうなまったりした女の声に百が振り向くと、そこには派手な色のガウンを羽織つた女がいた。透けそうなほどに薄くぴらぴらしたガウンを、ゆるく腰帯で縛つていて、その下にはやはりゆったりしたズボンを穿いている。しかし胸元は大きく開いていて、さすがに百は目のやり場に困った。しかし女はにたりと笑うと、口の端にくわえていた煙管を揺らしながらしげしげと百を見詰めている。

「あんだ、見ない顔だねえ。なあに、誰かのファン？ 出待ちでもし

てんの？どうでもいいけどあんたみたいな坊や、こんなところでばやばやしてたら悪い奴らに攫われちゃうよ？」

そう言つて女がけたけた笑う。『坊や』扱いされた百はそのことにシヨックを受けつつ、それ以上に今まで見たこともないような派手であだつばいこの女の艶めいた雰囲気^{雰囲気}に圧倒されてしまつていた。

何しろ距離が近い。彼女はほとんど息のかかりそうな距離で百を眺め回し、あまつさえ簡素な頭巾で覆つた頭からこぼれた髪の毛に触ろつとする始末であつたのだ。百自身はどぎまぎして固まつていたため、ろくに女の様子に気付かなかつたが、彼女は人の悪い笑みを浮かべながら百の緊張した様子を楽しんでいたのである。

「と、ところでおばさん、何か祭りでもやつてるんすか？何時から始まるんです？」

やつとのことで訊きたいことが言えた百であつたが、その途端女がこれ以上はないほどに険悪な目つきをした理由は、分からなかつた。

おばさんと呼ばれた女は、しかし百が全く悪気のない表情をしているために、呆れるしかなかつた。そして同時に心の一方は更に深く傷付いてもいた。

しかしとりあえずも彼女は彼の問いに答えてくれた。頬は不自然に引きつつていたかもしれないが。

別に現在、大都では祭を行つてゐるわけではない。ここは大都南エリアでも芸能関係者が商売をはる地域で、現在複数日滞在して公演を行つてゐる団体は5件いるという。

大きなイベントのない現在は、どこも夜の公演一度としてゐるようだ。春の祭の時に昼夜複数回公演などできたのは、ひとえに祭という特別なイベントを盛り上げる一環であつたからなのである。

「なんだーそうなのかー」

百が本気でがっかりしているのを見て、女はけらけらと笑つた。

「なあに？ そんなにがつかりすること？ それならあたしの舞台を見ていくかい？」

女が一瞬で身体を摺り寄せてくるのに、百が慌てて身を引いた。女はおかしそうに笑いながら、顔を間近に寄せて百に囁く。

「アタシも踊り子をやっててねえ、これでもそこそこお客サンもついてんのよ」

「お…踊り子？」

「そ。まあ、皇サマのお声がかかるほどじゃあないけどさあ。でもそうなったら一発で骨抜きにだってできんのヨ、アタシはね」

ふつとかかるほのかな暖かい吐息。薄く化粧の施された顔と、艶めいた視線。そして鼻に重く甘ったるく香る香料の匂い。それが意味することと女の言葉の意味など、百には分からなかった。何しろこんな状況に遭ったのは初めてのことであったし。しかし本能的にこのままではいけない、と百は思った。

「い…………いや！ また！ またの機会にするよ！」

ぴよこん、と飛び上がるように百は女から身体を離れた。そしていくらかぎくしゃくとしながらではあったが、女に手を振りながら早足にその場を離れていった。

百の素早い行動に、女はしばしきょとんとしていたが、ぶつと噴出すと、けたけたと笑い出した。その表情は決して馬鹿にしたものではなく、百の反応のあまりの初心さに思わずこぼれたものようであった。

「ほう、今日はそんなことがあったのか…」

その日の仕事を終えて帰ってきた嵐と夕飯をとりながら、百がその日あったことを喋っていた。これが最近の彼らの日課でもあった。「いやあ、なんかわかんないけどオレ、あのままあそこにいちやいけない気がして、思わず逃げちゃったんすけど…悪いことしたかな

あ、せつかく見ていくか？って言うてくれてたのに……」

その時の状況を思い出したのか、やや頬を紅潮させている百に、嵐はくつくつと笑うのを止めることができない。

「いや、ついて行かなくて正解であつたと思うぞ」

そうですか？と言いながらも百は尚首を捻っていた。

それはともかく、と百はその後のことを話し始めた。

女と別れてから、何となく理由は分からないものの悔しい気持ちだつた百はそのまま手近な門から大都の外へ出た。そこは大都の東側の門で最も南寄りの門であつた。水路の上の橋を渡るとそこは赤つぽい広野で、大都へと続く街道とそれに沿つて植わる背の高い緑の樹があつて、ずっと遠くに畑らしき緑と、更に遠くの山影がぼんやりと霞むように見えた。そして北側にはまっすぐ大都の城壁が続き、その先には大地の途切れ目と更にくすんだ赤黄つぽい隆起した台地が見える。

百は北側へと足を向けた。そこには明江があり、その対岸では宮殿の建設工事が行なわれているはずであつた。

（そう言えば兄貴たちも都の工事に行つたはずなんだよな……）

ほとんど忘れかけていたことをなぜかそのとき思い出したのが、工事現場を見に行く動機であつたかもしれないと、百は言つた。

「様子はどうであつた？」

嵐がなんととはなし、静かな口調で訊ねる。百は軽く首を振つた。

「いや、何か、何も分かんないつてのが正直なとこでした。河には橋がかかつてなかつたし、船もなかつたし、向こう岸に渡れなくて。でもこつち側からでも充分向こうが見えたんでまあいいかと思つたんですけど。でも川岸が崩れてて、そこを掘り返してる人がいっぱいいいるのは見えたんだけど、なんか建物らしきものは全然見えなかつたし……」

でもあれ、多分あそこが工事現場だつたんですよ。だつて足場組んだのとか、崩れてないところにはネットがかけてあつたし。ただの川岸の工事なら、あそこだけそんな風になつてんのっておかしいし」

首を捻りつつ一生懸命に思い出しながら話す百の報告を、嵐は時折質問を挟みながら聴いた。

その結果は、嵐が王城内で集めたものも含めて、これまで収集した情報から嵐が導き出している王宮建設の情報を固めるものであり、大きく外れた話もなかった。どうやら百の素直な感性は、情報収集、ひいては諜報にも向いているものであるのかもしれない。そう嵐は思った。

「ところでハクよ、おぬし明日は何か外せぬ用はあるか？」

百の話が終わったところで、嵐が訊ねた。もちろん百には予定などなかったのでそう答えた。

「では明日からしばらく、おぬしの力を借りたいのだが、よいか？」

嵐の話によると、明日から王城では官吏採用試験と皇立研究所の職員及び研究員採用試験が始まるのだという。嵐はもちろん『皇公会議』開催のための臨時職員として雇われたのはあるが、よほど人手が不足しているのか、試験の方も手伝うようにと要請されたのである。

「そこでおぬしにも仕事を手伝って欲しいのだ。と言っても正式に職員として採用してもらうことは残念ながらできなかったのだが、わしの手伝いとして王城に出入りすることは許可してもらえた。ただ働きにはなるが、わしの王城での仕事をしばし手伝ってもらえぬか？」

嵐が話し終えるよりも随分早くから百は思いつきり全身で頷いていた。師匠に力を貸して欲しいと言われて嬉しかったのもあるが、一般人がなかなか入ることの許されない王城内に堂々と入れることなど、ましてやその中で働くことができるなど、百としてはほとんど夢のような話である。百に否やのあるはずがなかった。

早速翌日から嵐と百は共に登城することにして、彼らは席を立った。

(…あ、そういえば、一つ言つのを忘れてたことがあったなー…)
自分の寝台に向かいながら百はふと思い出していた。

昼間、踊り子の女にあしらわれてなんだかむかしながら門へ向かっていた途中、彼はふと粗末な日覆いの下に幾つかの物が並べられて売られているのを見たのである。

大都土産を売っているのだと、その粗末な露店の男は盛んに通る人に声をかけていた。百はたまたまその店の直ぐ前を通っていたので、思わず歩調を緩めて並べられた品物を見ていた。

その中に、一枚の絵があった。それを見た瞬間、百は心臓が音を立てるのではないかと思うほどどきりとした。

それは、一人の女が描かれたもので、他の品物と比べて大きかった。こちらを真つ直ぐに見据える女は、ひとことと言ってとてつもなく美しく、たかが絵だと思っても、胸がどきどきするのは収まらなかった。

面長の、白い顔。少しきつめの紫色の目と真つ赤な唇。真つ黒な髪の毛は長く腰の辺りまであつて、ところどころに赤や青の丸い飾りが付けられているようで、柔らかそうに広がっていた。衣裳は真つ黒で足先だけが見えるほど長かったが、中の身体が透けて見えるように描かれていて、妙に恥ずかしかったが、目を離すことができないほど綺麗だと百は思った。

(うわあ、きれーな女の人だなあ……)

先ほど会った躍り子の女も確かに綺麗な女性であつたが、この絵の女のように見とれてしまうことはなかった。紙に描かれた、特にものすごく実物に似ているというわけではない絵で、これほどにどきどきさせられるのだ。一体、この絵のモデルとなつた女性はどれほどに綺麗なのであろうか。

(うわ、やべ………)

思い出しただけで顔が熱くなつたのに気が付いて、百は慌ててペ

しぺしと自分の頬を叩いた。彼が今いるのは宿の廊下。他に誰もいなくて助かった、と百は紅潮した頬を押さえながら慌てて自分の部屋にすべり込んだ。

「師匠には…言えないな。これじゃあ」

寝台に潜り込みながら、百は呟いた。

皇立研究所の試験は通常四年に一度行われる。ほとんどの場合において官僚登用試験も同時に行われるため、試験実施に当たった年は、首都・大都是大変な騒ぎと厳戒体制となってしまう。

試験は筆記と面接が定められており、研究所の試験にはこれに実技が入る。試験内容に関する情報の漏洩防止には毎回大変な苦心が為されている。それでも毎回必ず一件以上は不正が発覚するという余談ではあるが、試験に関する不正に関わった者は大都市民権剥奪などの厳罰に処される決まりである。

なぜそんなにも厳しいのかと言えば、いずれの試験も国政に深く関わる人材を全国、全世界から募るためのものであるからである。

これらの試験は世界一難しいと言われており、一発合格の確率が一割に満たないとさえ言われている。

しかしその一方、受験資格は無いに等しい。完璧能力主義の制度なのである。そして合格さえすれば、王城勤務の官僚として衣食住には困らない生活ができるようになるし、努力次第では大貴族並みの生活を手に入れることも可能である。また、皇立研究所の研究員として好きな研究に没頭する日々を送ることも可能だし、術力を有する者はそれを有効に活かすこともできるようになる。

そのため、いかに難関ということが知られていようと、受験ノイローゼで自殺する者が出たり、受験生同士での足の引っ張り合いが刑事事件にまで発展しようとも、受験希望者は毎回後を絶たないものである。

試験は七月初めから三ヶ月間かけて行なわれ、九月末に採用者が確定するということになっている。そしてその間、受験生は外部との接触がほぼ不可能な状態にされる。これは不正を防ぐ目的でもある。しかし一方では、余計なことにかかずらってられない受験生としては、例え可能であつても好んで外部への接触を求めることはほとんどないのであつた。

試験を数日後に控えたその日も、明青は王城内の書庫にこもつていた。

もともと勤勉で勉強家な彼女ではあつたが、ここ数日は更に鬼気迫るものがあつた。朝一番から入城して書庫に直行すると、そのままほとんど飲まず食わずで閉門時間までいることさえあつた。

彼女の知り合いの研究所員がさすがに彼女の身を案じると、明青は頑なな表情で首を振つた。

「まだまだです。まだ足りない。時間が限られていることは重々承知しています。でも今はとにかくできるだけのことはしたいのです」
若い、少女らしい美貌でありながら、その瞳に宿る勝ち気と一言で表現できない迫力は、彼女の意志を誰にも翻意させることのできないことを示していた。

「だつて本当に私はまだ足りない」

分厚い書物の頁をくる手をふと止めながら、明青は思う。

春祭で衝撃的な事件に遭つた明青は、しばらく情緒不安定な状態に陥つてしまった。他人と顔をあわせるのが恐怖で、終日自室に閉じこもつたりもした。そんなことをしても無意味だと分かつてはいても、体は心を裏切つて、どうしても動こうとはしなかった。

そんな状態を脱することができたのは、ふと小耳に挟んだ紅珠の噂がきっかけであつた。

その日明青は、寮母に無理矢理のように食堂に引き出されて食事を摂らされていた。食事さえまともに摂らずに閉じこもっていた明青の体が心配されてのことである。そこでその日久々に、彼女はなかなか食物を受け付けようとしないう自分の体を何とかだめながら食事をしていた。

そのとき、隣接するフリースペースでの会話が耳に入ってきた。聞くともなしに聞き流していた明青であったが、「春祭り」の声に全身が反応した。動揺する胸を押さえつつ、聴覚に全神経が集中する。早鐘のように鳴る鼓動と割れるように痛む頭は恐怖からかそれとももっと別の感情からなのか、彼女には判別できなかったが、そんなこともどうでもよかった。

「……らしいよ、まだ捕まらないらしい」

「極秘捜査なんかにしてるからじゃないのか？この国にいることは確かなんだから、本腰入れて探せばすぐに見つかると思うのだがなあ」

どうも見つからない犯罪者の話題のようであった。何だ、関係なかったかと明青は無意識に詰めていた息を少し吐き出した。

しかし続く会話に、彼女は再び全身が凍り付くような感情に襲われた。

「……からさ、そりゃ無理だよ。あれは一種市民の偶像だからな。美しき天よりの御使い。人々に憩いと慈しみを与える。…

まあ、正体は所詮流れ者の踊り子なのだがな」

「いや、そう言ったものでもない。あの女だが、ただの踊り子ではなかったぞ」

（『天の御使い』？『流れの踊り子』？それってまさか…）

がんがんと目が眩みそうなほどに頭が痛む。耳の奥がじわじわと熱くて痛くて、よく会話が聴こえない。何かが明青を牽制していたのかもしれない。それでも彼女は知リたかった。その続く言葉が、聴きたかった。

「…ちよつと調べてみたのだがな、紅珠、といったらう？あの色っ

ばい踊り子。あれは本当は流れの傭兵らしい。『沙漠の女戦士』などという名で知られているらしいぞ」

気が付いたら明青は席を蹴って駆けだしていた。背後で何か言っているような気もしたが、そんなものは気にも留まらなかった。走って、走って、自室の寝台に飛び込んで上掛けを頭から被って、ようやく呼吸が落ち着いてきた。

(コウジュ

『紅珠』！)

その名を、明青が忘れるわけがなかった。忘れようにもつい先日のことである。紅珠と最後に言葉を交わしたのは。出会ったのもつい数日前のことではあったが、そんな短い付き合いでも、紅珠という人物の存在は、明青の心に強い印象を刻み込んだのである。

初めて会ったのは大都の町外れ。研究所の受験者の嫌がらせで使役獣に追われていたところを助けてもらったときだった。道路よりも低い位置にある水路からいきなり飛び出してきた一蹴りで使役獣を反対側の壁まで吹っ飛ばした。その強さと、振り返ってこちらを見た彼女の姿の美しさに、とても驚いたことを思い出す。

もう一度会いたい、と思っただけの彼女の仕事を訪ねた。彼女の踊り子としての姿を見て感動した。素顔の彼女と他愛ない会話を交わすことができて、思う以上に楽しかった。

助けてもらった感謝の心でも、その能力に魅せられたのでもない。紅珠という一個の人物と知り合えたことが、明青には嬉しかった。多分紅珠は、明青が故郷の村を出て大都に来て、初めて得た友人であつた。

紅珠と最後に交わした言葉を、明青はよく思い出せない。残酷な場面を目撃してしまってひどく動揺していたときに交わした会話であつたからだ。そして泣き疲れて眠った後、次に目を覚ましたのは今いる、この寮の自分の部屋の寝台であつた。そして目の前には黒髪の美人ではなく、いかつい姿の男、紅珠が舞姫として所屬してい

た移動芸能集団『天藍』の団長がいた。

「紅珠があんたによく謝つといてくれと言っていた。あんたの心を思い遣つてやれなかった、あんたの心を傷付けるような目に遭わせてしまった。あんたをちゃんと守ることができなかった。ごめんなさい。」と

『天藍』の団長が伝える紅珠の言葉に、明青は思わず涙ぐんだ。謝つてもらう必要などないのに、そう叫びたかった。

「…多分あんたは、『謝つてもらう必要などない』と言いたいのだろう?」

彼の言葉に、だから明青は驚きを隠せなかった。涙の零れる董色の瞳を大きく睜つて自分を見つめる少女に、彼はいかつい顔の表情を変えずに続けた。

「だがあんたにはそれを言う権利はない。あんたは紅珠と一緒にいて欲しいと願った。そして紅珠はそれを承諾した。それが何を意味するか、わかるかい? あんたは紅珠に『依頼』をしたんだ。そして紅珠はあんたの『依頼』を受けた。例え何があっても依頼者を何ものからも守るのが、紅珠という女の仕事だ。例えそれが目に見えないものによる原因であつたとしても。そして紅珠は受けた依頼はどんなことがあつても遂行しようとする。例え不可抗力で失敗したとしても、それを理由にあの人は自分の失敗を正当化しようとはしない。例え依頼者本人が許しても、紅珠は失敗した自分を忘れず、その過失を忘れない。紅珠は あの人、それだけの厳しさをもって生き抜いてきた人だ。 戦い抜いてきた、人なんだ」

「それは…どういう……」

団長の強い言葉に、明青は戸惑いを禁じ得なかった。不思議なことに明青を責めるような態度にも見えないことも、彼女を困惑させていた。彼の話す内容からすれば、紅珠を困らせる原因を作った明青を責めてもいいようにも思えたのだが。

「多分、あんたの訊きたいことは分かる。だが、それは今、俺に答えられることではない。ただ言えるのは、あんたは紅珠に助け

られた。あんたは、それを決して忘れてはいけないということだ。

そして助けられた命であんたが何を為すべきなのか、よくよく考えることだ。紅珠に恩義を感じなければならぬと言っているのではない。紅珠に何かしなければならぬと言っているのでもない。むしろそれは不要なことだ。紅珠は紅珠の仕事をした。それは完了したと紅珠は言っている。だからあんたが考えるべきは、今後あんたが自分自身に何を為すか、ということだけだ」

「……」

「あんたはあんたの道を進め。あの人も自分の道を進んでいる。戦っているんだ」

しばらく沈黙が下りた。男はにこりともしないで明青を見つめている。だが決して明青は居心地は悪くなかった。愛想のない男だが、面倒見がよく心根は優しいのだ、そう紅珠は言っていた。そしてにこりともしない男の、その視線は穏やかなままであることに、明青も気が付いていた。

「教えて。彼女は　紅珠は、一体どういう人なの？
今、どこにいるの？何をしているの？」

沈黙を破ったのは明青であつた。解答が得られるとは思っていなかった。ただ、訊ねずにはいらなかったのだ。

「紅珠は、戦っているよ」

団長の声は淡々としていた。

「あの人は、そういう人だ。戦つて、戦つて、戦い抜いて今のあの人がある。戦うことで自らの道を切り拓き、自らの存在と地位を確立させた。それはあの人の生き方全てだ。きっとこれからもずっとそうなんだろう」

「　あの人は、舞姫じゃないのね。戦う人なのね」

紅珠の戦闘能力が優れていることは、明青も知っていた。何度も守られ、彼女の戦う姿を目のあたりにした。そのときの彼女は、決して単なる移動芸能集団の舞姫などではなかった。戦い慣れた者の姿であつた。

「いや、あの人は舞姫でもある。彼女は優れた舞の名手で、同時に戦士でもある。それが紅珠という人だ」

団長の答えは、明青にはすぐには納得できるものではなかった。だが、確かにそうなのだろうとも思っていた。理屈ではなかった。ただ、明青の見てきた紅珠という人物は、美しい舞姫であり、同時に強い戦士でもあった。それは確かなことであつたから。

（紅珠は捕まっていない　　紅珠は、生きている。確かに生きている。どこでか、ここか、それともとくにもうどこかへ行つてしまっているのか、それはわからないけれども、でも確かに紅珠は生きている。戦っているんだ！！）

『天藍』の団長の言葉が明青の脳裏をぐるぐると回る。

『戦つて戦つて戦い抜いて　　』

（紅珠は、今も戦っているんだ）

そう思うことで、不思議に心が熱くなってきた。上掛けに包まつたまま、明青はしゃくりあげて泣いていた。目も、頭も、胸も、全てが熱くて痛くてどくどくいつていた。

『紅珠は戦っている。だからあんたもあんたの道で戦え　　それくらいしか、俺があんたに言えることはない』

去り際の団長の言葉。そのときはぼんやりしていたのでほとんど聞き流していた。しかし、確かにその言葉は明青の中に残っていたのである。

（彼女は、戦っている。多分、今この時もどこかで。だったら私は
！）

『戦つ』という言葉が明青の胸に強く響いていた。

通常の生活が送れるようになってから、明青は砂漠の舞姫の噂を聞いた。なんでも祭明けの翌朝に、魔術を用いて大都周辺に豪雨を

もたらした女術士がいたという。その女術士のいでたちは全身黒装束で、舞と歌で雨を降らせたのだという。

それが行なわれたのは早朝であったが、目撃者は多数存在し、その中には『天藍』の公演を見に行った者も多く、その術士は確かに『天藍』の踊り子、「砂漠の舞姫」の異名をとった紅珠に間違いなかったとの証言が多く得られている。

ともかくその女術士は、皇国に災いをもたらそうとする者、皇国の敵として、王城では重罪犯として行方が搜索されているのである。しかし不思議なことにその人物は、王城ではそのように極悪人として扱われているのに反して、一步城を出ると、その人物は天よりの使者と考えられ、密かに慕われているのであった。

「あのお方は天の御使いで、皇の傲慢、皇の非を糾^{ただ}すために天の意を示して雨を降らせたのだ」

町で話をしていた男にそこまで言い切られた時には、さすがに明青も苦笑を禁じ得なかった。

しかしそういった言葉が出るほど、その雨を呼んだ女術士の存在が市民たちに好意をもって受け入れられ、強く慕われているということであった。そしてそれ故に政府は彼女を危険人物として極秘裏にでも排除せざるを得ないのであろう。

「あなた、すっかり大都のアイドルね。こんな状況、あなたは知っているのかしら？」

胸中に囁いて、明青は密かに笑った。

数日後には皇立研究所職員採用試験が始まる。そうなるともうこの書庫も利用することはできなくなり、全てがこれまでに蓄えられてきたはずの受験者本人の知識や能力のみでの勝負となる。

「私はこの道で戦う。絶対に誰にも負けない」

呟いたのは、改めて己に気合を入れるためであった。

正直なところ、皇立の研究員になることに迷いが無かったと言えは嘘になる。

皇立研究所員となることは、吐蕃皇国政府の公務員となることを意味する。

数ヶ月前なら迷うはずもなかった。しかし例の事件に遭遇してもこの皇国を無条件に支持できるのかと考えると、即答することはできない。その点に関しては、今も明青の中では明確な答えはない。しかし彼女はそうするしか自分を活かせる、そして胸を張って生きることのできる道はないのだということも分かっているのである。

明青の術力は生まれつきのものであった。彼女の能力は幼い頃から強く、今よりももっと未熟で抑制力のなかった頃は、ちよつとした感情の高ぶりに反応して周囲のものを発火させてしまったり、ものを壊してしまったりと、様々な事件を起こしてしまつたのである。彼女の両親、兄弟姉妹含め、故郷の村の住人の誰一人として、全く術力を持たないわけではなかったのだが、彼女ほどに強力な力を持つ者はいなかった。術力を持つ者は珍しくはないが、それも度が過ぎれば恐怖の、或いは迷惑の対象となるのである。

そんな事情があつて、皇立研究所職員受験資格である最低年齢の十五歳を超えた明青は、一人遠く故郷を離れて大都までやってきたのである。今更故郷には戻れないし、戻つたところで彼女には何もできない。きつとまともに普通の暮らしを送ることすら望めないのだらうと彼女は思つていた。だからこそ、彼女は何があろうとここでくじけるわけにはいかなかったのである。

受験者寮に入つて、自分のような境遇の人間がたくさんいるのだということを、明青は知つた。それは一面彼女をほつとさせたが反面、同様に退くことのできない人間がそれだけ多いということでもある。だからこそ裏側では足の引つ張り合いだつて日常茶飯事の如く存在するのである。それでも彼女には譲るつもりも退くつもりも負けるつもりもまっただくなかつた。

「私はここで私の道を戦う。そして必ず勝ち進んでいくわ。もしもまたあなたに会うことができる日があつたとしても、絶対に恥じることなんかないようにね」

自分自身に言い聞かせるように呟いた明青の表情は、思い詰めてはいたが悲壮ではなく、その董色の瞳には強い意志の光がしっかりと宿っていた。

嵐について入った王城での百の仕事は、ひとことと言えば嵐の補佐であった。

皇公会議の準備でそれでも忙しかったところに、皇立研究所の試験実施のために人員が余計に駆り出されてしまった城内では、完全な人手不足状態に陥っていたのである。

百は嵐の処理した書類を各部署に届けることを主な仕事として、城内を駆け回っていた。

たったそれだけの仕事と他人には思われるかもしれないが、何しろ円城はとてつもなく広く、ややこしい場所も多い。百が相当急いで両手いっぱい書類を配達して回って嵐の元へ戻っても、またすぐに書類の山が待っていたりするのである。もちろん彼は嵐の処理したものだけではなく、文書課員全員分の処理書類を配達しているので、尚更である。

また、ただ配達するだけといっても、それはそれで大変であった。百はほとんど文字が読めないのので、部屋の位置などは城内の地図を見ながら探さなくてはならないし、例えば書類に宛名が記されていて、それが何と読むものなのか彼にはわからない。読み方を教えてもらってはいるが、なかなか何十枚とある書類の宛先全てを覚えることは困難である。結果、部署だけは間違いなく届けるようにして最終的にはその人間に各人へ配ってもらうという方法を採用することも多くなる。

（オレってあんま役に立ってないよな……）

特に誰かから何か言われたわけではないが、何度もそういったことを繰り返すうち、百もこのままではいけないのではないかと考

えるようになってきていた。

「オレにも文字が読めたらいいのに……」

そう思っ、はっとした。

（いや、俺なんか習っていいもんじゃないんじゃないか！？だって文字を読めるのはエライ人だけだし。オレなんか文字読めなくて何かいいことがあるわけじゃないだろうし……！）

しかし一旦心に生まれた思ひは、なかなか打ち消すことができなかった。それは百が初めて抱いた『欲求』といったものであった。

7月に入った初日のある暑い日、皇立研究所職員・研究員採用試験は開始された。

まずまずたいした混乱も問題もなく、順調に試験日程はこなされていく。

そして7月に入ると同時に「皇公会議」の準備も大詰めを迎えていた。早くも先遣の役人を大都入りさせ始める国もあり、そういったものの対処も当然、嵐をはじめとする吐蕃王国の役人の仕事であり、ますます彼らは多忙を極めていった。

様々な人々の様々な思惑の中、「皇公会議」の開催される8月がやってくる。

4・皇公会議 1

＊

後の人々がこの激動の時代を振り返るとき、必ずその根元にあるものを探ろうとした。それは複雑に絡み合っていて容易には掴めるものではなかった。しかしどの議論でも必ず一度はこの辺り、つまり吐蕃暦331年の出来事に取り上げられた。

この時期に移動芸能集団「天藍」^{ティエンラン}が大都に滞在していたこと、そしてそこに紅珠^{コウジュ}が合流したこと、吐蕃皇^{トウバンオウ}と紅珠がこのとき出会わなかったこと。そしてこれより先に嵐^{ラン}と百^{ハク}が出会っており、この時期に彼らが大都にいたこと。

全て作為的にすら感じられるこれらの事象が重なっていることは、大いに議論の対象となった。

それほどにこの時期の出来事は複雑に入り組んでいた。

しかし確実に言えることは一つ。吐蕃皇^{オウコク}国の歴史は、この時重大な岐路にあったということである。

＊

7月晦日^{みそか}早朝。

吐蕃皇国首都・大都の王城・円城^{エン}の中庭では、大規模な術を行うための準備が整えられていた。

広場には大都の市街中央を南北に貫いている「夜光の道」が走っており、その両側には石柱がオブジェのように連なっていた。その真ん中辺りに扉のない門柱一対があり、それを中心に陣が形成されていた。東西南北の四方向には一人ずつ術者が立ち、彼らの背後には一台ずつ燭台があった。そして陣より少し間を空けて、その周囲

に広場を埋めるほどたくさんの術者が並んでいた。

空にその日最初の曙光が射し初める頃、それが合図であったかのように術式の詠唱が始まった。

東西南北の位置に立つ術者が先唱し、一拍遅れて周囲の術者たちが続く。地を低く這うような言葉の、音の流れが、時に節を付けられてうねるようにはねる。声と声が互いに響き合って、わああああん……と波動のように空気を震わせる。その音が次第に大きくなるにつれて、陣の各所に光が現れ始める。東西南北の4人の術者は次第に強くなる青白い光に包まれて、まるで燭のように輝き出した。

広場には術者以外の者も大勢いた。

まず、術によってこれから開かれる扉を通って到着する各国の重鎮を迎えるための来賓接客係の役人、呪術担当の皇国政府の役人はもちろん、王城警備官、そして吐蕃皇立呪術研究所所属の理事、管理官はじめ高位術者たちである。そういった者たちの中に明青^{ミシセイ}もいた。肩書きは皇立研究所研究員補というものである。

現在、吐蕃皇立呪術研究所では所属研究員採用試験のまっただ中であつたが、この日は特別で、受験生もこの場に出席して『転送術』を見学することが許されていたのである。そのため、普段は早朝から始められる試験も、今日は午後からのもののみとなっている。

『転送術』というのは非常に高度な術で難易度も高く、また行使することのできる者も非常に少ない、希有な術なのである。何しろ吐蕃皇国では国家機密並の扱いを受けているほどである。それが実施で見ることのできる機会など他にないということで、試験日程を変更して、希望する受験生には見学が許可されることとなつたのである。

皇立研究所の研究員を志す明青は、当然この術のことについても

調べていた。といつても彼女はこの術を、少なくとも今現在、使えるわけではなく、ただその概念と一般的な施術法の概要を記した書物を読んだだけである。

『転送術』を会得する第一の条件は、「空間を把握するセンス」だと言われている。術者自身が存在する座標、他人の座標、物の座標、それらの存在する空間の地形も含めて、全てを把握するセンスが何よりもこの術を成功させるために必要なのである。

ある転送術の術者の述べるところによれば、その感覚はまるで空間に不可視の罫が360度垂直水平に展開されているようなもので、その感覚で把握できる全てのものは、全てその不可視の罫線の集合体によって構成されているのだという。それが転送術における重要な概念の一つである「座標」で、この感覚を得ることができると、ほぼ転送の術を行使することが可能になるのだという。

しかし全てのものは不動ではない。一瞬前には何もなかった座標に何かが現れたり移動してきたりすることは往々にしてあることである。もしも何かが既に何かの存在する座標に転送されてしまうと、そのどちらか、或いは両方ともに破損が生じる。下手をすれば修復不可能な破壊が生じ、その衝撃が他に被害を及ぼすことも容易に想像できる。ゆえに転送術の術者は、ものの移動する可能性も考慮の上、その空間全体の時間経過を含めた全情報を把握し、感じ取らねばならない。これが転送術を会得する第一にして絶対の条件、「空間を把握する能力^{センス}」である。つまり転送術はただ対象物をA点からB点に移動すれば良いというだけの単純な『物質移動術』とは根本的に違う能力、いわば『空間使い』の能力なのである。

このような複雑な術であるため、転送術を行使するためには多量の術力を必要とする。そして被転送物が大きかったり重かったり、また数量が多かったりすると、それに比例して術の難易度は上がり、術力も消耗する。そのためしばしば術者一人分の力では足りず、何人かの術力を合わせる必要がある。特に生体を転送するには特別な配慮と細心の注意が必要とされるため、最高の難易度となる。

そのため通常、生体を転送する場合には複数の術者が必要で、更に術を安定させるために、陣を敷くのである。

（そう、通常はそういうものであるはずなのよ）

広場の隅で見学する受験生の一団の中で、明青は思う。

（でもあの人は一人で二人の間を『転送』させた。長い術式の詠唱もなく、陣なんてものもなく）

彼女が思い出しているのは先日出会った人物のことである。エツクと名乗ったその人は、また「隠者」とも呼ばれていた。その人は明青を王城の敷地内から転出させ、砂漠の舞姫・紅珠もその場に呼び寄せ、更に同時に二人を再び王城内に転送したのである。つまり隠者・エツクはたった一人で短時間の内に最大2人の成人女性を合計4回、決して近くはない距離を転送させたのである。しかも地上と地下を行き来するという高度な転送を難なく成功させているのである。

明青が転送術のことを調べたのは、呪術研究所の研究員となることを希望する人間に当然備わっているべきであろう、知的好奇心からというのももちろんあったが、本当は何よりも彼女自身がその稀有な術者に出会い、更に被験者となったという事実があったからであつた。

そして一通りのことを知った彼女の出した答えは、自分自身には少なくとも今現在の自分には、会得できそうにない能力であるということと、隠者・エツクの使った転送術は、現在一般に知られている『転送術』とは、どこか違うということであつた。

（一体、あの人はどういう人だったんだろう。あんなに強力な術者なのに。王都に住んでいるのに、なぜ王城に勤めたり、研究所に入ったりしていないんだろう。軍に所属している様子もなかった。それにあれだけの人の存在、どうしても誰にも知られていないのだろう）
そんな風に物思いに心を占められつつも、明青の視線は広場で展開されている転送術を見逃すことはなかった。

長い術式の詠唱が続いていた。東西南北の四ヶ所の光の柱はますます高く、強く輝き、その光の帯をゆつくりと周囲に広げていった。四本の光の柱を核に幾重にも重ねられた円の、その美しくも皓々とした目映さ、その荘厳とすらいえる輝きに、明青は全身が震えるかと思うほどの感動を覚えた。

自身も能力者であり、また研究所で様々な種類の能力を見てきた明青の目から見ても、今眼前で繰り広げられている術は、他と比べられようもないほど美しかった。この術を使うことのできないということが、今初めてのように悔しかった。

やがて転送術陣全体が青白い光で包まれた。そしてそこからおもむろに光が中心に集まり始めた。四方八方から注がれる光の帯は陣の中央の扉のない門扉を射した。集まる光は輝きを増し、そこに扉の形を現出させた。最初幻のようにおぼろげであった形は、徐々にはっきりとした扉の質感を備えてゆくように見えた。

術者の後方に控えていた役人三名が進み出た。白い長衣を纏い、目深にフードをかぶっているためにその容貌は知れないが、明青は彼らが皇国政府の呪術担当大臣と、皇家の神官であることを知っていた。彼らは皇の代理人としてこの術を行なう権利を有した、限られた人物である。

彼らは進み出ると、陣中央に形成された光の門扉の前に立った。彼らはそこで一礼し、何事かを口中で唱えた。それは周囲で詠唱の続けられている術式の文句とは違うもののようであった。

ややあつて三人の内の中央に立っていた呪術担当大臣が身を起こした。そして両手を光の扉に差し伸べた。そして宣言する。

「我求むる。千里の道越え万里の彼方を繋ぐ道を。我々の名において、扉の開放を命ず」

それは術の成った合図であつた。

ぎぎぎ、ときしむような音を立てながら、光の扉がゆっくりと開く。まるで本物の扉が開くときのようなリアルな軋みやぶれ、重々しい動きに、明青はもちろん、呪術研究所の受験生たちは一斉に息を呑み、嘆声を上げる者すらいた。

開ききつた扉の向こうは、薄ぼんやりした霧のようなものがあるだけに見えた。しかしそこから不意にぎい、ぎい、という音が聞こえてきた。そしてその霧のようなものからにゅ、と黒い棒のようなものが突き出してきた。

再び受験生の一団がざわめいた。明青は思わず心臓をどきりとさせたが、すぐに続いて黒毛の牛が現れ、更にそれに引かれた大きな車輪とその上に積まれたたくさんのきらびやかな箱が現れるのを見て、ふう、と息を吐いた。透明な膜を破つてまず出てきたのは、豪華に飾られ、たくさんの宝物らしきものを積んだ牛車であつた。

「あれは東公トウコウのだ」

ざわめく中からその囁きを明青は聞き取つた。確かに牛の背に掛けられた錦は東の公国に許された色である青で、そこには東公・？（シュウ）家の紋が付けられていた。ちなみに西公なら白色で、北公なら黒色、皇家なら黄色或いは金色となる。

何台か同じような牛車が出てきた後、一際大きく、豪華な輿が光の扉をくぐつて現れた。扉の側に控えていた呪術担当大臣がおもむろに進み出て、輿の上の人物に深く腰を折つて拝礼した。

「ようこそ、いらつしやいました、東公・？シュウリン倫殿」

その声に応える様に輿が下ろされ、輿上の人物が石畳の上に降り立った。

「出迎え、感謝いたす。沢東公国タクトウの？倫、王令により参じた」

東公・？倫が大臣の前に立ち、出迎えの言葉に答えて軽く礼をした。東公は壮年の、やや背が高く、がっちりした体格の人物であつた。

彼らが礼を交わす姿に、誰からともなく拍手が沸いた。それは転

送術が無事成功したことへの賛辞であり、そして国家行事である『皇公会議』の開始を祝うものであった。

同じ頃、吐蕃^{ジョウ}皇国西の公国^{シヤナン}沙南。公邸であり行政府でもある雲水^{ウンスイ}城の中庭に、たくさんの人間と騎獣、そして荷を積んだ車が何台も集まっていた。これらはすべて『皇公会議』のためにこれから吐蕃皇国首都・大都へ赴くものたちである。

沙南の雲水城の中庭というのは、庭というよりもパティオといったもので、足元には日差しをやわらげる効果のある、釉薬の使われていないタイルでモザイク模様が作られていた。また、庭の中央にはそれと同じ素材のブロックで噴水の備わった池が造られていた。池からは四方に細く水路が延びていて、噴水から穏やかな音を立ててこぼれた水は池を溢れ、水路を伝って庭を抜け、涼を振りまきながら城内へと引き込まれていく仕組になっている。更に城内を巡る水は、ダクトを伝って壁の中や床下を流れ、城内の温湿度を調整させたり、装飾品である小型の噴水に使われたり、室内や窓辺、また城壁にたくさん配されている植栽の為に使われていた。

その中庭の一角に転送術のための陣が作られていた。それはこの日のために中央から陸路派遣されてきた術者によって行われていた。この転送術を扱うことのできる術者は首都の皇立呪術研究所にしかないからである。それほどにこの術者は希少で、ゆえに厚い待遇を受けているのである。

沙南に作られた転送術陣は、大都のものよりも大分小規模なものであったが、人を圧倒する美しさは、数年前にも同じ光景を見たはずの沙南公国人たちにも思わずため息をこぼさせるほどであった。

この陣は首都・大都のものと対になっており、これらの陣によって不可視の通路を成立させるというのが、吐蕃皇国で一般に知られ、用いられている『転送術』である。対の陣を用いるのはその方が転送空間が安定し、長時間術を発動し続けることも、大質量のものを往来させることも、比較的容易になるためだと言われている。これは『皇公会議』のような大規模な国家的行事の際、遠方から人を招いたりものを送ったりする必要のあるときに用いられるもので、今回は会議出席者の移動手段として、これと同じ陣が東の沢東公国、北の高蘭公国コランにも作られているはずである。

広場で術式の様子を見守っている人々の中に、一際目立つ人物がいた。沙南公たる珪潤ケイジュンである。彼は、年に何回かし袖を通さないという、吐蕃皇国・西公セイコウの正装でその場に臨席していた。それは重厚な白絹に金銀系で刺繍をほどこしたもので、吐蕃西の公国のシンボルとして与えられた白を、これ以上ないほど豪華に仕立てたものであった。

西公・珪潤は30歳を過ぎたばかりの若い青年君主ではあったが、涼しげな目元に知性で引き締まった表情には、その豪華さを大げさだと思わせないだけの威厳があった。

「兄者」

背後から彼を呼ぶ声に、珪潤は振り向いた。そこには彼よりややたくましい感じがするものの、とてもよく似た姿の男がいた。西公・珪潤の実弟、珪節ケイセツであった。

兄と似たような白い正装を身に纏った珪節は、西公に対する礼になつた仕草で一礼したものの、すぐに親しみを込めた口調で兄に笑いかけた。

「何度見ても見事なものだな、兄者」

珪節の視線は目の前の『転送術』に向けられている。珪潤はそれ

に同意のうなずきを返しつつも、どこかその表情は浮かないものであった。

「どうしたんだ？浮かない顔をしている。何か気がかりなことでもあるのか？」

弟の言葉に珪潤はふつと息を吐いた。確かに幾分頬がこわばっているようだった。

「…本当にお前を行かせて良かったのかな、と思ってしまってた」

「何だよ、今更」

珪節は大笑した。

「大丈夫だ。兄者の顔に泥塗るようなまねはしないよ。そんなことよりも俺は兄者のことの方が心配だよ」

「？どういう意味だ？」

今現在この国に、大將軍たる弟が不在となることで何か不穏な事件が起こるような傾向があっただろうか？生真面目に考え込もうとした珪潤は、弟のにやにや笑う様子に戸惑った。

「せっかくうるさいのがごっそりいなくなるんだ。この好機にいい女性オンナを探しとけよ！」

「な、なんてことを…」

思わず頬を紅潮させる兄に、珪節は耐え切れないように笑い声を上げる。

「俺は決して冗談を言ってるんじゃないよ、兄者。もういい年とし齡なんだ。一国の当主がいつまでも一人身でいるのは良くないよ。まあ、俺たちのことは心配しなくて大丈夫だからさ、安心して待っていてくれ」

尚も笑いを残したままながら、珪節は比較的真面目な口調で言うと、珪潤に対して軍人らしく敬礼し、踵を返した。珪潤は慚然とした表情を直すこともできないまま、整列する皇公会議出席者の一団の前に立った。

西公の訓辞と見送りの挨拶を受けた会議出席者メンバーは、一人

ずつ転送陣をくぐって行く。彼らは一様に会議への少しの緊張と国の代表となった誇らしさに高揚した表情をしていた。珪潤は彼ら一人一人の様子を記憶に刻み込むようにじっと見送った。

中でも一番張り切った様子であったのは、彼の弟、沙南公国副公にして公国軍大将・珪節のようであった。転送の光の門の前で振り返った珪節は、遠くから実兄たる西公に敬礼をし、そして門の奥へ姿を消した。珪潤は思わず口元に微笑を浮かべながら、弟に敬礼を返してその姿を見送った。

本当に、良かったのだろうか。

再び心に兆した不安の影を、珪潤は大きく頭を振ることで追い払った。

5・皇公会議 2

皇公会議前夜の行事は夜の食事会のみであつた。これは晩餐会というほど正式なものではないが、皇の各公に対する、ねぎらいと親和の気持ちを示すための場であり、また久方振りに直接顔を会わせることとなる各公と皇の交流を温めるための場でもあつた。ゆえに、豪勢な料理の並ぶ立食形式の会場は、適度にくださった、ゆるやかな空気が流れていた。

大きなテーブルには大皿に盛られた料理が所狭しと並べられ、更に続々と出来立ての料理が厨房から運び込まれていた。その種類は、中央、すなわち吐蕃王国の名物料理はもちろん、北方の名物である動物の肉料理や乳製品、東の名物である魚介類の料理、西の名物である野菜や果樹中心の料理など、実に多彩かつ地域色あふれたものであつた。これは違う地域の料理に触れることで各公国間の相互理解を深めることが目的であり、またそれぞれの地域料理があることで、各公国の代表者たちの持つ、遠い場所へ来たことへの不安感を和らげることも意図されており、また更にそれらを供することのできる吐蕃王国の国力、吐蕃皇の威力を示すための演出でもあつた。

料理の皿の周囲はたくさん色とりどりの花々や小さな動物や人間の彫像などで華やかに飾り付けが為されていた。会場の一角には十人ほどの楽隊がいて、絶えず楽を奏していた。会場での会話を邪魔しないような巧みな演奏は、出席者の心を和ませていた。また、時折演奏される、アレンジされた各地方の伝統音楽は、各公国の人々を喜ばせた。

（何て華やかなところなのだろう…）

内心溜息を吐きながら、節はそつと首を回らせて会場を見渡した。染み一つ見えないほど真白な内壁に、鮮やかな朱や瑠璃や藍で彩られた浮刻で飾られた柱。連兵場ほどもある広さの室内は、彼には

名前も知らぬ色とりどりの花々で飾られ、更には煌びやかな立像や燭台が幾つも配置されていて、眩いほどに美しく、華やかであった。

珪節とて吐蕃皇国の有力国、沙南公国の公子として生を受けた者である。彼と彼の実兄・潤は、前・西公であった父の正妻の子供であった。珪氏にはたくさんの公子公女がいるが、正妻の子供は潤と節の二人だけであり、当然生まれたときから次期沙南公国を運営していく者として扱われてきた。沙南公国は吐蕃皇国でも富裕な国である。当然、その正式な公子であった潤と節は、恐らく皇国の中でも上位の生活を送ってきているはずである。

しかしそれでも、この吐蕃王城・円城は桁外れに豪華なところであると節は感じた。節の本業が軍人であり、貴族らしい役割は今までありなかつたという事実を踏まえても、それは確かなことであつたろう。

（兄者はいつもこんなところにいたのか…）

ついそんなことを思つて、節はふつと肩を竦めた。きっとあの兄は今の自分と似たような気持でいたのだらうと思つたからである。つまりは、身の置き所がないような、そわそわした居心地の悪さ、というものである。

節は軽く息を吐くと、手にした杯を喉を反らせるようにして一息にあおつた。居心地は悪くても、酒食は最高であつた。とろりと喉を下る酒の香気がふわりと鼻腔を抜ける。味に酔い、香りに酔い、酒精に酔う。醸造酒の名産地でもある吐蕃王国特産の一級酒は聞きしに勝る、と節は思つた。

「お飲み物のおかわりはいかがですか？」

実にタイミング良く傍らから声をかけられた。節が声のした方を振り向くと、一人の女中らしき女がたくさんの杯を載せた盆をささげていた。

「あ、ああ、ありがとう」

節は空けたばかりの杯をささげられた盆に置いて、代わりになみなみと新しい酒の注がれた杯を手にとつた。そうしながらもちりり

と遣った視線で相手の女中の姿をしつかりと目に留める。

女は節よりも頭一つ分ほど背が低く、すらりと細身でなかなか美しい容姿をしていた。長い黒髪は吐蕃皇国の未婚女性が正式な場に出席するときの髪型に結び上げられており、その髷には生花で作られた髪飾りが飾られていた。顔には美しく念入りな化粧が施されていたが、瞼に青い色が刷かれているのは、節が今まで見たことのないものだった。吐蕃皇国では一般的に、瞼も頬も唇も、朱で彩られるのが普通であつたからである。しかし見慣れないだけにいつそう新鮮に美しいものと節には映つた。

それらの観察をほぼ一瞬で遂げた節は、傍目にはあくまで礼儀正しく杯を受け取っただけであつた。女中は軽く目礼すると優雅な動作で歩み去つて行つた。ふわりと動いた空気が、甘い花のような香りを節の鼻先に届けた。

（髪飾りの…？いや、違う。これは人工の香りのようだ…と、するとこの城では女中ですら香料を身に着ける習慣があるということか…）

節の沙南公国でも、人工の香料は使われている。吐蕃王国からもたらされるものもあるし、大陸通商路を経て西から移入してきたものもある。しかしそれは大変に高価で貴重なもので、宗教的行事で清めのために使われるのがほとんどで、ごくたまに貴婦人が香りを身に纏つたりすることもあるが、それは本当に珍しいことであつたのだ。だからこそ、一般の身分であるはずの女中が香りを身に着けていることに、節は驚いたのである。

「本当に吐蕃王国というのは豊かな国なのだな…」

節は呟くと、こっそりと大きく息を吐いた。

「こちらにおいででしたか、閣下」

馴染みの声に呼ばれて節は振り向いた。そこには彼の思つた通り、沙南公国の宰相・景朔林が立っていた。彼は先代の頃から沙南公国の政治に携わつてきており、先代はもちろん当代の西公にも大変信

任篤い人物である。

今回の皇公会議に、沙南公国は代表たる西公は出席せず、副公が代理で沙南公国の代表を務めることとなった。しかし副公・珪節は国際舞台での経験が少なく、他国での知名度や信用度も高いとは言えない。そこで政治経験豊富で外交の手腕もあり、他国にもその人となりの良く知られている宰相たる彼が、節をサポートするために会議に出席することとなったのである。

「いかがですか、閣下。大都のご感想は」

「そうだな、聞きしに勝る、ひとことで言ってそんな感じだな。全てが立派で全てが美しい。私など、場違いなほどだな」

朔林の言葉に、節は笑いながら答える。自虐めいた内容に対して、その表情は明るくくだわりのないものであった。この屈託することのない明るさこそが、この若き沙南公国西公の実弟、副公にして公国軍大將軍たる珪節の強さであることを、彼を幼い頃から知っている朔林は知っていた。

「お前から見るとどうだ？この国は」

返された問いに、朔林は穏やかに答える。

「…そうですね、見たところあまり変わっておらぬように見受けられます」

彼は沙南の外交も担っているため、首都に来る機会も何度もある。吐蕃皇国の首都は変わらず豪壮で、壮麗で、見る者を圧倒させる威力に満ちている。

「活気に満ちた国だな。人も物も溢れるほどに満ちていて、ただここに立っているだけでも咽返りそうになる。良い国だ。ただ……」

節がそこで少し口ごもる。どう言おうかしばし考え、そして思案げな表情で、言葉を継ぐ。

「何か、あるような気がする。根拠はない感覚だが。……ここにいては見えないものでもあるのかな？」

若い主君の言葉に、朔林は明確な返答を控えた。彼は自分自身が確信を持ってないことには慎重を期す性格であった。しかし決して節

の言葉が的外れなことだとも思っではいなかった。

彼は前西公の頃から沙南の政治に携わってきた人物であり、内政はもちろんのこと、外交にも秀でた才能を発揮してきていた。だからこそ今回、若く政治経験の少ない副公の補佐としてこの大都へ来たのだ。当然彼は今まで何度もこのような首都での会議に出席した経験がある。しかしそんな彼にも、何やら今回は感じるものがあるのだ。それが何なのか、そもそも単なる勘違いなのか、それはまだ彼にも分かっていなかった。しかし充分気を付けておくべきだ、と彼は改めて思った。

朔林は副公・珪節の能力、特に状況判断能力を高くかっているのである。確かに節は軍人であり、何よりも年若いため、政治経験は浅い。しかし軍人・将軍として、状況判断や他人の能力を見抜き適材適所で活かす能力に優れていた。節は西公一族珪氏の名前だけで沙南軍の上に立っているわけではないのである。

「沙南の方々でいらっしゃいますか」

小柄な影が近づいてきて控えめに声をかけてきた。沙南の主従は同時に振り返った。そこには王城勤めの下級書記官がいた。

「皇がお呼びでございます」

彼は低いがはつきりと通る声でそう沙南の主従に告げ、礼儀正しく礼をとった。

そう言えばまだ皇に直接会ったことはなかったな、案内する役人の後について歩きながらそう節は思った。

皇の年齢は30代後半。節の兄、西公である潤よりも少し年長だがほぼ同年と違ってよいだろう。そう考えると親しみも覚えそうなものだが、何故か節にとって吐蕃皇は遠い存在であった。

前皇が病を理由に譲位して後、北方の土地に遷都して新たに商流を起こし、更なる国の繁栄を期している。皇について節の知ってい

ることは、その程度しかない。

沙南公国は吐蕃皇国の中でも大国であるが、その地理的要因もあり交流は以前よりも薄い。東と北の公国は公女を皇の後宮に入れたりして繋がりを強化しているが、現在沙南公国はそういった姻戚関係を築くといったこともしていない。それは単に時機がなかったり必然性や逼迫した事情もなかったためであつたが、こういうとき、その繋がりの薄さを実感するものなのだ、と節は思った。

「そなた、随分若いな、私と同じくらいか？この城に勤めて長いのか？」

節が前に立つて廊下を案内して歩く男に声をかけた。気軽な口調で話しかけられた若い書記官は歩調を緩めて後ろを振り返つた。やや高い位置にある沙南公国副公の顔は、気さくな笑顔を浮かべていた。その表情に、彼 それは今回の皇公会議で下級書記官として働くことになった嵐であつた は親しみを覚えた。

確か沙南公国副公にして大將軍珪節は30歳くらい。嵐は35歳であるから、同世代と言えそうである。年齢相応に見られることの少ない嵐としては大変意外な沙南副公の言葉であつた。

「いえ、私は臨時職員でございます。この数ヶ月間は皇公会議と試験が重なって人手不足になってしまったために補充されたのでございます」

意外だと感じる気持を表情の裏に隠したまま、嵐は礼儀正しく会釈をする。

「そうだったのか。そなたすっかり落ち着いておるからてつきりそうだと思つてしまったのでな。失礼」

嵐の言葉にやはり沙南の副公は気さくに笑つてみせた。

随分礼儀正しい人物だな。為政者、それも軍人にしては驕らない節の人柄は好感が持てる。嵐は短いいくつかの言葉のやり取りの中でそう感じていた。

これはこの珪節一人の美質なのか、それとも沙南人の持つ気質な

のだろうか。いずれにせよ、実兄の西公・珪潤の気質も推して知るべしである。

「こちらで皇がお待ちでございます」

廊下をしばらく進んだところで嵐は立ち止まり、大きな扉を示した。豪華な装飾の施された黒い艶々した大きな扉であった。扉の両側に兵士が控えている。彼らに嵐が来意を伝えると、表情も変えな
いまま、兵が扉を開けた。

謝辞を述べて扉の向こうに消えた沙南の主従を見届けると、嵐は静かに廊下を歩み去った。

（さすが吐蕃有数の大国の要人だ）

嵐が思い出していたのは旅の途中で立ち寄った沙南公国の様子である。緑と水に溢れ、大都のような壮麗さはないものの、穏やかに美しいところであった。実際、沙南公国は吐蕃皇国の中でも有数の治安の良い土地柄なのである。

（明朗快活で気質もよく、その上洞察力も備えている貴人に、明晰かつ経験豊富な宰相。政治手腕は彼らの国の様子を見れば一目瞭然
か）

ふつと嵐は振り返った。歩みを緩めながら、既に角の向こうのために様子を窺うこともできない位置であるが、沙南の主従と皇の会談の行なわれている部屋はすぐそこである。そちらと思しき方向に視線を遣りながら、嵐は声に出さずに呟く。

（さて、どう出るのか）

沙南公国副公・珪節の目に、初めて拝謁の叶った吐蕃皇は想像以上に若く見えた。冷静に考えれば皇の年齢は節の兄、潤とほぼ同年とすれば節自身とも十歳も違わない。だが吐蕃皇という大国の統治者としての姿を想像するときその姿はあまりにも若すぎるように思われても当然のことであつたろう。人間の想像力とは往々にして陳腐なものである。

「おもてを上げよ。楽にせい」

やや甲高い若々しい声が一段高い場所に設えられた皇の場所から発せられた。節が顔を上げると、皇は穏やかな表情で微笑んでいた。「兄君の西公とは何度か会っておるがそなたとは初めてであったな。噂は聞いておるぞ。弱冠の身で西公国軍を束ねる大將軍。武はもとより、文にも優れておるとか」

「お耳汚しでございました。何分まだ若輩者ですから、先達に教えを請う毎日です。それでも亡き父の名に恥じぬよう、兄を助けよい政を行うよう、心がけております」

「亡き前西公も鼻が高いであろうな。兄弟共に正副公の地位にあつて協力して国を治めておるのだから。世も前西公には世話になった。頼もしい相談相手と思つておつたよ」

「過分なお誉めの言葉、ありがとうございます。西公も我が父前西公も、喜んでおると思います」

勧められた椅子に着いた節は改めて頭を下げた。節の背後に宰相・景朔林ともう一人の文官が彼同様、椅子に着いている。各公国の代表者は形式的には皇の配下だが、実質力関係は、皇国の統治のために協力する同士である。完全に皇と公は同等の立場ではないが、公とは皇にとつても敬意を払わねばならぬ存在なのである。

「ところでこたびは西公はいかがした？体調が優れぬと聞いておるが……」

ふと、といったように話題が変えられた。しかしそれは予測の範囲内であつたので、節は慌てることもなく、一礼すると答えた。

「はい、西公はここしばらく体調を崩しておりまして。最近の異常気象のせいもありましょうか。直前まで出席したいと希望しておつたのですが、やはり無理が利かぬということで断念したのであります」

「そうか、残念だな。しかしそのために副公のそなたに会うことができたのだな。やはり巡り合わせというものかな」

節の説明に、皇は特に不審を抱いた様子もなかった。少なくとも、

節や、その後ろで控えていた宰相の目にも、そう映った。

会談は終始和やかな雰囲気の下に終わった。節の目には、皇は少し神経質そうではあるが穏やかな人物と映った。国にいる頃に聞いていた皇に関する情報でしばしば聞いていたような、独裁性や猜疑心の強さなどは特に感じられなかった。もつとも、これはあくまで非公式な会見であり、ただ単に機嫌が良かっただけという可能性もあるため、単純に皇のことを判断するには至らないと節は思っている。

ただひとつ気になったのは、最後の言葉。

『今回の宴は我が後の発案によるものだ』
というもの。

皇にたくさんの愛妃がいるのは確かだが、正式には妃と呼べる存在は、現在の吐蕃にはいない。そもそもそれを決めるのが今回の会議の議題であつたはずである。

皇には心に決めた妃がいる、というのは確かなのだろう。だがそれを決定するのは皇の意志だけでは叶わない。愛妾ならば誰を、何人持つのも皇の自由だが、皇妃は政治権力の問題である。必ずしも皇の希望が通るとは限らないのである。そんなことは、皇も承知しているはずなのに、軽率な言葉であつた。

「やはり平穩にはいかぬようだな、この会議」

皇との会見の部屋を辞し会場に戻る廊下で、節が呟いた。主君の言葉に、後ろで朔林が無言で頷いた。

会場に戻った節はその後も各国の代表との挨拶に追われた。何しる節は今まで軍人としては活動していたが、純粋な政治の世界に関わるのは初めてである。つまり今回の出席者ほとんどが節にとっては初対面の人物ばかりなのであつた。

しかしそんな節でも面識のある人物がいた。沢東公国の東公・？

倫である。

三公国の中で最も軍事力を持つのが東の沢東公国で、特に重装歩兵中心に編成された軍隊は、吐蕃皇国でも重要な位置を占めているのである。軍人である節は、沢東公国に勉強に行ったこともあるし、父である前西公が存命の折りは、何度か沙南公国を東公が訪問したこともあるのだ。珪節兄弟の父である前西公は、大変博識で性格は中庸であつたため、生前は皇に限らず多くの人から慕われ、知識を乞われた人物であつたのだ。

「お久しぶりでございます、東公閣下」

節が礼をすると東公は親しい者に見せる表情で笑った。

「おお、西の腕白小僧ではないか！ 久しいな。大層活躍しておるようではないか。噂はよく聞いておるぞ」

「それはお恥ずかしい……ですが閣下こそお変わりないようで」

「僕はもう年寄りだからな、変わりようもないわい」

「またそのようなご謙遜を。西の方でも色々お噂は届いておりますよ」

節が笑うと、東公は言うようになったな、と豪快に笑った。

東公は立派な体格に厳つい顔をした見るからに戦場の似合う偉丈夫であつた。その性格も見た目通り豪放で、しかし下の者の面倒見もよい、なかなかの人格者でもあつた。

前西公とは全く違う性格であるが、節は東公に対して父親のように親しみを持っていた。

「今回はぬしが来たのか。世代交代か？」

からかうような東公の言葉に、節が苦笑しながら頭を振った。

「あいにくとただの武者修行ですよ。武芸のみの無粋者に都の華やかさは刺激的すぎるようです」

冗談のような言葉であつたが、彼としては本心であつた。するとそれまで機嫌の良さそうであつた東公の表情にふっと陰りが過ぎった。

「確かに派手すぎるな、今回は」

東公の声にはいささかならず苦みが込められていた。

先ほどの会見で皇は節に、確かにこの宴は後の企画したものだと
言っていた。それならこの東公の表情からすると、皇の指した后と
は東の姫君ではないということか。節はそう考えたが、発言は控え
ておくこととした。

なぜなら東の姫君とは今目の前にいる東公の娘のことだからであ
る。そして東の姫君が皇の一番の寵妃ではなくなっているとするな
ら、それは東公の吐蕃皇国中央、すなわち皇に対する勢力の弱化を
示すことと同義となる。

東の公国は歴史のある国で、産業から軍事力まで含めてしつかり
とした国力を有している。そして現在の東公も統治者として大変有
能な人物である。後宮内部の皇后争いに破れたところで吐蕃国内で
の勢力を失うわけではないが、平穏なままであるとは考えにくいこ
とである。

いずれにせよ会議が始まれば明らかになること。節はそう考えな
がら用心深く表情を消した。

突然会場がわっと沸いた。節がそちらに視線をやると同時に強い
花の香りが漂ってきた。そして人だかりの中心を割って、大きな紗
を垂らした傘が進んできた。ぽかんとしてその光景を眺めていた節
は、ふと隣の気配が変わったのに気付き、振り向いた。斜め上に向
けた視線の先で、東公が鋭い視線を騒ぎの中心に突き刺していた。

やがて傘を囲むような隊形で進んできた侍女たちの一団が節たち
の目前を過ぎった。

通り過ぎる一瞬、白く柔らかな紗が微かに揺れて、隙間から白く
細い指がのぞいた。ほんのわずかできた布の隙間から、中の人物の
陰が僅かに現れる。紗よりもよほど白くなまめかしい肌。鮮やかに
真っ赤な口唇が動いた。

「こんにちは、皇のお客人。今夜は充分にお楽しみくださいましね」
一言毎に甘い痺れを感じさせるような声音。耳を素通りして直接
脳髓に意味を突き刺してくるように届く言葉。僅かの動作に応じて

動く空気に乗って鼻孔をくすぐる濃い何かの花の香り。思わず目眩を起こしそうになって、節ははっとした。軽く頭を振って、非礼にならぬようそのまま軽く目礼をした。本能的に、この声の人物が皇の言う、今夜の会の企画者である姫君だと察したからである。

紗の向こうの人物は目礼をしたままの節の前を再び紗を閉じて静かに歩み去った。その気配が完全に過ぎるのを待ってから、節は体を起こした。隣に目をやると、東公も節同様頭を上げたところであった。その横顔に浮かぶ表情と気配で、節には東公が必死に憤りを抑えようとしていることがわかった。

「何という…このような者のために…」

東公の声は非常に小さく、すぐ隣にいる節ですら聞き取りにくかった。しかしその声には抑えようもない怒りがにじんでいたのである。

皇公会議は三日間のレセプションから始まった。

このレセプションとは普段交流の難しい各公国同士と基本的に中央で政務を執っている皇のため、各公国の名物であるとか得意分野で一種のショーを披露するというものである。ショーといっても完全な娯楽が目的ではない。重要なのはその一つの舞台で国の特徴を完全に表現することなのである。このこと一つとっても『皇公会議』が単なる全国会議などという単純なものではないことを示している。

『皇』を頂点とし『公』がそれを補佐し手とも足とも目ともなり、協力して大陸の半分を占める巨大帝国を治め維持する。そのためには力の均衡と相互の信頼関係が何よりも重要となる。そのためには相互理解とそのための努力が必要不可欠なのである。『皇公会議』などという大掛かりな行事が数年に一度必ず開催されるのは、そういった理由もあるのである。

一日目は西の沙南公国が舞踊を披露した。これは沙南公国を形成する中心民族であるユン族の伝統的な踊りである。

このユン族の舞踊の一番の特徴は、男たちの演奏に合わせて女たちが舞うことである。舞台の中心を囲むように打楽器や吹奏楽器などを構えた男たちがずらりと並び、その囲まれた中に数人の女たちがばらばらに立つ。彼女たちの舞はてんではばらばらの方を向いて演奏をする男たちを、そして更にその周囲の観客たちを、それぞれ見据えながら己の舞を表現する。そしてその所作も舞手それぞれ微妙に違う。つまり団体で舞台に立っていても、彼らは自分自身を披露するのである。しかしながらその全てが全体としての美しさを形作る、実に見事な舞踊なのであった。

また、どこか異国情緒を漂わせる衣装や楽器などの小道具は吐蕃皇国では珍しいものであり、またどこか聴く者に哀愁を覚えさせる曲調が、人々の心を捉えた。また、吐蕃地方一般の常識よりも女性の衣装は露出度が高く、西域の影響を受けたやや激しい舞の動きによる身体の表情を艶っぽく見せていた。尚、ことに皇の喜び様がすごかったというのは完全な蛇足ではある。

二日目は東の沢東公国であった。沢東公国の東公・？倫は自らも武人であり、軍人としては一線を退いた現在でも日々鍛錬は怠らないという武勇を好む人物であるが、それが己のみに留まらず、武勇全般を広く愛し、奨励するのに何も惜しまない、というのがこの東公という人物であった。沢東公国で行なわれる大きな祭では必ず武闘大会が開かれるというのも、現在の東公になってからなのである。この東公が皇公会議レセプションで披露したのは、模擬戦に演舞を取り込んだものであった。

沢東公国自慢の重装歩兵が二隊に分かれて軽い模擬戦を行い、それが一区切りするとさっと退いて二隊が整列する。その中から剣舞や闘舞に優れた者が次々と中央に進み出て己の技を披露する。力強くも美しい形式美と肉体美に、広場を埋め尽くす観衆からは思わず

溜息が漏れた。

伝統と格式を有し、特に武に秀でた力を有する沢東公国ならではのショーであった。

三日目は北の高蘭公国による馬術競技が披露された。

高蘭公国は三つの公国の中でも特殊な形で国を形成させている。

他の公国が一人の公の下に議会制の統治を行なっているのに対して、公は確かにたった一人存在するものの、それは元々北地方に点在する諸侯や少人数部族の頭領であり、多数の部族の中でも有力な者が他部族の承認も得て『吐蕃皇国の高蘭公国・北公』の地位に就くのである。そして高蘭公国の政務は北公含め有力部族の長たちが連絡を取り合い、時には一所に集って行なうこととなる。

しかし実態はと言えば、『高蘭公国』としての行動以外は各部族内でそれぞれ独自のルールに則って日々の生活を行なっているのである。良い意味でも悪い意味でも公国構成員の独自性が強い国柄なのである。

故に今回の皇公会議にも北公・曜黒率いる曜氏の他、西域諸侯筆頭の陽氏、回氏の計三氏族が王都・大都に集って来ていたのである。しかしその三部族の勇者たちが披露する馬術は紛れもなく、控えめに表現しても壮観なものであった。

北の民族とは騎馬民族であり、現在でも定住地を持たず遊牧を行なっている部族は多い。しかし高蘭公国を形成する有力諸侯のほとんどは定住地を持っており、季節毎に多少家畜の放牧する場所を変えるくらいであった。つまり、定住しているからこそ、吐蕃皇国中央とも対等に取り立てる国力を有していると、吐蕃皇国中央からはみなされるのである。しかしそれでも彼らの騎馬民族としての力はいささかも衰えず、吐蕃皇国随一の機動力を有していることは、今回のレセプションで明確に人々に示された。

人馬一体となって広場を駆けたり、疾走する馬の背で騎手が曲芸的な身のこなしを見せたりする度、観衆からは割れんばかりの拍手

と歓声が彼らへの賞賛として贈られた。

どちらかと言えば武力よりも文官的な気質の強い吐蕃皇であったが、目の前で繰り広げられる馬と人との共同芸術に賞賛を惜しまなかったと言われる。

また、このように各公国のショーが行なわれている中、夜には何度が演奏会も催されていた。

吐蕃王城の城勤めの楽師たちによるもので、内庭で演奏される楽の音は王城内にいる者全てが聴くことができた。

ある者は昼間の活動の疲れを癒し、ある者は来る会議本番へ向けての準備の手を一時休めて気分転換をはかり、またある者は就寝前の心をその美しい音楽によって静めたりした。

後に知られたことであつたが、それは後宮の王妃・東の姫君の企画したものであつた。格式と伝統を大事に守ってきた東の沢東公国出身の王妃は、大変に優雅で知的な女性であり、特に音楽の分野には造詣が深く、本人も楽師に劣らぬ演奏技量を有していたのである。しかし彼女は伝統的な淑女としての振る舞いを大事にする女性でもあり、しとやかで奥ゆかしく、みだりに人前に姿を現すということが無かつた。今回のこの演奏会にしても、結局姫君自身は決して人前に姿を現さず、それが王妃の指示によって行なわれているということも明らかにしなかつたのである。

6・皇公会議 3

会議は始めから紛糾した。皇が強硬に金の姫君こと高蘭公国有力氏族・昌氏の娘火晶を皇妃とすると宣言し、他の誰の意見にも聞く耳を持たうとしなかったからである。

嵐は書記の一人として議場において、その様子を記録していた。ほんの最近雇われたばかりの嵐が皇公会議の書記などという重要な仕事を与えられたのは、彼が文字の読み書きという特殊技能を有していたからである。

吐蕃皇国ではこの当時、文字の読み書きは皇をはじめとした貴族や彼らに仕える役人、それ以外では学者や商人の一部が身に着けているだけの、特殊技能であったのである。殊に、嵐のように特定の有力者陣営に属さない有識字能力者は貴重で、こういった公の場の記録者として重宝されていた。偏った視点ではなく公正な目で議事録を残すことができるからである。

その期待通り、嵐は公正にこの会議を記録していた。公の発言は全てが記録され、それが公式な史書として後世へ残されてゆく。それを知っていたから尚更、嵐は公正を努めた。

皇は列席者一堂の前で言った。

「今回皆に集まってもらったのは他でもない。世が火晶を皇妃とすることを皆に告げるためだ」

形式ばった開会の辞や互いの挨拶を終えた直後のこの皇の宣言は、そう、正にそれは『宣言』と呼ぶ以外にない、断固さを持っていた。控え目に言って大波紋を起こした。

国の権力者とは言え、吐蕃皇は独裁者ではない。そのような力は認められていない。建国以来、国全体に関わる重要な決断には、会議をもって意見の擦り合わせと意思統一が図られてきたのである。

だから今回の皇の言葉は当然のことながら異例で、諸公や、その関係者に不快な思いを抱かせた。

「そうは申されましても皇妃といえば皇のお妃様である以上に国の母たる存在になれる方。しかしながら我らは火晶妃の人となりなど、何も存じ上げませぬ。ゆえに軽々にはご賛同いたしかねまするが……」

騒然とした議場の中、皇に対してのみならず、各公同士牽制し合い、碌に建設的な意見が出ない。誰かが言わねばならないこんなセリフさえ、各公国間の言外の牽制の末、沙南公国西公代理、副公・珪節のものとなった。身中に大いなる脱力感や複雑な怒気を感じながらも、節は礼節を保ってその役目を引き受けた。沙南以外の北と東の二公国は、それぞれ皇の後宮に姫君を入れている。しかし沙南にはそれがない。故に問題の当事者ではない立場での役割というのが押し付けられてしまっているのである。

こんなことなら姉姫でも妹姫でも、はたまた遠縁の姫君でも、後宮に入れておけばよかったと、思考放棄しかけた脳髓の片隅で節は呟いた。そのままちらりと隣席の宰相の様子をうかがう。すると視線が合い、その瞬間節はたしなめるように睨まれた。表情には感情は出していないはずだが、と思いつつも節は軽く肩を竦めた。

前西公であつた父親の側近として、そして兄の潤が西公位に就いた今は自分たち兄弟のため、沙南のために働いている彼は、節や潤の兄弟にとって、父親ではないがそれに近い存在であり、感情の関係もそれに近い。他人には隠し通せてもこの人物の目には自分たちの感情など筒抜けなのだろう。改めて軽く肩を竦めながら、節は背後から文官の差し出した書類を受け取り、それに目を走らせる。そこには、今現在議題の中心にいる、火晶妃についての簡単なプロフィールがあつた。そこには国元、つまり沙南公国にいる間に収集した情報に加え、この数日間、随行の文官たちが大都で収集した情報がまとめられていた。

火晶。当年14歳。高蘭公国出身。高蘭公国の西端地域に中心勢力を置く、西域諸侯・昌氏の娘である。昌氏の現頭首は既に老壯の年齢であるため、随分遅くにできた子供ということになるが、それはこの場合あまり問題ではないのだろう。多かれ少なかれ、どの国、どの一族にもある話である。

火晶妃の特徴は、何と言ってもその容姿にある。金色の髪に淡い茶色の瞳、そして陶磁のように白い肌。基本的に黒髪黒瞳の吐蕃人とは全てが違う特徴を備えているのである。まるで遙か西方の国、例えば西の大国バルジャに住む人間のようなと節は思った。しかし吐蕃でも北方ではそういった容姿の人間が生まれてくることも珍しくないことを節は知っていた。

（西域諸侯には東西の人種の血が入り混じっていると聞く：中には完全な西方人の特徴を備えて生まれてくる者もいるとか。恐らく火晶妃はそういう人なのだろうな）

しかし何にせよ吐蕃皇国では大変珍しい容姿であり、大変に衆人の耳目を集めるということは疑いようがない。

（『金の姫君』、か）

書類の内容を頭に入れつつ、節は先日のことを思い出していた。諸公が大都に到着したことの歓迎の宴の席、侍女を連れ、傘に身を隠しながら挨拶に出てきたかの宴の女主人。傘から垂らされた紗のために顔は見えなかったが、紗を除けた指は細く白く、肩にかかり流れる髪は、ゆるやかにウェーブした金色だった。

（なるほど、あれが『金色の姫君』だったのだな）

その時鼻先をくすぐった甘い花の香まで蘇ってくるような鮮やかな記憶に、節は一つ大きく息を吐いた。

（確かにかの女性なら、民衆の受けも良いだろう）

書類の終わり辺りには、火晶妃の大都での評判が挙げられていた。それによると大都の市民は彼女のことを「金の姫君」「天帝に愛された姫君」などと呼び、その名を知らぬ者など無いほどだという。

また、彼女に憧れるのは老若男女を問わず、特に女性の間では彼女を真似ることが流行っているという。

異国の美貌の姫君。

その姫君の持ち込んだ、珍しい品々への興味。

加えて市井にも比較的気軽に姿を見せる親しみやすさ。

それまでの貴族の人間とは全く違う魅力に溢れた貴人。ただ物珍しいというだけの感情も含めて、民衆に人気が出るというのも当然のことであろう。

と言つて、他の候補に挙がっている姫君方に魅力が無いわけではない。

特に、現在「皇妃」の次に高い位である「王妃」の称号を戴いている東の姫君は、吐蕃人の一般的に思う典型的なお姫様の象徴のような人物であつた。

優雅に結い上げた艶やかな長い黒髪、しつとりと濡れたように光る漆黒の瞳、そして象牙色の肌に柳の木のようなたおやかな立ち姿加えて、東の姫君は大変品が良く聡明で、慈悲深い心の持ち主であり、今から約10年程前後宮に入つて以降、皇を支え、時には助言もしたりして、立派に吐蕃のために努めてきたのである。

特に彼女の功績として挙げられるのは、芸術学院を設けたことである。ちなみに正式名称は『吐蕃皇立芸術学院』という。東の姫君は彼女自身、琴の名奏者であつたが、また同時に良き指導者としての能力もあり、芸術の能力を持つ者を広く集め、その才能を伸ばさせることが大切だと考える、進んだ人物でもあつた。まだ学院の運営は軌道に乗せたばかりであつたが、その評判は上々であつた。

ただ、彼女は大変に真面目で伝統的な礼儀を重んじる性格で、それを誇りに思う人物であつた。その価値観からすると、女性がみだりに人目に姿をさらすことにはしたくないことであり、また感情をあまり顕わにすることもできるだけ控えるものであつた。特に夫のいる身なら尚更のことであつた。いわんや身分の高い者が下々の者に

直接触れ合う場所に出るなど、なるべくなら控えるべきことであつた。

そういつた価値観、行動規範に基づいた姿勢は、今までの皇侯貴族なら当然のことであり、そういつた奥ゆかしさ、清楚さに人々は憧れの念を抱いていたものであつた。

しかし他方に気さくに笑顔を向けてくれる美しい貴人がいれば、衆人の好意はそちらに向けられるのは当然の流れであつたろう。

（東の姫君には気の毒なことだが　しかし　）

しかし、と節は思う。それでも皇がここまで頑なに金の姫君に入れ込む理由には弱いと思わざるをえないのである。

（皇とて東の姫君のことを尊重し、信頼していたのではなかったのか？ならば東の姫君を『皇妃』とし、金の姫君には『王妃』となつていただく。そしてお二方を両翼として皇の両脇に立つていただくそれが筋であり、最高の方策ではないのか？）

『皇妃』と『王妃』の違いなど、実質的にはほとんどないものと言つてよい。強いて言うなら『皇妃』の方により強い「拒否権」があるくらいなもので、他の権限はほぼ同等に認められている。何と言つても最終的な「決定権」は皇唯一人が持つものだからである。

この称号が生まれた当初にはもつと大きな違いがあつたのかもしれないが、現在では『皇妃』の名称はほとんど名譽的な扱いとなつてしまつているのだ。それでも『皇妃』を戴く姫君が皇の正妃であることは確かで、その席を空けてはいけないのである。

節はそう考え、その案は間違つてはいないと確信を持つていた。

何より、それで各公の面目も保たれる。そして、そんなことが分からぬほど、現皇は暗愚な人物ではないはずである。

書類を全部読み下し、節はゆつくりと視線を上げた。相変わらず議場には異様な空気が漂い、不毛な遣り取りと無言のかけひきが続いていた。今この状況で正論を述べてもたちどころに黙殺されてしまふであらう。そして下手をしたら各人の変な意地やプライドを刺激し、提案が闇に葬られてしまふかもしれない。今は時期ではない。

そう節は判断した。

しかしそれでも最終的には理性的な結果に落ち着くだろう。それほどに深刻な事態となる問題ではない。険悪な雰囲気、空気が重く、澱んでいる議場を眺め渡しながら、節はそう考えていた。

どこかで軽やかな鐘の音がした。それを合図としたように、皇の傍らの男、皇付きの侍臣が立ち上がり、午前の会議の終了を告げた。

結局何一つ進んでいない。節は既に一日分の精神力を消耗した気分になっていた。

しかしその日、結局会議はそれ以上全く進まなかった。

午後、一時間ほどの休憩を終えて議場に戻った節たち会議の参加者はそこで、午後の予定が中止になったことを知らされたのである。理由も説明もない一方的な通告に、節はさすがに呆然としてしまったのであった。

午後からの審議がなくなってしまうためさしずめやることのないようになってしまった嵐は、臨時職員用の控え室に戻った。

廊下はたくさんの人が行き交い、ざわざわと慌しい雰囲気、包まれている。おそらく普段はこれほど騒がしいことはないだろう。こんな中でもあくまでしとやかな拳措で廊下を歩んでいた女官たちが危うく後ろからぶつかられそうになって、とうとう壁際に立ち竦んでしまっていた。飾り気はないものの上品な衣装の彼女たちはこの吐蕃皇国王城・円城に普段から仕えている上級女官であるが、足音荒く通り過ぎる文官、おそらく衣装からして沢東公国の人物と思われる。に、嫌悪の視線を向けている。おそらく彼女たちの常

識では許されない無作法なのであろう。

（諸公は大変だな。これ程深刻な話になるとは思っておらんかったであろうしな）

しかも皇は誰の話にも聞く耳を持たない。いや、おそらく、反対意見に対して聞く耳を持たないのであろう。

（しかしそれならそれで、事前に根回しの一つあれば、それである程度の混乱は避けられたのではないか？当事者たる北公と東公には完全な冷静さ、納得のいく条件を提示できぬであらうが、ならばせめて西公には事前に打診一つあってもよいはず。それすらおそらくなかったのであろうな、あの様子では）

先ほどの議場の様子を思い出しながら、嵐はそう考える。

もちろん、これだけの政治家が集まって、駆け引きの一つもないはずはないから、もしかしたら承知の上での演技をしている者もいるかもしれない。しかし嵐は自分の人を見る目には自信を持っていた。その目で見て結論は、今の混乱は本物である、ということであった。

皇は一体どういふつもりでいるのか。事前情報には全くなかったこの混乱ぶりに、嵐は思考を廻らせる。

もちろんこの城内での情報は吐蕃皇国内でもトップシークレット扱いであり、特に皇の考えていることなど、一般職員の知りおせるところではないことは承知している。しかし臨時雇いとはいえ、会議の書記という重責を伴う仕事をしている関係上、嵐は 嵐たち会議書記役たちには 大まかな審議の予定や内容などが知らされていた。

それによると、『立皇妃』は三公と皇全体の話し合いの議題であるが、その他に各個懸案事項について情報交換もしくは対応策を講じたりすることとなっていた。例えば沙南公国とは最近勢力を増してきた「砂漠の民」について意見交換される予定となっていた。彼ら「砂漠の民」が勢力を増してきたのは事実であるが、それは実際どのようなことになっているのか、吐蕃皇国として深刻な脅

威を感じるほどであるのか、またそうであればどのような対処が必要か、など。

これは国としての防衛の問題でもあるが、一方で吐蕃皇国の刑法上の問題にも関連してくることである。というのも、「砂漠の民」と呼ばれる非定住民族は、その構成員のほとんどが吐蕃皇国から脱走した人間と言われている。そして脱走の理由は様々あれど、その多くは吐蕃皇国内において罰せられるべき罪人なのである。もちろんそのような人物ばかりではなく、周辺の国 例えば南のカジャール王国からの亡命者などもあり得る。基本的に出自も事情も問わず受け入れるというのが「砂漠の民」の姿勢であり、それを頼り、或いは憧れて人々が集まり、現在では一つの民族を名乗れるほどの人口と多様性、組織性が存在しているといわれている。しかしそれを容認することは、できない、というのが国としての姿勢である。

今までは黙認してきたところがあるが、何らかの対応をとらねばならない時期に来ているのではないか、それが吐蕃皇国の考えである。そういった各公国との個別会議にそれぞれ最低一日という時間を割くとして、最低三日は必要。つまり残り四日間で「皇妃」を内定し、正式な告知の日取りや式典の準備など詳細を決する予定であったのだ。それも他の問題がスムーズに収まれば、の話である。当然そうはならないと予想されているからこそ、会議予備日なども最初から用意されているのである。

しかし、いくら予定を組んでいてもこのように審議拒否とも取れる行動に開催側である皇が出ては、到底予定の内容もこなせるものかどうか。

（予想以上に先行き困難なようだのう…）

嵐は一つ大きく息を吐いた。

では皇は自身の要求が諸公に受け入れられないということを知承知しているということなのだろうか。否、それは違つと嵐は思う。特に根拠があるわけではなかったが、彼は確信していた。皇はそれ程

無欲でも無我でも無様でもない。むしろ自意識の大変強い人物である。そのような人間が負け戦を仕掛けるはずもない。しかも今日のような、相手　この場合は諸公たちであるが　を焦らし、侮辱とも取られるすっぱかしを食らわすといった手段をとっているのである。

（皇には『勝つ』自信があるのだ。それだけは間違いない）

今日の午後に入った皇の「急用」がいかなるもので、本当に重要なものであったとしても、理由を何一つ説明せず、納得のいく説明もなく、ただ「中止」と宣言しただけのこのたびの皇の側の態度は、諸公国にとっては大変な非礼に値する。いかに皇がこの吐蕃皇国の統治者であり、公の上に立つ者であるとしても、こと皇国政治に関して皇と公は同等の立場にあるはずである。それを軽んじるような態度は大変不味い。公の憤りを受けても文句は言えない。

（全く、皇は何を考えているのやら。まるで　　）

そこで嵐はふと足を止めた。

彼の周囲を器用にすり抜けながら人々が行き交う。中には廊下の真ん中で突っ立つ障害物となってしまった嵐を迷惑そうに睨んでゆく者もいた。しかし嵐は全くそれが気にならなかった。彼の目は見開かれていたがそこにある何も見えず、彼の耳は騒々しい廊下の音を拾わなかった。

（まるで、それでは、それでは　　）

嵐の耳には自身の内なる声しか聞こえてはいなかった。

突っ立っている嵐の背が、どん、と押された。危うく足をもつれさせそうになりながら、嵐は体勢を立て直し、歩き始めた。

嵐が休憩室に戻ると、百が見つけて駆け寄ってきた。二人とも城内勤務に就くようになってから日中顔を合わせることなどなかったため、嵐はこの偶然に驚いた。

百の言うところによると、今日の彼の仕事は城内での荷物運搬で

あった。この城内には様々な人間がおり、それぞれの仕事も種々ある。よって城内に運び込まれる荷物も小さく軽い書簡から大人が数人力を合わせて運ばなければならぬほど大きく重いものもある。百は午前中、主に書簡の配達に従事していた。それを終えて次の荷物を受け取りに行ったところで、本日の業務は午前で終わりにすると言われ、わけが分からないまま、この休憩室に戻ってきたのだと言う。

「何か噂では皇サマが急に帰って来て、奥に行っちゃったって……だからオレらはお城の中でうろついてちゃいけないんだって……何かそれってオレらが邪魔って言ってるみたいじゃないですか、そんなん、なんかむかつくんですけど！」

「……ハクよ、それは正直な言葉なのだろうが、できれば控えた方がよいぞ」

嵐は百の不敬罪ととられかねない言葉遣いに小さく苦笑した。彼らは広い部屋の間で話しており、しかも他の人間はそれぞれでやはり話し込んでおり、ぼそぼそとした囁き声や大声の怒号も飛び交う騒然とした部屋の中で、彼らの会話に耳を傾けている人間などいないであろうが、気を付けるにこしたことはないのは当然である。

とりあえず嵐も百も今日は城内にいない必要がなくなったということである。そこで彼らは城下町・大都にくりだすことにした。食事がてら町の様子をゆっくり見てみようということになったのである。

城下町と城内とは定期的に乗合馬車が往復している。もちろん城内に正規の用事がある者しか利用できないことになっているが、城勤めの者は無料なので、大変人気がある。なにしろ円城も大都も広い。城から城下の南端まで徒歩で一時間以上かかってしまうのだから。

嵐と百は昼一番の馬車で城下へ出た。

彼らの宿もある城壁内の一番南側の地区は、主要道路である「夜光の道」の両脇こそ植樹などされていて大変美しくされているが、

一步脇道に入ると道も建物も人も入り乱れた、下町の雰囲気になる。そして広場にはなぜだか露店まで出没していた。『皇公会議』開催ということで客をあてこんでいるのだろうが、基本的に会議関係者がこのような城の端の方に来ることはない。あての外れたらしい露店のオヤジたちはそれでも懸命に呼び込みの声を張り上げていた。しかしほとんどは二、三人で世間話に興じている方が多かった。そんな騒がしい町の中、嵐と百はぶらぶら歩きながら話していた。

「…皇が後宮に？」

嵐が不審げに眉をひそめた。

「そうなんです。なんで今日？いきなり？って皆大騒ぎでしたよ。

後宮の人は準備ができてないって大慌てだったし、お城の人は会議をどうするんだって…」

「それが会議の突然中止の理由か……」

身振り手振り交えながらの百の様子を笑う余裕もなく、嵐は考えをめぐらす。

「王は火晶妃のところへ行つたのだな？」

「そうなんです。もうオレまで荷物運び手伝わされそうになるし、いや、後宮の人間じゃないってんですすぐ追い出されましたけど…」

百の話すところによると、彼の今日の仕事は城内での荷物運搬作業であった。毎日城に届く膨大な量の荷物や書類を、各部署に配送するだけだが、とにかく量が多いのと、城内が広いため、まだ慣れていない百などにとってはなかなかの重労働であった。

何度目か荷物集積所に戻ったとき、彼は後宮宛の荷物を受け持つことになった。通常後宮には専任の所員があり、基本的に彼ら以外一般の人間は後宮に足を踏み入れることすらできない。当然城とは別に独立した外部受け入れ口があり、後宮宛の荷物もそこへ直接届けられるようになっていた。しかし何かの手違いはあるもので、時々後宮宛の荷物が城の方へ届いてしまうこともあるのである。今日が正にそれで、しかし城中が人手不足の状況下、後宮専任の人間が

当分荷受に來られなくなっていたのである。そこでたまたま百がそれを運ぶ係となってしまうたのである。

といっても、後宮の入口に設けられている衛所まで届けなければいけないので、他の宛先と比べて分かりやすく楽な仕事ともいえる。しかし基本的に皇以外男性禁制の場所へ向かうわけだから、百が緊張したのも無理からぬことである。

地図で何度も確認しながら百が城と後宮の境に設置してある衛所に辿り着いてみると、しかしそこには誰もいなかった。そういう場合はどうしたらいいか聞いていなかった百は困ってしまった。荷物をそこへ置いて立ち去るか。しかし百はそのまま王城と後宮を繋ぐ渡り廊下へと踏み込んで行った。城の作法に慣れている者なら決してしない無作法であるが、百はそういった点には無頓着だったというよりも、その時の彼には荷物をきちんと届けることの方が何よりも重要事だったのである。

しかしいくらかも行かないうちに、百は見付かってしまった。

「そなた、ここで何をしていますのです？」

険のある女声に呼び止められ、百はびくりと立ち止まった。彼自身には後ろめたさなどないが、相手の声に含まれた怒気は感じ取れたのである。

「すいません！荷物を届けに來たんですけど、そこに誰もいなくて

」

ぺこりと頭を下げながら百が弁明する。すると相手は鮮やかな青の裳を穿いた女性であつたが、じつと百の様子を見つめていたが、彼に悪気のないのが分かったのか、ややあつて少しだけ表情を緩めた。

近付いてきた女性が、百の手にする書簡の束を見た。

「ああ、これはわたくしどもの荷物ですね。ついからですから、そなた、運んでくれるかえ？」

「あ、ああ、はい！もちろん！！」

怒声を覚悟していた百は、意外にも柔らかい相手の声に、逆に驚き

ながらも、元氣良く答えた。

先に立つて歩く女性の後について何度も角を曲がり、ぐるりと内庭を周ったところで、女性が足を止めた。目の前には閉ざされたままの大きな木の扉があった。思わず辺りをきよろきよろと見回すと、どうやら目の前にあるのは小さいながらも一軒の立派な家で、地面から高床式になった、屋根のある廊下でそういった家と家が繋がられているようであつた。

「ご苦労。ここまでで結構です」

女性が柔らかな微笑を浮かべながら百に言った。彼女の差し出した腕に書簡の束を渡そうと百が近付くと、彼女はそれを受け取らずに意味ありげな視線で百を見た。わけが分からず突つ立っている百の前で彼女は素早く周囲の様子をうかがつた。そして僅かに百との間を詰めた。

「そなた、城に戻るであろう？ ついでに持つて行つてもらいたい物があるのだが」

ほとんど囁くような声に、百は首をかしげた。

「？ はい、オレでよければ」

特に断る理由もないと思ひながら百が答えかけた。しかし言い終わるより先に廊下の向こうで荒い足音がした。

「そこで何をしておる！？」

先ほど目の前の女性にかけられたものとは違ふ、本物の怒声に、百がびくりと振り返つた。見ると、軽い甲に長い棒を持った男が足音荒く歩み寄つて来ていた。

「ここは後宮なるぞ！ おまえ、どこから入り込んだ！！」

居丈高に怒鳴りつけながら近付いてきたのを見ると、どちらかというと線の細い容貌の男であつた。身長こそ百よりも高いが、体つきは同等くらいかもしれないと百は思った。しかし目を吊り上げて睨みつけるその表情は、生真面目そうで怖かつた。

「この者はわたくしが荷物を運び込むよう命じたのです。あまり無礼な物言いは慎みなさい」

百がどきまぎしながらも弁明しようとしたとき、彼をここまでつれて来た女性がすつと一步出て男の前に立ち塞がった。彼女は決して体格が良いわけではなかったが、妙に威厳のあるその言動が、彼女をとて大きく見せていた。甲の男の方が逆にたじろいだようだった。

「東の大門殿。あなた様ほどの方がよもやこの後宮の仕来りをお忘れなはずはございませぬな。一体このたびは」

それでも虚勢を張るように声を励ます男だが、「東の大門」と呼ばれた女は全く怯まなかった。

「当然であろう。わたくしを何者と思うておる。だがしかし、今回は致し方なき仕儀であつたのだ。わたくしは今は重い物を持てぬし、衛所におけるはずの者もおらぬ。ゆえにこの者にここまで運ばせることとしたのだ。」

そちこそ何ゆえこのようなところにおる？ いかにそなたの職務が後宮の警護とはいえ、このような場所までみだりに立ち入る権限はないであろう？ この東の御方のお部屋まわりでそちは何をしておつた？」

逆に鋭い視線で反問された男は明らかに狼狽した。体格や腕力では明らかに男の方が優位であるうにもかかわらず、女の方が迫力で勝つていたようであつた。

結局、忌々しげな表情ではあつたが、男はそれ以上何も言わずその場から立ち去つて行つた。男の背中がすっかり見えなくなつてから、ようやく百は大きく息を吐くことができた。どうやら無意識のうちに息を詰めていたらしい。

「迷惑をかけたな」

一転して柔らかくなつた女の声が百をねぎらつた。そしてまだ突つ立つたままの百の腕から書簡の束を取り上げた。

「あの、オレ、随分失礼なことしたのは オレの方こそごめんなさい。オレ、無知なもので」

百が謝ると、女は一瞬目を瞠つたが、すぐに表情を戻した。頭を下

げている百をじつと見つめて少し残念そうに、或いはやや諦めたように、口許で笑う。

「そなたはそうに謝らずともよい。 もどきなさい。ここま
で荷物を運んでくれて助かったぞ」

彼女の言葉に、百は驚いて顔を上げた。何か用事があつたのではないかと訊いたがそれはもういいのだと彼女は断つた。

「それ、あまりここにおつてはまた煩いのが来るぞ。これ以上そなたの立場を悪くしても良くない。急ぎの用ではないのでな、また別の者にあたらせる。さあ、戻りなさい。」

それから、後宮はみだりに入つてはならぬ場所。以後気を付けるよう。くれぐれもここでのことは他言無用だぞ」

そこまで言われて踏み止まる理由は、百にはなかった。百はもう一度頭を下げると、そそくさと後宮を後にしたのである。

「いやあ、オレ、あんなに緊張したの初めてでしたよー何か妙な緊張感があるもんですねー」

本当に怖い思いをしたのだらうということは伝わってくるものの、どこか軽く聞こえる百の能天気さに、嵐は軽く苦笑した。

「まあ、何事もなくてよかったのう。下手したらそなた、今頃何ぞ処罰を受けておったかもしれんぞ」

少し脅すような響きの嵐の言葉に、百がさつと青褪めた。

「ええ！？でもオレ、何もしてないっすよ！？ただ入っただけなのに……」

「そういう場所なのだよ、後宮というのは」

今更のように恐怖を感じているような百の様子に、嵐は口許を歪める。彼とて大都に來たことすら初めてなのだから伝聞でしか知らぬことだが、なかなか凄まじい話なのだ。例えば道に迷つて後宮の敷地内に紛れ込んだ城の下働きの童子がムチ打ちの刑に処せられたとか、後宮内の誰ぞと逢引しようとした城の下級官吏が去勢の刑に処せられた上、大都の市民権を剥奪されて追放されたとか。仮にそ

れが女性であつても、やはり大都を追放されたりといった厳しい刑罰に処せられているということであつた。

「うあーいやだあー」

百が自分自身が痛みを感じているように顔をしかめて叫ぶ。その隣で嵐は、百の話の中で幾つか引つかかることがあるのを考えていた。

「これで皇が何故火晶妃のところへ行く気になつたかがわかればのう……」

しかしいくらなんでも情報が少なすぎる。明日になればもう少し状況が進んでいるだろうか、と嵐は思った。

彼らは話しながら適当な屋台で腰を下ろした。大都は、さすがに大国・吐蕃の首都だけあつて世界中のものが集中していると言われているが、それは食生活においてもそうであつた。皇の住まう円城では大陸の各地から料理人が集められ、毎食違う国の料理が振舞われているとも言われている。それを真似て貴族たちの邸宅でも数力国の料理人が雇われるのが流行つていているという。

そして一般庶民も、料理人を雇うことは不可能でもその代わりに屋台で各国の料理を楽しむことができるのである。それらは価格こそ安い、反対に競争も激しく、なかなか美味なものも味わうこともできるのである。

嵐と百が選んだのもそんな屋台の一つで、吐蕃民族の料理屋台であつた。嵐は適当に、ただし肉又キのものを、百は適当にとりあえずボリユームのあるものを、と注文した。しばらく待つまでもなく嵐には野菜と穀類の雑炊、百には蒸した穀類の上に野菜や肉を炒めて味付けしたものがかけられたものが大皿で出された。

そういえばこの大量の肉つてもそろそろ飽きるな、と百は思いつつ、彼にとっては薄味の料理をたいらげはじめた。酒豪だが食は細い嵐は淡々と食事をしている。

会話が途切れたとき、ふと百はあることを思い出した。

「そうだ、ししょー、オレ、……………オレ、お願いがあるんです」
半ばは衝動的な勢いであつた。そうでなければ口にすることすらできないと彼は思っていた。

「何だ？改まって」

「こんなこと、オレが望むのってすごいいけないことなのかもしれないんですけど、でもどうしても」

勢い込んでいたのが急に口ごもる。嵐がそんな百を不審げに見つめていた。百は何故だかいたたまれない思いがした。自分自身が口にしたことなのに、自分勝手に罪悪感すら感じている、そんな自分自身の勝手さ、弱さに、怒りさえ感じて百は腹を決めた。

「師匠！」

百が椅子ごと嵐の方に身体を向ける。背筋をピンと伸ばして正対してくる百に、嵐が更に疑問顔になる。

「師匠、オレに、文字を教えてください！」

まるで戦う前に名乗りを挙げているように一言一言はつきり発生する。嵐は今度は意表を衝かれたようにぼけとした表情になる。そんな師匠の前で、自称弟子は深く頭を下げた。

「お願いします！師匠！！」

7・皇公会議 4

甘い香木の煙

流れ落ちる金糸の髪

床上や壁を彩る数多の火燭

床に広がる色鮮やかな布地きぬじの波

銀の小卓に白磁の器

緩やかな袖口からのぞく白い腕

真つ赤な爪先がつまむ銀の箸

なめした獣皮の張られた椅子に

色とりどりの絹紐の飾り房

紫檀の円卓上の玻璃の花瓶に挿された大輪の紅牡丹

金色に香る部屋の中央、燭台に挟まれた椅子上で金髪の美少女が座していた。

赤を基調に鳥や花を色とりどりに刺繍した着物を身に纏い、髪の毛を無造作に垂らしている。

淡い琥珀色の瞳は、どこか焦点の合わない視線で、ぼんやり床に向いていた。

柔らかかそうな白い頬と肉感的な唇が、より彼女を少女らしく見せているようだった。

つと、少女が視線を上げた。

視線の先の大きな窓の向こうで、羽ばたきの音が聞こえ、少しの間の後、一羽の真白な鳥が室内に飛び込んできた。

体の大きさが人間の頭ほどもある大きな鳥であったが、彼女は全く驚く様子もなく、静かな瞳でその鳥が止まり木に降りるのを見ていた。

カッカッカッと軽い音を立てて鳥が止まり木の上に落ち着くと、

ようやく彼女は表情を動かした。

やや大きめの唇が微かに開いて隙間から白い輝きが覗く。焦点の合い難い琥珀の瞳はやはりどこかぼんやりとしたまま、ただ止まり木の上で身じろぎしている鳥を向いていた。

彼女はどこか陶然としたように微笑んでいた。

「誰かそこにいやるか」

視線は鳥に向けたまま、少女が問いかけると、背後の御簾の向こうで、ひれ伏す気配がした。

「ここに、控えております、姫様」

中年の女の声に、姫様、と呼ばれた少女は視線も向けずに答えた。

「皇を、お呼びして。只今、火晶カシヨウの許に天の神の遣いが、いらっしやいました、と」

「かしこまりました、火晶妃様。ただいま」

『皇公会議』第一日目。皇が会議を中断したのはこの直後のことであつた。

『皇公会議』も四日目になっていたが、事態にはかばかしい進展はなかった。

むしろ進展していないからこそ、より事態は深刻さを増していて、各国代表团には明らかに焦りと苛立ち、不審の感情が渦巻いていた。初日よりずっと、皇は午後になると会議を中断していずこへかと消えていた。しかしさすがに各国の代表者たちの目から隠し続ける

ことはできず、皇が後宮の火晶妃の許へ通っていることが知れるようになったのは間もなくのことであった。

その事実が知られると、皆一様に驚き、ある者は呆れ、ある者は憤った。

ことに不快感を示したのは言うまでもなく沢東公国の東公・？倫タクトウ トウコウ シュウリンであつた。しかしそれでは高蘭公国コランが優位に立っていたかといえはそうでもなく、むしろ傍目からも困惑の様子がうかがえるのだつた。そして唯一、部外者とも言える沙南公国シャナンは静観の立場を採っていた。何しろ沙南公国は微妙な立場である。通常の交流、親密度から言えば間違ひなく沙南公国、特に西公一家セイコウは沢東公国の東公一家と親しく、心情的にも近いものがある。また皇室ともそれなりの親密さを保っているが、現在は後宮に西公一族の者は入っておらず、そういう意味では皇室との繋がりには薄い。そして残る高蘭公国とは他二国ほどの交流はなかつた。しかしそれはあくまでも西公一家の個人的な心情の問題であり、国としての付き合いは三国共平等を保っていたのである。

そして今回の「立皇妃」リットウヒの問題に関して、沙南公国は沢東公国にも高蘭公国にも、皇室にも、どれにも特別の後押しをしないことを出国前から決めていた。敢えて言うなら、三者平等に調停役に回るスタンスである。ゆえに迂闊な口をきくことはできないと、珪節ケイセツは日に日に動作も慎重に、口数も少なくなつていった。

もしもどちらかに少しでも有利な言動をしようものなら、たちまち一歩からは取り込み作戦が始まるであらうし、他方からは内部分裂を計られるであらう。いずれにせよ、平穩に事態を収めたい考えの沙南公国にとっては、全く望ましくない事態となることは明らかである。

（このような時、兄者ならどうするのだろうか。あるいは父上が未だ御存命であつたなら、どうなされたらう）

ついそう考えてしまった自分自身に、節は思わず舌打ちした。

（何という弱気だ、俺は今は沙南公国の代表としてここにいるのだ

ぞ
）

己を叱咤することで、節はとりあえず自分を取り戻した。この辺りの切り替えの早さと巧みなセルフコントロールの能力が、節をこの若さで一流の軍人たらしめている理由の一つである。

（おれが政治に関して経験不足なのは分かり切っていることだ。だからこそ兄者は朔林^{サクリン}を付けてくださったのだ。これ以上に心強いことなどないではないか。今は修行だ。珪節）

朔林というのは沙南公国の宰相で、景朔林という。先祖を辿れば節の一族、珪家とも何らかの繋がりがあるということだが、節にとつてはそんな過去まで遡らなくとも、現在ここにいる朔林にこそ意味がある。幼い頃から父親である前・西公の片腕として辣腕を振るってきた人物であり、節にとつても教師であり父親に近い存在であり、父亡き現在は沙南公国で最も頼りになる人物の一人なのである。もちろんそれは節にとつてだけではなく、兄の潤^{ジュン}にとつても同様のことで、その重要な人物を今回大都にまで遣わした兄の心を思えば、節に泣き言を言っている暇などあるはずがないのだった。

前・西公であつた父なら皇との直接の交流もあつた。ならばあの父なら直接皇を諭したであろう。臣下の身として不遜にもとられようが、これほどの重大事、しかもここまでこじれてしまつては、父親代わりの役も、敢えて選んだであろう、そういう人物であつた。

兄の西公・潤ならばどうするか。もしかしたら皇とも同年代で親しく口をきいたこともあるということであるし、やはり直接面談を願ひ出るかもしれない。だがその前にもう少し各国間の調停に動いていたであろうか。高蘭^{コラン}公国とは地理的要因で交流も薄く、従つて北公との交流も薄い、人柄が穏やかで協調性を尊ぶ気質の兄・珪潤ならば相手を安心させることもできるであろう。東公とはもつと親密な話し合いの機会を作っていたかもしれない。想像でしかないが、節に思いつくことと言えば、今はこのようなことしかないのであつた。そしてそんな自分はやはり未熟者だと思わざるを得ない。

（どちらにせよ今この状況を打破する上手い方策が思いつかん）

戦場に例えれば完全な膠着状態である。各国とも互いの出方を疑心暗鬼でうかがっているに違いない。下手に突付けば暴発の危険性もある。それほど緊張感である。

（調停役に俺がなるには完全に役者の力不足だしな）

自嘲でなく素直にそう節は思う。

「こんなことなら最初からはつきり言っておけばよかったかもしれない。東の姫君と火晶妃を両立させればよいと。そうすれば少なくとも西の立ち位置は明確にしておけた。今のようややこしい立場に追い込まれることもなかったかもしれないのに」

しかしそれは今ではあまりに時期を逸してしまった。節の立場から見れば皆が損をしない公平な解決策と思えるのだが、他二公にはそうは受け取られないだろう。日和見ととられ、軽蔑されるか、でなくとも無視はされるであろう。またこの案は、この数日間の様子から判断すると、皇にも受け入れられそうにない。皇にとつても損どころか益だと、節なら思えるのだが、恐らく今の皇は、火晶妃のことしか頭にない。むしろ今回のことで不満や不審を抱いているであろう東公一族を疎んじ始めているかもしれない。そうなると、東公一族を後宮に置き続けることすら難色を示しかねない。そんなことをもし本気で行なえば、皇自身の器量が疑われかねないほど自己本位で狭量なことだが、それ程に現在の皇は近視眼的な人物に、節には映るのである。

「とりあえず、やはり皇とお話をさせていただくしかないな」

節は大きく息を吐きながら言った。小卓を挟んだ位置で、宰相・景朔林も頷く。

「北と東に話し合いの席についていただくためにも、まずは皇のお気持ちをきちんとお聞かせ願うことが最前であり最善であると私も思います」

そうしてその次の段階で、北と東それぞれに話をし、最終的には全員を一つの卓に揃わせる。いくらこじれてしまっただうしようもない状況だと思っただけでも、解決させねばならないなら一歩目は

基本から入るしかない。それが最善だと朔林は考えていた。

「朔林、その役目頼んでよいか。お前なら皇とて無碍にはできんだろっ」

「かしこまりました。力を尽くしてみます」

景朔林と言え、沙南公国では言うまでもなく、吐蕃^{トゥバンオウコク}皇国全体でも高名な人物なのである。政治の世界で彼を知らぬ者はいないと言われ、一目置かれる存在なのである。今現在の状況で節に打てる手は彼の手腕に頼るくらいしかないのである。

兄に助力を頼むべきだろうか。ふと節は思った。しかしすぐにその思いを打ち消した。

（これは俺の仕事。今回俺は沙南公国の代表なのだ。俺の判断力が試されているのだ）

節の決意は、頑固なほどに強かった。それは兄・西公に対する忠誠心であると同時に、表裏で兄に対する競争心があることは否定できなかった。しかしその奥には自分が兄を守るという無意識の感情も働いていたのであった。

強く自分自身の心に言い聞かせると、節は思いを振り切るように勢いよく立ち上がった。大股に歩み寄った窓からは、微かに風が流れ込んでくる。城のどこかで香木を焚いているらしく、ほのかに甘い香りのする夏の風は、ひどくじめじめしていた。

その日も会議にははかばかしい進展のないまま、午前中でお開きとなった。

会議の出席者や嵐^{ラン}も含む書記等職員たちは、いつの間にか姿を消してしまつた皇のことを考えてはため息を吐きつつ、それぞれ議場を去っていく。

控え室に戻つた嵐はそのままさつさと身支度を整えると、城下町行きの馬車に乗つた。同僚達の中にはまだ城内に残つて何やら作業

している者もいたが、嵐には居残りしてまでやるほどの仕事があるとは思えなかった。それよりも町の、ひいては国の様子を直にこの目で見ておいたほうが、彼にとっては何万倍も有益なことだと思えたのだった。

官僚たちの住宅街を通り抜けると、にぎやかで華やかな商店街になる。そこで嵐は馬車を降りた。

この城下町には実に多彩な顔がある。通りを歩きながら嵐は改めてそう考える。

道を埋め尽くすほどたくさんの人間。それらが発する靴音、物音、話し声。それを圧する物売りたちの呼び込み声、どこかで鳴らされる楽器の音。どこかには動物もいるようで、賑やかさを更に演出している。

しかしここをもう少し北へ行けば、突然世界は変わる。画一された街路に外見の揃った高級な家屋群。物音はうってかわって控え目となり、外を動くのは馬車とわずかな人間のみ。

実に道路一つ隔てただけでこれ程に世界が変わるのかと思うほどである。

しかしそこも更に過ぎると、また世界が変わる。

街路は更に広くなり、建物は一回りほども大きく、荘重なものとなる。白と黒の比重が増え、針のように硬質な緑がわずかに生気を感じさせるものとなる。空気はどこか張り詰め、やや重苦しく、だが混じり気の感じられないものとなる。

（いや、そう感じるのは吐蕃王国の政治が宗教と不可分なものであると知っているためか。どちらにせよ沙南公国や沢東公国とは異質な気配であることは確かだが　考え過ぎの可能性もあるからのう）

しかし異質な気配に敏感なもの、嵐の特質であり、彼自身その感覚を信じてここまでできている。だから考えすぎても過ぎることはないとい嵐は改めて気を引き締める。

賑やかな陽の場所があり、厳粛なハレの場もある。そうなれば必

然的に陰でありケである場所もこの町には存在することになる。貧民街・スラムと呼ばれる場所である。

当然おおっぴらにそんなものが存在しているわけではない。しかし大都市の宿命として、陰になる場所、人手のいきわたらない場所、人目につきにくい場所というものはどうしても存在する。そんな場所に一人が住み始めると連鎖的に同種の人間を呼び集める。するとたちまち何箇所か自然発生的にスラムが生まれるのである。それはこの大都に限らず、沙南公国でも沢東公国でも同様である。しかし光が強ければ影も濃くなるという言葉もあるように、大都のスラムが最も大規模で様々な人間が集まっているというのは事実であった。

（だが おかしい）

街路を東西に何区画かを通り抜けたところは水路になっていて、橋がかかっている。人波もややまばらになる橋の上で、嵐は足を止めた。欄干上から覗き込むと、緩やかな流れが南へと向かっている。素早く、何気なく視線を橋の裏側にもやってみるが、人の気配などはない。それこそが嵐の気になっていることである。

（大都に入ってから、暇を見つけては色々なところを歩いてみた。まだ見ていないところなど山のようにあるが　だが、それでもスラムの住人の影すら見えないとはどういうことだ？）

実は、ここがスラムではないかと思われる場所も何箇所か目にしたことはあった。しかし人のいた痕跡は確かにあるものの、少なくとも生物の気配が消えてしまうほどには以前にそこから人間がいなくなっている、そんな場所しか見つけれなかったのである。

（他に見ていない所で考えられる場所といえば地下水路の中と明江ミンコウ沿い。だが明江沿いは宗教区域。そもそも皇の住まいの足下だ。さすがにわしが踏み込める場所ではない。地下水路など入れば目立って怪しまれてしまうであろうし（…）

そもそもそこまで熱心に「スラム」を探す必要が嵐にあるわけではない。誰か特定の物や人物を探しているわけではないのだ。ただ彼はあることを確かめたかっただけなのである。

（噂はあくまで噂だ。だが　わしに確認しうる範囲内言えば
噂は事実だ。恐ろしいことだが）

嵐は水路の流れから目を背けた。背中を欄干に預け、ゆっくりと空を仰ぎ見る。空気はじつとりと暑く重かったが、空は真っ青に晴れ上がっていた。

（大都でスラムの『撤去』が行なわれた。　だが、人は？どこへ消えた？）

幾つかの噂は聞こえているし、幾つかの可能性は嵐も考えている。だが、推測とそれを事実と確認することは重さが違う。

嵐は内臓がぎゅうつと重苦しくなる感覚を覚えた。限りなく苦い、重いものを無理矢理飲み込んだらこんな感じがするかと思うほどの苦痛。我知らず嵐は胸元を掌で擦っていた。喉の奥が重く、微かに酸い感じがしていた。

大都は城壁に囲まれた長方形の城下町である。中央南北をメイン大通りの「夜光の道」が貫き、その東西にやはり南北を貫く水路がある。嵐は東側の水路にかかる橋の中央に立ち、一つ南側の橋を眺めやる。それは嵐のいる橋よりもやや小さいものであったが、人出は劣らないようであった。それも当然で、その辺りは大都の市民権を持たない人間たちのエリアなのであった。しっかりとした建築物はまばらな代わりに、天幕や掘っ立て小屋のような移動組み立て式の露台でひしめきあっている。賑わいや華やかさでは嵐の今いる商業区も劣っていないが、南のエリアのエネルギーさにはかなわないと嵐は思う。

しかし最近、商売目的ではない人間も多いことを、嵐は知っている。粗末な泥だらけの着物を身に着けている男たちは都造営のために全国から召集されてきた労働者であるし、そんな彼らを見送り、或いは迎えているのはその家族たちである。

中には目当ての人物を見つけることができないらしく、よろけた足取りで人波を縫っている女子供の姿もあり、そしてそれは決して

珍しいものではない。

（あれにもあまりよくはない噂を聞いたのう…）

嵐は振り返って北へと視線を向ける。

橋以外の建築物のない水路上は視界が開けていたが、大都北端には明江沿いに築かれた城壁があり、その向こうは見る事ができない。しかし嵐はその先に吐蕃随一の大河・明江がとうとうと流れていて、その対岸に高層の塔が建設されつつあることを知っていた。現在大都周辺に集められている労働者の大半は、その工事現場で働かされているのである。

工事計画は既に相当遅れている。工事現場が事前の想像より遙かに地盤が弱く、ろくに土台も組むことができなかったことが一番の原因らしいが、それ以外にも様々な怪異現象も起こっているらしい。その一つ一つはばかばかしいと思えるもので、単に労働の辛さに逃げの口実を求める群集心理が働いたものとも思われるのだが、中には流言と言いつれぬものも混じっているようであった。実際、深刻な事故も複数起こっており、死傷者も既に多く出ているとの話を嵐は聞いたことがあった。しかし不思議なことに、そういった話はあまりおおっぴらには知られることはないのであった。

嵐がそういったことを気にするのは、百の兄たちが何年か前にこの大都へ招集されたと聞いているのも一因である。そして彼らからの便りは百や彼の母親・ユアンの記憶する限り、なかったというのも嵐には気になっているのである。

（青年期の男であるから、あまり家族に感傷的になることを避ける性質たちの者もおるであろう。だがあの百の血縁者があまり薄情者であるとも考え難い。そもそも労働力は交代制で何度も入れ替えているはずだ。何年もあの現場で働き続けておる者など何人もおらぬであらうに）

そんなことを考えてしまうと、つい胸の奥がひやりとするような想像をしてしまうのである。

（わいらしくもない…感傷的になっておるのか？それともやはり過

敏になりすぎなのか？)

ふっと嵐は息を吐いた。それでも彼には過ぎるほど神経をつかっても、それで肉体に影響が出ようと、今気を抜くわけにはいかないと思っていた。

(わしに課せられた使命は会議終了までを無事乗り切ること　言い換えればあやつは『何かが起こる』ことを予測していたということではないのか？そしてそれは単なる一介の雇われ職員にまで影響が及ぶかも知れぬほどの『何か』事件であるのかもしれない、と) 冗談ではない、と嵐は思う。利用されたまま終わることなど面白くないではないか。

ここは初めて来た異国の地。いわば全くの敵地で信頼できるものなど何もない。ならば何があっても自分自身の力を信じ、それをフルに活かして切り抜けていくしかない。ならば今の自分にできることは、極力多方面の情報を大量に仕入れ、情勢を分析し先を予測すること。そしてその中に自分の進む道を構築すること。それが嵐という人間にできる闘い方であり、今それを実践する場に自分は立っているのだと嵐は思い定めているのである。

その夜、宿舎に戻ってきた百は、一通の書状を持って帰ってきた。一足先に戻って、市で手に入れた書物を読んでいた嵐がそれに気が付いた。

「百、これはどうしたのだ？」

嵐の指差したものを見て、百がああつと声を上げて表情を変えた。

「…仕事の忘れ物か？さすがに恋文などではなさそうだし…」

軽口を叩く嵐に、百はよく意味がわからないながらも慌てて事情を説明した。

それによると、やはりこれは今日の仕事の途中百が受け取ったものであるらしいが、少しその状況が奇妙なようであった。

先日間違えて後宮に立ち入ってしまった百であったが、その怖さをあまり実感しないながらも禁忌の場所というのは何となく肌で感じられたので、それ以降できるだけ後宮に関するのを避けようとしていた。しかし何故かそういうときに限ってそういう仕事も巡って来るものらしく、本日何個目かの荷物が後宮への届け物となったのである。

それはどうやら大変高価な品物らしく、包みが馬鹿でかく、嚴重に梱包されていた。見た目ほど重くはなかったが、貴重品であろうことは百にも想像がついたし、特に慎重に運ぶようにと荷運び係の役人頭に嚴重に注意された百は、色々な意味で緊張しながら再び後宮へと向かった。

今日はちゃんと衛所の役人がいたので、そこで荷物を引き渡した。無事問題もなく届け終わったことに安堵し、行きとは違ってかわって足取りも軽く荷受場に帰ろうとした百を、不意に物陰から呼ぶ声が止めた。

「あなたはお城勤めの方ですか？」

見ると、百と同年代くらいの少女であった。どうやら城の一番下級の女官らしき少女は、やはり城に不慣れな百よりも更に物慣れない様子で、精一杯威厳を保とうとしているものの百の目にでさえ動揺を隠しているのが分かる様子であった。

「ちょうど良かった。お願いしたきことがあるのです。さるお方にお手紙を届けて頂きたいのですが」

吐蕃人らしい、細面に切れ長の目。白皙の頬は内側からほんのり紅に染まっていた。黒い髪の毛はシンプルにきっちり結い上げていて、髪一筋の乱れもない。多くの女官が老いも若きもどこかしら規定外の装飾品を身に着けることで個性を表しようとしている現在の王城の中ではむしろ例外的に全く余分な装飾も着けておらず、シンプルな上衣と裳をきれいに着こなしている、正に女官の見本のような少女であった。生真面目そうな言葉遣いがまたその感覚を助長している。

少女のことはともかく、今の問題は彼女が何やら頼みごとをしてきているということであつた。百は改めて少女の言葉を頭の中で反芻した。

「ええと、そりゃあ、構わないけど　でも、何で？自分で届けたらいいんじゃないの？」

百の答えに、じいつと百を見据えるようにしていた少女が、きつと眉を上げた。

「そんなこと………できるものなら……わたくしが……やっております！」

はじめは勢い込んだ様子であつたのが、徐々に語尾が弱くなる。そして恥らうように俯いた少女の頬が益々紅潮する。しかしすぐに少女は顔を上げ、興奮したことを百に詫びた。謝られてしまうと反対に百の方が居心地の悪さを感じてしまうものである。

「いや、もちろん、オレにできることなら、やるよ？手伝うよ？ええっと、手紙だつたよね？どこに、誰に届ければいいの？」

いささか慌てたように百が言うと、少女がゆっくりと微笑んだ。そして胸元から小さく折り畳まれた紙包みを取り出したのだつた。

「で、それ、預かつて、届け先もそのときにちゃんと聞いたんですけど……でも、何か、そのあとオレ、他のこと色々あつて………仕事じゃなかったし、後でいいかとか思つてたら、何か……」

最後の方は口調がもごもごとすばまつてしまったのは自分の言葉があまりにも言い訳じみていることに百自身が負い目を感じているためだろうかと思ふ。口許に苦笑を浮かべながら百の手から包みを取り上げた風は、その表書きに目を遣つて、ふつと表情を変える。

「……表に届け先は書いてあるつて言つてたから、たぶんあの子はオレに任せて安心しちゃつたんでしょうけど、で、オレもそんな時はなんも考えてなくて、何とかなるかつてそれ預かつたんですけど……よく考えたら、オレ、それ、読めないんすよね………」

「ハク、おぬしはこれを誰に届けるか、聞いたのであろう？何と言っておった？」

嵐の口調は穏やかなものであったが、その内心は穏やかではいらなかった。しかし百に無闇に不安感を与えることも得策ではない。それはとつさの判断であったが、話しながら嵐も徐々に自分の感覚が固まっていくような気がしていた。そしてそれは 残念なことに 決して穏やかな感覚ではなかった。

嵐の問いに百が答えた氏名は嵐の記憶にはひっかからないものであった。しかしその届け先の人物のいる場所を聞いた嵐は、はつきりと表情を変えた。そして自分の感覚が誤りでなかったことを確信し、同時に百にも、そして嵐自身にもあまり好ましくない状況に陥りつつあるという予感を抱いた。

百が件の少女に告げられた届け先の人物がいるという場所は『^{イランチンカン}青瀬池寶館』。円城の東側に設けられた国寶用の宿泊所であり、現在は沢東公国一行が宿泊している場所であった。

嵐は百に断ってから書状の中身を改めた。百は嵐の深刻な様子に否やを思ふ暇さえなかった。そして手紙の内容を無言で読み下しながら益々表情を陰しくする嵐の様子に、すぐにどうやら自分の師匠が尋常ならざる事態を感知しているらしきことを察し、自然と姿勢を正して嵐の様子を食い入るように窺うのだった。

書状は「東の大門」^{オオカド}から「？倫」へ宛てたものであった。当然「？倫」とは沢東公国の東公・？倫以外に考えられない。また、「大門」とは、後宮に入っている姫君に仕える女官の内、最高位の人物に与えられる呼称であり、「東の大門」とはつまり、東の公国の姫君に仕える女官頭を意味する。つまり、「東の大門」とは王妃である東の姫君の腹心の部下の女性ということなのである。

しかし書状の内容の微細さと手紙の宛先人に対する親密な表現からは身内に対するそれ以外を感じ取ることは難しいほどで、そういった文章を王妃付き女官の中でも最高位の人物、言い換えれば『王

妃付き女宰相』という地位にある「東の大門」が記したということはいかにも考え難いことで、であればこれは「東の大門」の名を借りて「東の姫君」、つまり王妃自身が記したものだということは嵐には容易に看破できることであつた。何より柔らかな筆遣いの女文字は、嵐が今まで王城内でほんの数文字見たことのある「東の大門」のものでは決してなかつた。

百の預かつた手紙の内容は次のような内容を伝えるものであつた。今や皇は火晶妃以外の全てに見向きもしない。皇は彼女に夢中で、まるで彼女の希望要望は全て叶えようとでもしているかのようだ。これは伝聞に過ぎないが、現在王城・円城の北側川向に建設中の高樓は、どうやら皇が火晶妃の歡心を得るためだけに、造られているらしい。

また、火晶妃を皇妃としようとする皇の意思が働いているのか、後宮での火晶妃一派の厚遇ぶりは例外としか言いようのないほどで、火晶妃部屋付きの人間たちの横暴振りも日々に余るものになってきている。その様子に、他の姫君方とはともすれば身の危険すら感じるほどだという。

東の姫君自身はさすがに「王妃」の位を戴いた、後宮の最高権力者であるだけあつて、火晶妃方も遠慮するのか、そういった危機感を感じてはいない。しかし今現在後宮をまとめる役目を負っている東の姫君の下には他の部屋の姫君方からの訴えが上つてきていて、それは日々増え、内容も深刻化してきている。既に事態は見過ごせないところまできている　と。

そして最も気になることとして、その手紙には火晶妃周辺のある噂も記されていた。

いわく、火晶妃は神憑りの姫と呼ばれ、そのことでも皇が大層彼女を大事にしているとか。

実際に東の姫君も調査をしたようだが、火晶妃の部屋から聞いた事もない呪言らしき言葉が聞こえたり、特殊な香料や道具など、少

々怪しげな物品の出入りが確認されたようだ。

文面は大変几帳面で読み易く、流麗な筆跡も、くだけた親密さの中にも敬意を充分に払った言葉遣いも、書状の差出人、すなわち東の姫君の聡明さ、優しさ、それら全てひつくるめた上品な氣質を示していて、ただ素直に読むなら大変ほえましい娘から父への手紙ととれさえするものであった。

しかしそんなさりげなさの中に隠されたものは、一触即発の緊張感を孕んだ後宮の混乱振りであり、紛れも無くこれは救難信号であった。

それは実は後に『東姫密書』^{トウキ}と呼ばれることとなる書簡であった。嵐が推測したように、それは東の姫君の手によつて実父、東公・？倫に宛てられた手紙であった。しかしこの『東姫密書』は一通だけではなく、複数の存在が確認されている。そのほとんどは東の姫君の肉筆であることが確認されたが、中には彼女の筆跡ではないものも見つかっている。そしてそれは東の姫君の腹心の存在であった。東の大門の筆跡であることが確認されている。しかしそれらは偽物などではなく、全て本物であった。つまり東の姫君は自ら父親宛の手紙を複数書くと同時に、東の大門にも何通かを書かせていたのである。東の大門の手になるものは姫君の代筆という形をとっており、内容を読めばその文章の意思は全て東の姫君のものであることは一目瞭然であったが、なぜそこまで回りくどい手段をとってまで東の姫君は東公・？倫に書状を届けねばならなかったのか。それは手紙の内容から推察できるであろう。

このような密書が存在していて、しかも吐蕃皇国有数の権力者である王妃・東の姫君が実父で三公の一人である東公・？倫に正規のルートで届けることすらできない。これが現在の吐蕃皇国首都・大都の状況なのだというのである。

（思った以上にこの国は危険だということではないか……いや、少なくともこの円城は　　）

嵐は我知らず背筋が冷えるのを感じていた。嵐は自身が並外れて感覚が鋭敏であることを自覚していた。しかしこれは彼の考えすぎという事態ではないと彼は思った。いや、既にもう、「何か」は動き始めている。それに気が付いていなかったただけなのだ。嵐は思った。

打つべき手は打たねばならない。正直何もまだ解らないままであつたが。

（解るまで待つておれば、それは『敗北』だ。それだけは明確だ）
書状を読み終えた嵐は、はつきりと今現在、王城内部で起きている深刻な事態を理解した。それは今日この時に至るまで吐蕃皇国内で見聞きしてきた全ての小さな事柄が一つの形をとることを確信したということであつた。そしてそれは、ひいては吐蕃皇国全体にも重大な影響を及ぼしかねない、いや、実際に既に幾つかの事態は動き始めているのかもしれないが、確信が持てない以上、それはまだ推論でしかなく、『予感』という言葉でしか表現し得ない事柄であつたが、確実に危機感を持つべき只中に、今現在自分たちは立っているのだということを否が応でも予感させられる、理解せざるを得ない事態なのだという自覚であつた。

8・皇公会議 5

西公・珪潤の朝は早朝6時に始まる。

起床して身支度を整えると、邸内の礼拝所で祖先と神への祈りを捧げる。この日課は彼ら珪一族の習慣であると同時に、沙南公国の統治者・西公としての行事でもある。

沙南地方の中心民族であるユン族の信仰する神は大地の神であり、同時に水の恵みをもたらすものと信じられている。また、人間は死んで一定期間が過ぎるとその靈魂は山を上り、神の一部となることも信じられており、それ故に祖先の霊は神と一緒に祀られていることが多いのである。その神は通常は人跡未踏の山岳に住んでおり、時々空を駆けて雨雲を集め、雨を降らせるのだと言われている。故に沙南地方では高山は神聖な場所とされており、特別用がなければみだりに踏み入ることは禁じられている。神事は代々ユン族の頭領が代表して執り行なっており、ユン族が吐蕃皇国の一部族となり『沙南公国民』となって以降もこの信仰は受け継がれてきているのである。

潤は捧げ持ってきた供え物 何種類かの農作物と酒 を祭壇に供え、特殊な香草を一つまみ燃やす。それから祭壇の前に跪いて短い祝詞を挙げる。この一連の礼拝の所作を、潤は亡父、つまり前西公から教えられた。

まだ物心付くか付かずやの頃から、潤は父に連れられて毎朝儀式の手伝いをしていた。当然意味などよく分かっていたが、父親の真似をしてきちんとできた時などは、何故かとても誇らしい思いをしたものである。最初の頃は父と潤の二人だけで行なっていたが、ある程度の年齢になってからは、実弟の節も一緒にやるようになっていた。その頃はすっかり早起きにも儀式にも慣れた潤が、節に教え、その姿を父親が見守るといって、大人になった今なら微笑ましいと思える光景があったのである。もっとも当時の潤にしてみれば

ば、寝起きの悪い弟をたたき起こして身支度させるところから始まる朝は、彼なりに気を張って大変な思いをしていたのであるが。

しかしここ数日は再び潤一人となっていた。弟の節が副西公として、西公・潤の代わりに王都での会議に出席しているからである。

そろそろ会議も一週間が過ぎるが、特に大きなニュースも伝わって来ていない。そろそろ経過報告でも届く頃であろうかと潤は首都・大都との移動時間を頭の中で計算しながら思った。

心配といえば心配である。しかし信頼もしているのである。節は武人であるだけに、胆力もあるし洞察力も優れている。政治分野の経験不足は否めないがその分は宰相・景朔林が十分に補ってくれるであろう。各国政治家との交際は節が今まであまり経験したことのない緊張感やら何やらがあるだろうし、今頃嫌な思いもしているかもしれないが、本来の気性が明るいつ節のことだから、あまり心配することもないと潤は考えていた。

（それでもやはり『心配』はしてしまうものなのだなあ…）

祭壇の前で跪き、額を地面に付ける様に拝礼しながら、潤は苦笑した。

（いつから私はこんなに心配性になってしまったのだ。年端もいかない子供の使いでもあるまいに）

わざとそんな風に考えることで、潤は気持ちを取り直した。一旦上げた頭をもう一度深く下げて、改めて節や朔林たちの幸運と無事を祈ると、潤は立ち上がった。

この後軽い朝食を摂って、朝の会議が始まる。副公にして大將軍の節と宰相の二人のいない執務は少々不自由でもあったが、たかが二週間ほどのことである。

「私は私できちんと勤めを果たさねばな」

でなければ後で節や宰相に何を言われるか分かったものではない。軽く笑いを浮かべながら、潤はそんなことを思った。

王公会議6日目はどこか異様な緊張感の中で迎えられた。

いつもの時間に所定の席に着いた嵐は、肌をそばだたせるような不穏さを感じていた。何ともいえない居心地の悪さにそっと辺りを窺ってみるが、職員席の方には動きがない。隣席の、やはり書記として臨時に雇われた男などは、いつも通り几帳面に筆記用具と記録用紙を整えていたが、その表情にはこれといった不安感などは見当たらなかった。

それならば会議出席者たちはどうか、と嵐は視線を走らせる。書記、しかも臨時雇いとはいえ役人という立場でありきよるきよるするのはよくないと思いはしたが、どうにも落ち着けなかった。

（居心地悪い…というよりも気持ちが悪い。何だ、これは…寒い、…どうかと言えば…）

その時議場の扉が開かれた。瞬間、嵐は全身が総毛立つような寒気を感じた。

「陛下のおなりである！」

全員が起立して迎える中、皇が入室してくる。表情は平静を装いながら、しかし嵐は内心恐怖を感じていた。彼の背中に汗が滲んできていた。

（禍々しい……なんだ、この感覚は……）

嵐の鋭敏な感覚は、特に自らに危険を及ぼすものに敏感に反応を示す。しかしこんなに「今にも逃げ出したい」などと感じるのは、今までになかったことであった。

書記席の前を皇が横切り、自席へ向かう。優しい花の様な香の匂いが嵐の鼻腔をくすぐった。それは酷い動揺の中にいる嵐にも、これ以上はないほどの幸福感を与える、甘い好い香りであった。

黄色い上衣に紫色の袴を合わせ、頭にはたくさんの飾り房の付いた冠。正装の皇が、おもむろに立ち上がった。

形式的な朝の礼を会議出席者全員で交わした直後、進行役の文官が何か言うよりも早く動いた皇の姿に、全員の視線が集中する。

議場全体をゆっくり一回り見渡してから、皇は口を開いた。

「本日世は宣旨を下す。今この時をもって東の姫より『王妃』の位を剥奪する。そして高蘭公国北公・曜黒の娘、火晶に『皇妃』の位を授ける」

議場に激震が走った。更に皇の言葉は続く。

「東の姫は位剥奪の上、死罪を申し付ける。謀反を企んだ罪は、『王妃』という高位の者としてあるまじき、皇国と皇国民への背反行為である。」

また、かの者と意を通じて謀略にかたんせんとした沢東公国、東公・？倫も罪の重さは同じである。よってこれにも死罪を申し渡す。以後、？氏一族は沢東公国より追放致すこととする」

議場中に声なき動揺と悲鳴が駆け巡った。徐々に興奮は高まり、今度はどつと騒々しくなる。

「陰謀だ！」

どこかで上った悲鳴のような怒号も、誰のものか分からないほど、議場中は混乱していた。

嵐は自分の感じていた「禍々しさ」がこれを予感していたことを悟った。

一体どういふことなのか説明してほしい。かろうじて自失しそうな心を抑えながら東公・？倫が皇の目前に進み出た。血走った目で、目の前に立ち塞がる吐蕃皇国の役人には目もくれず、真っ直ぐ皇を見据える姿は、鬼気迫るものであった。しかし皇は表情も変えず、？倫を見返す。

「東の姫より東公、そなたに密書が届けられたであろう。偽るうとて無駄だ。既に幾つかは世の下にも届けられておる。姫は後宮での最高権力を持つておったが、それを私的な企みのために行きしようとするとは、怖ろしいことよ。かの者は此度だけではなく、今までにも何度かそちに書を届けようとしていたようだな。つまり随分と以前から謀反を企んでおったということだな。しかしそれは今までずっと妨げられてきた。使者は沢東公国へは来なかっただろう。しかし今までは寛大にも不問としてやっておったのだ。それが寵を得られなくなったからといって嫉んだ末、世はおるか罪無き火晶にもでっち上げの罪を着せようとするなど。愚かな行為だと思わぬか。」

そして東公・？倫よ。そちは此度の会議に大量の兵士を連れて来ておる。あれを見て、世はそちの心中を悟ったわ。親娘して謀反の大罪を企むなど、恐ろしくも愚かだぞ」

あれはただのレセプションで演舞を行なうための要員だ。その旨は事前に知らせてある。その東公・？倫の反論に、しかし皇は全く耳を貸そうともしなかった。？倫の全身から血の気が引いていった。全身に細かな震えが走り、顔色がどす黒くなっていた。

「何故皇はそれほどに火晶妃に思い入れをなさっているのか！？」

恐慌状態にある？倫の言葉には、通常皇に対して払うべき敬意が欠けていたかもしれない。だが、誰もそのことに触れなかった。それに気が付く余裕もなかったと言つてよいかもしれない。恐慌状態にあるのは、？倫だけではなかった。今や議場全体を恐怖が占めていた。

「何故と問うか。理由が必要か。では言おう。単純なことだ。火晶は神に愛されておる娘だ。これ以上に余の正妃として、皇国の皇妃として、相応しい器量の者がおるうか？」

皇の言葉に、議場は一瞬にして静まりかえった。静寂の中でよく通る皇の言葉は続く。それに誰も言葉を挟まなかった。否、何かを口にする気力さえ存在しなかったのである。

「火晶は類稀なる能力を有する娘だ。あれは神の声を聞くことがで

きる。そしてその言葉で今まで幾度も世の迷いを救ってきた。

あれは本物の巫の能力者。あれ程に強力な能力者を、世は今までに見たことがない。火晶は神の加護を一身に受けている娘なのだ。これ程に皇国に恵みをもたらせ得る者が他にいようか、いや、在り得ぬ。

皇妃の資質として皇のよき理解者であり助けることのできる者であること、そして民にとってもよりよき母たるべき者であるべきと言われるな。

それならば火晶は正にそのような存在であると、世は判断する」語り続ける皇に、誰も何も口を挟まない。しかしこの無言は肯定の意思表示ではない。単に恐怖による思考停止である。

「あの者の言うことは、全て正しい。あの者の言うことに従って、間違うということがない。何よりも、誰も逆らえぬのだあの娘には。あの者に見つめられると、他に目がゆかぬ。

あの者の語る言葉は、他の全てを圧する。

あれこそ、桃源の心地。世は、この国をあの者の力で、他にない天の原へと導くのだ。

分かるであろう？世と、この皇国には火晶が必要なのだ」

「で、ですが」

もつれそうになる舌を渾身の意志力で動かし、東公・？倫がようやく言葉を発する。途端、？倫は咽たように咳き込んだ。そこかしこで大きな呼吸音が聞こえる。

おかしい、と思った。

恐怖に包まれる議場の中で、嵐はしかし落ち着いていた。それは恐怖の根源を既に見抜き、予測していたからである。そして同時に彼は冷静に周囲を観察し、様々な状況を想定し、それへの対抗策を考え始めている。

嵐の見たところ、吐蕃王国サイドには動揺は薄い。特に常勤の役人や兵士はこの事態を知っていたのかと思えるほど、落ち着いていた。それはもちろん、この断罪の当事者ではないから、ということ

もあろう。しかしそれだけでは説明のつかない平静さが、嵐には不気味に思えた。

沢東公国の人間が様に恐怖し、動揺しているのは当然のこと。沙南公国の人間は、それに劣らぬほどの衝撃を受けているように、嵐には見えた。密かに言葉を交わす副公・珪節と宰相・景朔林の様子が見えた。平和主義の彼らがこの会議中、色々と心を配っていたことを、嵐は知っているそれを思うと、この事態に心痛はいかばかりかと、気の毒に思える。

北公の姿は、残念ながら嵐の席からは見付けられなかった。席を立っていることだけは間違いではないようであつたが。

巡らす視界には、扉という扉全てを警備する冷静な吐蕃王国兵士と動揺する各国代表团という悪夢のような光景が捉えられる。一体これは何の喜劇か、悲劇か。

しかし、と嵐は再び思う。

やはり、おかしい。

皇は何故それほどにその姫君　火晶にこだわる。

皇は、何故それほどに火晶を擁護する。

それほどまでに一人の姫君に、皇ともあろう人間が執着するのは、一体何故なのか。

（　　もしかして）

ふ、と嵐は思う。

（　　もしかして、違うのではないか）

（もしかしたら、実は逆なのではないのか　　）

嵐が思考に入ろうとするのを、一際大きな声が遮った。

「せめて、せめて娘を　　いや、皇の王妃、東の姫君をこの場に呼んでください。ひとことの弁明も聞かず、いかに大罪を犯した者であらうとも、紛れも無く皇のためにこれまで尽くし、働いてきた人間を、例えばひと時とはいえ、『王妃』の高位を戴いた人間を、何も言わせぬまま殺すことは、皇の高名をも汚すこととなると思われませんが」

大きく震えながら、ひび割れた声で、しかし威厳は保ったまま述べる？ 倫の姿は、吐蕃皇国有数の大貴族として、そして高名な武人として、偉大なものだと思われた。

「それも確かに道理。しかしそれは叶えられぬな」

皇の口調は先ほどと何も変わらない。しかし何故か嵐は悪寒を感じた。

「かの者は今朝方、自害を遂げた。謀反人とはいえ、立派な最期であつたとの報告を受けておる」

ぎいっと扉が開かれ、黒い衣装の役人たちが白い箱と盆を捧げ持つて入ってきた。そしてそれらを皇と東公・？ 倫が向かい合っている間の卓に静かに置く。明らかな悲鳴、泣き声、怒号が次々と上る。黒塗りの盆にはまだ鮮血に濡れたままの短刀が載せられていた。

一方、浅い白木の箱には、一房の黒髪と金の豪華な髪飾りが入れられていた。それらの品は「王妃」或いは「皇妃」以外身に着けることを許されない、神獣・鳳凰の姿が刻まれていた。

？ 倫は呻いた。怒りか、絶望か、それは判別し難いものであつた。

「皇は、御乱心なのでは」

混乱を極める議場で、ひそりと副西公・珪節が呟いた。

「節様、それは軽々しく口に出してはならぬ言葉です。決して、決して」

やはりひそりと沙南公国宰相・景朔林が返す。二人の言葉は、興奮し切っている周囲には聞こえていなかった。

「生きて、帰りたいくば、決して」

「わかつて、いるよ。だが、しかし、それは果たして正しい途なのか？ 俺は、わからない。いや、」

「なりませぬ、節様、御自重を」

「だがな、朔林、俺は多分、理解しているよ。予測、できているんだよ」

「節様」

朔林にも節の言うことが、言わんとしていることが、分かった。

「俺で、よかった。兄者がここに来ていなくて、本当によかった。俺は、この会議に西公代理として参加することができて、本当によかったと思うよ」

「節様、私は」

「朔林、まだやるべきことがある。至急、使者を出せ。決して誰にも気付かれてはならぬ。沙南公国の西公へ、可能な限り最速でこのことを伝えるのだ」

主従の間にそれ以上余計な言葉はなかった。すぐに副公・珪節の命令を実行すべく、宰相・景朔林は節の側から姿を消した。

（俺は、本当に良かったと思ってるんだよ、兄者　　）

節の心はこの場この事態にあつて、奇妙なほど、急速に落ち着きを取り戻しつつあった。

不思議なほど無に澄んでいく思考の中で、節は目の前にいない兄に語りかけた。

（俺は俺の務めを果たしたんだ。沙南を守ること。西公を守ること。俺は沙南公国の大將軍。これが俺の本来の務めなんだ　　）

だから決して責めないでほしい。例えこれから先何が自分の身に起こっても。そして。

（兄者は、兄者の務めを果たしてくれ）

皇公会議7日目。吐蕃皇国の首都・大都にて処刑が行なわれた。沢東公国の東公・？倫と数名の文武高官。罪状は皇と皇妃に対する謀反、及び謀反未遂。その罪重大なれば、死罪が相当というものであった。

首謀者とされる元王妃・東の姫君は既にその前日に自害していたが、その亡骸も処刑場に運ばれ、一緒に晒されることとなった。

後宮の元王妃・東の姫君の部屋は解体された。そして東の姫君の共謀者として東の大門も死罪を受けた。

また、この謀略において東の姫君に加担して密書を運んだ人間たちも次々と捕らえられていた。いずれ相応の刑を受けることとなるう。

この他にも処刑された者がいた。

沙南公国の大將軍にして副公・珪節と、宰相はじめ数名の従者である。彼らは皇に対する背信を疑われたのである。

皇国にとって重大な会議に西公本人が参加しなかったこと、そして会議中何度か沢東公国の東公と親密に接触していたことも疑惑の理由とされた。疑惑は濃厚なれど決定的な罪状というものがなかったため、当分皇の監視の目の届く大都に留め置かれることになった。

これらのことは「転送門」によって、その日の内に速やかに各国に届けられた書状によって知らされた。

嵐の円城での仕事は「皇公会議」の終わった少し後まで続いていた。

担当した分の記録を整理し清書しまとめたものを文書課に提出する。その他に先の会議での事件によって数名欠けた分もまとめたり、時に会議関係以外の書類整理も頼まれて手伝ったり、という風に残務処理を済ませて、彼の任務が全て完了したのは8月下旬のことであつた。

支払われた報酬を受け取った嵐は、宿を引き払って再び旅の人となった。

今ではすっかり彼に慣れた馬を操り都を出た嵐は、そのままぶらぶらと運河沿いに北東へと向かった。

大都から離れ、運河が自然の川の姿に近くなる辺りで嵐はさりげなく馬の歩みを緩めた。この辺りになると人家も途切れ、耕作地からも外れ、藪とその先に続く丘陵地と林が近くなる。嵐がそつと視線を巡らすと、程近い藪が割れて、少年が元氣良く駆け寄って来た。「ししょー！ご無事で何よりです！」

「ハク、待たせたのう。そなたも無事なようで何よりだ」

嵐はひらりと馬から降りると、駆け寄って来る百を迎えた。約1週間ぶりの再会であつたが、百は少し身なりが汚れた程度で、他は何も変わらないようで、嵐を安心させた。百の手には荷物を背に括り付けられた馬の手綱が握られており、斑の馬が大人しく続いていた。百もだいぶ馬の扱いに慣れたようだと嵐は口許を笑みに緩めた。

「皇公会議」で東の姫君の謀反が裁かれたとき、共謀者と疑われた者や少しでも関係したとみなされた者には徹底的な搜索がかけられ、容疑者として捕縛されていた。当然現在でも捜査は継続している。

特に姫君の書状 所謂『東姫密書』の運び手となつた者には厳しい追及が行なわれており、投獄された者も多いと嵐は聞いている。正確な数字は発表されていないが、容疑者は数十人は下らないと言われている。

偶然百の手に渡つた『東姫密書』の内容を読んだとき、嵐は即座に危険を感じていた。全身がぞわぞわするような不快な感覚。その時点ではまだ全く掴み所のない漠然としたものであつたが、それが非常に性質の悪いものであると嵐の感覚が警告を発していた。

書状を姫の希望通り東公の許に届けるか、無視をするか、その場合書状をどうするか、手放すのかどうか、それとも少し様子を見るのか。瞬時に浮かんた選択肢の中から、嵐は知らない振りを通すことを選んだ。そしてすぐに百を大都から遠ざけることとしたのである。

百には結局書状の内容は教えなかった。知らなければ、もしも百が疑われ、追及される事態になったとしても、切り抜けることができるだろう、そう考えたからである。過剰な反応だと百は不満そうであったが、嵐に命じられると拒否し切れることは彼にはできなかった。

「でもびつくりしました。まさか王妃様や東公様があんなことになるなんて……やっぱり、あの手紙が問題だったんですか？」

「おぬし……人里には近付かぬよう言っておったのに……」

嵐が苦笑した。どうやら百はやはり納得できずに都に近付いたりしたらしい。師に即座に見抜かれた百は慌てて弁明した。師匠が心配だったのだ、と。嵐も特にそのことは追及しなかった。百の不審も不安も当然のことであり、それでも今現在こうして無事に再会できているのだから、何も問題ないと嵐は思っていた。

「さて、とりあえずはもつと都から離れよう、今回の詳細とこれらの計画は道すがらおいおいと話をすればよからう。それと……」
ひらりと身軽に騎乗すると、嵐は慌てて馬の準備をする百に笑顔に向けた。

「これから、おぬしに文字の読み書きも教えよう。おぬしが知らねばならぬこと、覚えねばならぬことはまだまだ山のようにあるぞ？ わしの弟子ならば、覚悟しておくのだぞ？」

はっと百が顔を上げた。大きく何度か息を吸うと、真っ直ぐに自分をみつめている師匠に、満面の笑顔で答えた。

「はい！もちろん、覚悟の上です！これからもよろしくお願いいたします！」

百の言葉に、嵐は満足そうに頷くと、馬を南西に向けた。その後に百も続く。

吐蕃曆331年8月下旬。首都・大都を出た二騎の旅人は緑濃い中央平原を南下していく。

彼らが向かうは西の公国・沙南公国。「緑の宝石」「水上都市」などの異名を持つ、吐蕃皇国西部の最有力国である。

4・皇公会議・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7698f/>

風都紅塵戦奇譚 四．皇公会議

2010年10月8日15時05分発行